30世紀の笛吹き　{完結}

ハナのTV

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三世紀前、人類の雄は種殺しと呼ばれるウイルスに生殖能力を奪われ人口が大きく激減してしまった。急激な人口減少は生産力の低下、経済の停滞と人類を滅亡の危機へと追いやった。

しかし、神は彼らを見捨てなかった。異世界の移民と言う救いの手が差し伸べられたのだ。

――西暦２９ＸＸ年

異世界への扉「ケイブ」を発見した人類は、ケイブを通じて亜人を受け入れることで社会のさらなる発展を可能にした。

移民を円滑に、そして互いに最大のメリットをもたらすため、恵まれない環境にある亜人を地球へと送る移民システムが確立された。

それを支えるのが荒事、汚れ仕事請負人の移民保護官「笛吹き」たちだ。

夢の笛吹きとなったマーマル（犬獣人）の少女「ベッキー」は、凄腕の先輩笛吹き「ターキッシュ」と出会い物語は走り出す

小説家になろうでも投稿しました。

完結しました。　ＰＤＦで読むと流れが掴みやすいかもしれません

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 23
第3話 …… 39
第4話 …… 56
第5話 …… 72
第6話 …… 87
第7話 …… 101
第8話 …… 115
第9話 …… 126
第10話 …… 139
第11話 …… 155
第12話 …… 168

第1話

犬

色とりどりの布で作られた衣装をまとった男がハーメルンという町にやって来た。この町は鼠に荒らされて困っていたので、鼠取りを自称する男に町人達は鼠の駆除を求め、男は笛を吹いて鼠を引き寄せ、川に溺れさせた。

しかし、ハーメルンの人々は鼠駆除に成功した男に払うべき報酬を渋った。彼がよそ者だったからだ。それが男を怒らせてしまった。

一度帰った男だったが、その後、笛吹男はもう一度街にやって来て笛を吹き、子供を大勢洞窟の中に誘い入れ二度と戻ってこなかった。

その後の子供たちも、笛吹も、どこへやら。居場所を知る者は無し。街の人々は後悔の中、子供のいない家で涙を流すのみだった。

小さな本を閉じて、私は就職先へと向かうモノレールから見える景色を見つめる。時間にして、午前七時半だと言うのに暗く、コンクリートのひんやりとした壁をネオンや電灯の光が装飾し、無機物特有の温かみの無さを覆い隠す

空には金属の板が張り付いているようで、太陽の光など拝めるはずもない。何故なら、此処は地下で、地上ではないからだ。巨大な地下空間に作られた街を照らすのは人口の光しかなく、つまり此処には地上の星しかないことになる。

地の底に作られた都市、太陽も雨も天の無組が存在しない無機質な街。そこが私達亜人の住まいであった。

アンダーハイブと呼ばれるこの町は私達亜人の住処だ。元は人間達の対核弾頭地下都市だとか言われていたらしいが、今は私達と人間を線引きするための物だ。昔、色付きの人間と白い人間は区別されていたと聞いたことあったが、似たようなものだろう。

人間と私達は地下と地上に分けられて、いくつか地上へと伸びている、まるでジャックの巨大な豆の木のように聳え立つエレベーターのみが唯一の交通の手段で、この都市のシンボルだった。

あの向うに青々とした空がある、皆を照らす太陽があると聞いて、この町の子供達、私も含めて皆があの巨大なタワーを仰ぎ見たものだ。

そんな巨大な建築物を眺めていると、終点であり目的地である場へとたどり着いたようで、アナウンスが流れた。

私はフウ、と息を吐き、席から立ち上がって列車を降りた。大勢の亜人たちがドアから出る中、そのヒトの中をかき分けて行くと、すぐ職場のゲートが目の前に現れた。

一見すると普通の改札口と何ら変わらないが、その傍らに直立不動でたつ警備員たちの手にはスリングで吊り下げられたサブマシンガンが握られており日常の通勤ラッシュに幾分か物騒な雰囲気を作り出していた。

だというのに、そこを通る者達は何ら気にする様子はない。むしろ武装した彼らに挨拶を交すほどだしかも、そんな職場に向かう者達の装いに至っては自由で、スーツを着こなし、まるで人間の様な出で立ちをする者もいれば、ポロシャツの者もいる。

とても厳重な職場に向かう方々とは思えなかった。降りる駅を間違えたのか、と一度確認したが間違いはなかった。

しかし、そう思う自分もパーカーにミニのスカートとおよそ、地上では仕事に行く姿として考えられないらしい服装をしているのに気付き、逆にスーツ姿の連中をクスリと笑った。

私達は亜人なのだ。何をそこまで真面目に人間の真似をした格好をしなくてはならないのか、と。

ゲート前に着くと、警備員として働いている一人が近づいてきた。その顔は鼻の削がれたスキンヘッドの人間そっくりで、一瞬ギョッと驚いたが肌の一部が固く鱗のようで、7色も灰であるのを見て、そういう者だと理解し、必要書類を見せる。

「ＩＤも」

事務的な口調の彼にうなづいて私は首から下げているＩＤを見せ、ついで自分の特徴である、犬歯を見せつけるためにニカっと笑って「ワン」と一つ鳴いて見せた。よく発達した四本の歯を見て、警備員は

訊いてきた。
「……犬か。耳は無いんだな」
「私の場合はね。アンタは？」
「いわゆる地底人〔ノーズレス〕。お互い笛吹に誘われた者同士さ」
　地底人の彼は書類にサインを書き加えながら私の名前を見た。すると何を思ったか、ため息を吐いた。
「ベッキーか。本当に犬の名前だな。人間ってやつは何でこんな名前にしたがるかねぇ？」
「いいじゃない。私はそこまで嫌いじゃないよ」
　市役所から与えられた私の名前に彼は私を憐れむかのように言った。ここでは名前は人間が勝手に押し付けてくるのが普通で、不満も多いが私は特に文句はなかった。
「ま、本人がいいならいいけどな」
　ＩＤを返してもらい、「ありがとう」と一言礼を言って、その場を後にする。先ほどから、私と同じような人間によく似たヒトがこの門を通り過ぎていく。
　そこに人間はやはりいない。似た姿はいても、やはりヒトなのだ。意識を集中し鼻を利かせれば、その微妙な体臭の差異を感じ取れるし、見るだけでわかるものだ。
　廊下を歩き、チラリと横目で誰かを見れば、皮膚の上に紋章の様な痣があったり、うろこを持っていたり、ともし、この世界について何も知らない者が居れば、アミューズメントパークのキグルミのパレードや映画の特殊メイクを施した役者たちが映画の撮影に出かけている、と勘違いするだろう。
　此処にいるのは殆どが移民に近いものなのだ。今や西暦三十世紀。この世界の人間達が取った政策と偶然の末に出来上がった発明品が今の社会を作り上げた。
　そして、その結果が私の就職先と言える。
　廊下を通り抜けて、新入りのためのオリエンテーション会場へとつき、見回してみる。やはり、さっきと同じようなヒトがパイプ椅子に腰掛けて手元の資料を読んだり、隣の者と話したりしている。

折り畳みできる長テーブルとパイプ椅子が詰められただけの簡素だが、大きい室内で空いた席を探す。ときおり鬱陶しそうな顔を向ける誰かさんを横目で見ながら。そうしていると鼻孔に香水の香りがツン、と漂って、顔を少ししかめた。香りのする方向へ顔をやると私と同じような年代の女の子がいた。

赤いスーツにタイトスカート、スレンダーな体つき。美人、美女と言うより可愛らしい少女と表現するのが正しい見た目だ。人間の十代の少女に見える外見だが、目元に書かれた涙のタトゥーに見える痣を見て、違うと判断した。人間の職場では顔に入れ墨など、まずありえない。ただし、生まれついての物なら話は別となるから、そう判断した。

「此処空いてるよ」

どうやら、彼女は親切にも、空いている席を見つけてくれたらしく、私に座るよう勧めてきたのだ。私は一回頭を下げて、座り礼を言った。

「ありがとう。えっと、名前は？　私はベッキー」

「ミナミだよ。よろしくね、ベッキーちゃん」

初対面でも、フランクに接する彼女は手を差し出して握手を求め、私はそれに応えた。彼女はニコリと笑いつつ話しだした。

「ベッキーも笛吹なの？」

笛吹、とある職業のあだ名を彼女は口にして、私は頷いた。このアンダーグラウンドではその職業はある種の羨望とある種の蔑みが入ったものとされている中、その職場でその名を口にすることは大胆とも言えた。

もしくは彼女がそこまで深く考えていないだけか。

「そっか、そっか。私と同じだね～。ベッキーちゃんと一緒に働けたらいいな」

「そうだね。私も知り合いが多いほうが助かるし。それに、この仕事キツイって話だもんね」

「大丈夫だよ。ベッキーちゃん強そうだし」

「そう？」

「なんか、研修の実技とか凄そうだもん」
職場に入る前にさせられた研修の事を彼女は言った。確かに私の実技は高得点の部類であり、試験管も悪い顔はしなかった。
ただ、今年の筆記では星降る新入り、と言われるほどの高い平均点の中、私が出した点数を見るまでの話だったが
「筆記は言わなくても分かるでしょ？」
「うん、ダメなんだ」
適当に会話をしていると、部屋のスクリーンの前に何人かの男たちが歩いてこちらを見据えた。スーツ姿のヒトは恐らく私達の先輩だろうか、顔に傷がついていたりしているのがわかる。その中で特に気になったのが二人いて、一人は顔こそ悪くはないものの、背は低くチビで短い黒髪もゴワゴワで固そうだ。ロクな手入れはしていないと見えて、目つきもアーモンド形で悪く、粗雑な印象だ。
もう一人は老人で、オールバックにまとめられた銀髪で、口元に髭を生やしている。スーツの上に気取っているのかブラウンのダスターコートを羽織り、モノクルをかけている。このような場では到底合っているとは言えない格好だが、その男は堂々としている。
だが、奇妙な点はそこだけでない。外観もさることながら、嗅覚がガンパウダーの香りを感知したので、気になって仕方なかった。だが、そんな私の疑問について考える前に壇上に一人の男が上がり、そちらに集中し、私たち全員がその人間の男に注目した、
肥え太っていて、ノリの利いたスーツがはちきれんばかりの男はマイクに近づいて話そうとしたが、マイクの調整が上手くいっていないのか、耳障りな音が会場に響き渡り、他より耳がよく利く私は耳を塞いで顔をしかめた。
「失礼……まずは自己紹介から、私の名前はフッカー・ベネリ。この仕事場のボスであり、君たちに給料を配布する、いわば君らの神だ」
苗字付きの男、人間は尊大な口調で、マイクの件を謝罪し、自らの存在を神だと告げた。過去、イエス・キリストと言う男も自らを神の子と自称し、様々な宗教の開拓者たちが神の使いや化身と言ったというが、彼ほど傲慢な態度であっただろうか。

「君たちと違い、私は人間だ。この世界で生まれた、いわば純粋種だ。しかし、此処ではそんな事は問題ではない。此処での君たちの職務はいくつか存在するが、主な任務は一つ。この社会の土台作りだ」

舌打ちをかますのが何名か、私の聴覚が察知し、私はその何名かに同調した。

フッカーと名乗った男は自分の後ろにスクリーンを展開させて、グラフと年表、そしていくつかの写真を私達に見せた。それは歴史の授業だった。

「今より三世紀前、人類社会で特異なウイルスが発祥したのはご存じだろう。『種殺し』と呼ばれたソレの発症により人類は危機に瀕した」

種殺し、それは女として、名付け親の顔が見たくなる名前だった。文字通り、種を殺す、オスが「種なし」になると言う奇病は生物の種をゆっくりと真綿で絞め殺す代物であった。発見者が一体、どちらの意味を込めて、あるいは両方の意味を込めて、つけた名前は最低の一言だ。

この奇病によって、出生率の激減はとどまることを知らず、世界的な高齢化、少子化が進んだのが今の時代までの人の歴史だ。実際、かなりの数の人間が減少し、かつては９０億もいた人類は今では２億程度と言うのだから凄まじい。

この奇病はまさしく人類の天敵だった。喜んだのは頭空っぽの猿の如き性欲旺盛な低階級の者だけだったろう。なにせ、社会を支える柱が少しづつ、削られていくのだ。「ヤンキーの子だくさん」なんて言葉は崩壊し、自分たちの身分が下々の労働者達に支えられていると知っている富裕層にはたまらない恐怖だったろう。

一時期はこの奇病にかからなかった者のクローン児の生成によって、この問題を解決しようとしたがテロメアの短さからくる短命さと、倫理的問題を克服できず失敗。さらに呪われていたのか、この実験で作られたクローンの八割は無頭児、奇形児だったと言うのだから、救いがない。

ピラミッドの一番下が崩れれば、上は元の位置に立つどころではなく、容易く地に落ちてしまう。下の段が崩れたダルマ落としがいつま

で安定できるかなんて、答えられないのは乳飲み子くらいだろう。しかし、神も人類を愛してくださったのか、一つの希望を作った。
「しかし、救いの道は確かに存在した。まるで海を割ったモーセの道のように……〔ケイブ〕と呼ばれる一種の空間にできたホールの発見によってソレは確かに変わった。我々は異なる世界の窓を、扉を見つけ、そして世界の管理者となった」
そう、そのケイブこそが重要だ。此処とは全く違う世界、平行世界とも違う異なる次元のはざまの先を見つけた我らが人間様が取ったのは、異世界の管理だった。
ケイブ、此処と何処かを繋ぐホールのことであり、それは窓であり入口だ。あらゆる次元を飛び越えて異世界との交流を可能にしたそれは世界を広げた。そして、そこから労働力たるヒト、すなわち私達ヒトを運び出そうとし、それが成功した結果が今の私達だ。
「君たちはその尖兵だ！　異世界の不幸な子を保護し、この世界で正しい教育を受けさせる、すなわち世界の守護者である！」
大仰に言われた私達の仕事。それは子供の保護という名目の働き手の確保。すなわち移民の受け入れ、または回収というものだ。悲しいことに異世界でも紛争だのなんだのが存在しており、不幸なヒト達に溢れている。
私達は異世界に赴き、そんな不幸な方々を保護し、この世界で安全に暮らしてもらうという仕事をするのだ。
無論、批判はある。衣食住を与えて、仕事場すら与える。何と優しい奴隷制度だろうか。かつて、私の祖父が皮肉そうに愚痴っていたのを思い出す。
人権を守ると言う名目の労働力確保、私達は人間の手先となって、ヒトを連れてくる誘拐犯なのだ。
だが、それが無ければ私、すなわちベッキーは存在しなかったかもしれないのだ。どこからか連れてこられた移民の末裔たちが、私達だ。
私達が人と違うのはこのためだ。皆、どこから連れてこられた者の子孫たちで、人によく似たヒトなのだ。

故につけられた職業の名前をよく知っている。私の名はベッキー。犬に少し近いだけで与えられた名前は嫌いではないが、この職業の名前は好きではない。マ―マルハンター、もしくは「笛吹」たちである。そう、今日から私は笛吹のベッキーになるのだ。

壇上の男に聞こえないように音量を調節して口笛を吹いた。職務には忠実であった方がいいと言う、祖父からの教えに従って。

先

観葉植物の植えられた植木鉢にソフトドリンクと缶コーヒー満載の自動販売機の列、簡易なベンチが置かれた休憩所で俺達はこれからくるであろう新米たちの事について駄弁る。

「最近は随分若いのが来るようになった」

ベンチに腰掛けて缶コーヒーのプルタブを開けて、中身を喉に流し込みながら目の前の元相棒のコルトの話を聞く。齢は人間基準で５０代後半の爺様が口に出したのは今日のオリエンテーションの新人たちの顔ぶれについてだった。

「どう見ても十代の子供の連中を相方にしなくてはならないとは、全く許しがたい業務妨害だと思わんかね？　ターキッシュ」

「そう言うなよ、コルト爺さん」

壁に寄り掛かってダストコートの裏側に仕舞った自分の愛人を撫でながら、これからの相方に頭を悩ませる爺様に俺は同調したが、とりあえず諌める。確かに連中のような素人と組んで仕事をするなど願い下げだが、俺達にはその決定権はないのだ。

笛吹は簡単に言ってしまえば、異世界の紛争、飢餓、疫病、文化的レベルなど、あらゆる生存に困難な場所から子供を保護し、こちらの世界で職や住居、教育を施すという物だ。

この地下世界はそんな移民たちの住処であり、人間様の大切な労働

力として中、下層を担っているわけで、俺達はいわば経済とやらを支える大事な土台を作るための職人という訳だ。
故に笛吹の殉職率は高い。ベテランだろうとルーキーだろうと平等に死は訪れるもので、足りなくなった人員を補うために最低年齢を引き下げたのだ。
俺がここに入ったときは１８歳。今年はそれよりも下がったとみていいだろう。
「今は人手不足だ。猫の手でも、とかいう諺に従っているんだろうさ」
「猫の手か……」
コルト爺さんは愛人いじりを止めて顎に手をやった。鼻を鳴らして、嘲笑した。
「それしか用意できんのだから無能もいい所だ。我々は手だけでなく足や目だって欲しいというのに」
コルト爺さんの言葉は正しく、俺もそれに同意し頷いた。欲しいのは「手」という人員ではなく、それ以外の別の物なのだ。新型のベストなり索敵の為のセンサーが欲しいのだ。
なのに、それらを無視して一番金のかからない人員ばかりを増やして、増やすのは育てる手間とノルマ、それにハードルだけと言うのだから、頭に来る。ため息をするだけストレスを吐き出せられれば、どれだけ楽な事か。
だが、最近では愚痴にすら神経質な上司すらくる始末、それにもめげずに愚痴を言い続けて生きた俺達は今や立派な老害認定され、無事爪弾き者に昇格した。そのせいか、やたらと危険な仕事ばかりが飛び込むようになりお偉方の人間様は一刻も早く俺達が〔未必の故意〕で死ぬのを心待ちにしていると来ている。
俺はそんなお偉方の顔を思い浮かべて、葉巻を吸うダンディーな男のイラストが入った缶コーヒーを握りつぶして、ごみ箱へと投げ捨てて立ち上がる
「手だけでも貰えるだけいいって事か？」
「かもしれんな」
「ま、この後の交流会で全部わかるか」

俺がため息交じりに語るとコルト爺さんは明後日の方へと目をやっていたのに気付いた。何事かと思い、爺さんの視点の先にある物を見ると、そこには先ほどのオリエンテーションに顔を見せていた新入りの姿が二人いた。

一人は赤いスーツにタイトスカートの小柄な少女だった。肉付きはいいとはお世辞にも言えず、目を楽しませるという点では魅力に欠ける。一部のマニアにはたまらないだろうが、俺にはそのような趣味は無いため憮然とした顔で見た。

だが、もう一人の方へ眼を向けると、今度は対照的で感嘆の声を上げた。スタイルは良い方でスカートの裾から見せる脚も長くて悪くない。グラマーでショートヘアの彼女は目つきからして強気そうであり口の端から見せる鋭い八重歯からマーマル、犬人だと判断できた。

「……若い新入りだな」

「爺さんはどっちがいい？」

「小柄な方だ。あの小ささと見た目は役に立ちそうだ」

「じゃ、俺は残りだ」

俺達は一目見て思った。この二人使えるかもしれない、と。外見はさておき二人の筋肉の付き方、体格に顔つきと見て俺は俺の、コルトはコルトの思惑に合うかもしれないと見た。

俺達が彼女らを見ていると向うも気づいたのかこちらを見て、小柄な方がもう一人の手を引っ張ってこちらに来た。

「こんにちは！　今日から笛吹になりました。ミナミです！」

小柄な方がミナミと名乗り、元気いっぱいに俺達の蔑みの名前である笛吹きと口に出し、俺とコルト爺さんは思わず苦笑した。もう片方が額に手をやって呆れていた。先輩に向かって、その名前を堂々と言うのは失策であるとデカい方は分かっているようだ。

「元気は買うが、その呼び方は頂けんな。私の名はコルト……そちらのお嬢さんは？」

爺さんはヒトのよさそうな微笑みをしながら、もう片方に名前を訊いた。パーカーを来たラフな彼女は頭を下げて名乗った。

「ベッキーです。見ての通りマーマルです」
その後に八重歯をキラリと見せつけてワン、と続けた。
犬と人が合わさったようなヒト。どっちなのか、よく分からない人型としてヒトは彼女らをマーマルと呼ぶ。少なくとも哺乳類だからと言う単純なものだが、俺にしてみればマーマルがパートナーになってくれれば嬉しい事が多いため、この場は笑顔を取り繕いコルト爺さんに倣って挨拶をする。
「よお、初めましてだ。俺はターキッシュだ」
「どうも」
握手をしようと手を差し出したが、ベッキーは一瞬俺の顔をチラリと見やり目に警戒心を持ちつつ口元に笑みを作って握手に答えた。表情は隠しているらしいが、少し下手と見れた。ベッキーはコルト爺さんとも握手をしてる時も同じ顔をしていた。
「お前も笛吹か？　それとも別の部署？」
「私も笛吹ですよ。憧れの職場なので」
「いい事だ。憧れの職場……つまり俺はその憧れのヒトっていう訳だ？　どうだ？」
おどけて言って見せたが、ベッキーは引きつった笑みを浮かべた。イメージと違う、もしくは俺を憧れの職のヒトにしたくない、というのがモロ分かりだ。それも当然だ。憧れという物は一瞬で消えうせる物だ。特にアンダーハイブの職人と言う奴はそろってロクデナシに変人の見本市のため、出会ったが最後憧れなんて消し飛んでしまうものだ。
もっとも、目の前の女が本当に憧れなんて物を抱いてやって来たかなど知りはしないのだが、そこは黙っておくのが吉だろう。
「……ちょっと違いましたね」
「マイルドな表現でありがとう。ま、いいさ」
気の強そうな女ではあるが、一応は気を使ってくれているようだ。この地下のヒトにしては躾がよく行き届いている。大抵は生意気な口を叩くものだ。そして、その口調が直る前に大体が職を離れる羽目に陥るのだから、これだけでも貴重だと言えないでもない。

「あの、私達オリエンテーションの後に先輩方との交流会があるって聞いたんですけど、それってどこで行われるんですか？」
交流会、その単語をミナミから聞いてコルト爺さんはニヤリと一瞬意地の悪い笑みを浮かべたが、すぐに先ほどの顔へと戻り、甲斐甲斐しそうに答えた。
「ああ、交流会ね。それなら私達も行くところだ。一緒に来るかね？」
「是非！」
屈託のない笑みを見せるミナミを爺さんは孫娘を見るかのような面をする。その実、頭の中はこの後の交流会で色々と披露することでいっぱいに違いないだろう。それに気づいているのかベッキーの方はその爺さんの危険な香りを嗅ぎつけているようだ。眉間にしわを寄せて爺さんを警戒している。
「何か嗅ぎ付けたか？」
俺が試しに訊くと、彼女はすぐに表情をごまかし、答えた。
「……いえ、私嗅覚は鈍いもので」
「謙遜するなよ。その才覚は生かした方がいい。先達からのアドバイスだ」
「はあ」
生返事にニコリと微笑み返して、俺と爺さんは後ろに衝く二人を横目でとらえつつ、耳打ちする。左のこめかみを押し込んで、二人に聞こえない話をする。仕事の打ち合わせをする時はいつもこうしている。
『とりあえず、二名は確保だ。後はアンタの腕前のご披露して，オシマイだな？』
『油断は禁物だぞターキッシュ』
コルト爺さんは一切のおふざけを取りはらった口調で述べた。彼は手のひらの感触を確かめて何故、声音を変えて話すかを俺に教える。
『握手をした時気付いたろう？　ベッキーは手のひらが厚く、固いナイフダコがあった。刃物をよく握りしめていたのかもしれん』
『そいつは分かっている。チビの方は？』

『人差指の第二関節と親指にタコがあった。銃の経験は豊富かも知れん。やんちゃな娘は嫌いじゃないがね』
『ありゃ野良犬の類さ」
感想を述べつつ、成程と納得した。どうやら二人とも生まれはそんなに良くないらしい。彼女らの年齢は人間換算で１６かそこら。その齢で妙に凶器に手慣れている手つきをしていると言う事はそういうことなのだろう。
ミナミは拳銃、利き手じゃない方の手のひらを調べれば少なくともリボルバーを使いこなしているかどうかも分かったろうが、握手は基本片手で行うし、利き手で行われるのが常だ。握手で利き手じゃない方を出すのは余程の手練れ、それも人様に顔向けできない奴だけだ。
ベッキーの方はその点言うと分かりやすい。手のひら全体が固く、親指にナイフダコがあった。それだけなら料理屋の娘だったと言う点も考えられなくないが、それなら、実家を突くだけで済むので、こんな職場に就こうとする意味が薄れるし、先ほどから見せる妙な勘の鋭さに合点がいかない。
それにパーカーの上でハッキリとは見えなかったが、女性にしては腕が少し太目に思えたし、何よりあのオリエンテーションで口笛を吹いていた。
仕事で口笛を吹く奴は二通りだ。余裕のあるやつか、状況も分からない程の馬鹿か、だ。俺にはこの女が後者には見えない。馬鹿ならここまで察しがいいようには思えないからだ。
笛吹として口笛を吹く、そんな冗談を実行できる度胸をもった女、見込みがある。これなら、使えるかもしれない。
『使えるな』
『ああ。コレはいい原石かも知れんな』
俺達が手だけではなく、目と耳を欲しがった。だが、すぐ目の前に大方揃うであろう素材が転がり込んできたのだ。素人と思っていたが、存外そうではないのかもしれない。使わない手はない。
そんな野望に思いを馳せて、俺達は交流会のための場所、模擬戦闘用のケイブの元へと歩を進める。何のことは無い、ただの新人いびり

の一つだ。精々頑張ってもらわなくてはならないだろう。

犬

怪しい二人の先輩に連れられて早五分。長い廊下を歩いて行くたびに雰囲気が違っていくのが分かった。少し前までピカピカで綺麗だったはずの廊下の壁はどことなく薄汚れ、通りかかる自販機の一部はひしゃげて故障中の看板が立てられている。自販機の内容も缶コーヒーやジュース、炭酸飲料などではなく、煙草やアルコール類とガラが悪くなってきており、何より匂いからして不穏だ。

鼻孔を刺激するのはガンオイルにグリス、そして硝煙と汗の香りで、それらの混合ガスの匂いに顔をしかめた。この二人が連れて行こうとしているところは少なくともロクな場所ではないのは確かだ。それに気づいているか知らないがミナミはニコニコしたまま二人についていく。

警戒心が無い。よほどの天真爛漫か、それとも最高に察しが悪いかのどちらかだろう。そのため、私はますます前の二人を警戒せざるを得なくなる。思えば二人は最初から怪しすぎた。初老の方はダスターコートの内側に右手を突っ込んで何かを弄って、もう一人は妙に引っかかる言葉を放ってくる。共通しているのは視線の動きが何となくだが他の男とは違う気がすると言う所だ。

女性という物は私も含めて視線に敏感だ。男と言う生き物は女のパーツを見るポイントが大体同じだ。顔から胸、尻となめまわすように見て、脚でスローモーになるのが私に対する視線の動かし方だ。

確かに二人は最初は同じように目を動かした。その後の視線の動かし方は私も経験したことないものだった。一体何が目的なのか、さっきからよく分からない。

「どこに行くんですか？」

試しに訊いてみても、二人は楽しそうににやけるばかりで何も答え

ようとしない。と言うより、話を聞いている様子も皆無だ。
「先輩方～？」
　大きめの声にして聞いても何も変化がない。隣のミナミはそんな私を見て、「焦らないで、着くのを待てばいいのに～」などとお気楽なセリフを吐きだす。そんなのは性分ではない、バスが時刻表通りに来なければ憤慨し、ＡＴＭで謎の行動を繰り返し行列を気にしないばあさんにゆとりの心ひとつ持てない私には無理な話だ。
　いよいよもって忍耐が出来なくなった私は表情を作るのをやめて、大声で聞こうとした。
「ちょっと、いい加減に！」
「着いたぞ、諸君」
　コルトがそう言って立ち止まった。その拍子私は彼の背中にぶつかり、尻餅をついてしまった。それを見てターキッシュが笑う。
「慌てなくてもいいぞ、逃げはしないんだ、フリスビーみたいにさ」
　癪に障る言い方だ。それともワザとそんな言葉を選んでいるのだろうか。そんなにも私を怒らせてみたいのか、冗談じゃない。ストレステストをしている訳じゃないのだ。
「……それで此処は？」
　目の前にあるのは金属でできた扉だが、その向こう側からざわざわと大勢のヒトが騒いでるようだった。この先に何があるのか、もうすぐわかる。それは楽しみではないわけでは無い。彼ら二人が一体何をしようと言うのか興味がある。
「では、どうぞ」
　ターキッシュが言って扉を開けた。大きな扉が音を立てて開かれ、その向こう側を見せた。その視界に広がったのは金属探知機付きのゲートに似た者がいくつもあり、その傍らにはやたらと古風なバーカウンターとミニステージがあり、その周辺には私と同じ新入りの群れがあった。種類問わず、笛吹の新米たちが集められて、これから何が始まるのかを今か今かと待っている。
　しかし、目が行ったのはそこではなく服装だった。皆が皆、同じような服装を身に着けていた。全身を覆う黒のインナーの上にＯＤカ

ラーのボディ―アーマーにチェストリグを装着し、下半身は昔理科の授業で見た筋肉図のように文様が入ったゴムに似た質感のパンツにニーパッドとレッグホルスターをつけている。
細かな違いとしてはヘルメットをつけているか否かぐらいの差だ。大体が同じ装備をしている。そんな彼らを見ていると、肩を叩かれてターキッシュから同じような装備を受け取った。
「更衣室は向うだ。時間はあと十分ほどだから、ノロノロするなよ」
「いきなり、何です?!」
「先輩からの歓迎会って言ったろう？　心配するな、痛いだけで済む」
肩を叩かれて更衣室に向かって軽くどつかれた。渡された装備を見つつも、私は後ろを振り返って人ごみの中へと消えて行くターキッシュの背中を睨む。
「あの野郎……!」
「怒っちゃダメだよ、ベッキーちゃん」
隣に来たミナミが笑顔で言う。邪気のない笑みに一瞬癒されかけたが私の内心の怒りは変わらない。連中のすることがハッキリと読めたからだ。何が歓迎会か、単なる新米いびりではないか。
「ミナミ、アイツら新米いびりする気なんだよ？　気づいてる？」
「もちろん!」
更衣室の扉をくぐり、渡された装備を更衣室のベンチに置き、衣服を脱いでいく。視界にミナミのスポーツタイプに下着が写ったのに何故か目を逸らしてしまったが。発達しているとは言えない体格だったが、それこそが彼女の武器なっているように思えたからだ。しかし、ミナミの語る言葉が気になるので、彼女の姿を出来るだけ移さないように、顔だけ見て話す。
「ベッキーちゃんはどうして此処に？」
「何でそんな事聞くの？」
ミナミは先ほどの邪気のない笑顔を変えずに私の問いかけに答えてくれた。
「理由って大切じゃない。警察ドラマと一緒で動機とかってのはヒトの人格が垣間見える大事な所でしょ」

「じゃ、ミナミの理由って何？」
　彼女は私より先に着替え終わり、小さな体に不釣り合いなジャケットを身に着けた姿を鏡に映し、その場でクルリと回って自分の姿を確認した。満足げに笑う彼女が放った言葉は驚きの物だった。
「リズムある生活が欲しいからかな」
　聞いたことのあるセリフだった。ちょうど私がこの職場に就きたいと思った時、二人の内、もう一人がよく口にしていた言葉だった。そして、その人の言う言葉の意味を私は知っていた。
「……人生を好きなように踊りたいって訳？」
「あ。知ってるんだ～！」
「まあ、色々あってね」
　胸のサイズが合っていないのか、ジャケットを着るのに苦労したがようやく私も着替え終わり、ロッカーの戸を閉めて装備の感触を示す。黒いレギンスのようなパンツは伸縮性が高く動きやすく、心なしかいつもより足取りが軽い。
　腰につけたピストルベルトにナイフ用のポーチがついてるのに気付き、官給品にしては気が利くことに感心して私はミナミを見た。彼女は空っぽのホルスターを恋人を見るような目で見ており、爛々としている。
　リズム、心躍る刺激求めての就職とは恐れ入ったものだ。スリルを求めて仕事が出来るなら転職だろう。踊り狂って死なない限りは。
「リズムある人生だなんて、ミナミって見かけによらず危ない子ね」
「ベッキーちゃんも人の事言えないでしょ？　ホントは楽しみなくせにい～」
「私は」
　一拍置いて、彼女の言葉に首を横に振る。
「残念だけど違うのよ」
「あらら？　違うんだ。ちなみに教えてくれないの？」
　私は口に人差指をあてて、微笑んだ。相手がスリルで働くと言うのなら、自分の理由はあまりに青臭く気恥ずかしく思えた。素直に言うにはもう少し時間と付き合いが必要だと思い、この場は言わないこと

にした。
　ミナミも「いつか教えてね」と分かってくれたのか、それ以上は追及しなかった。案外ドライな性格かもしれない。私達は二人そろって更衣室から出て、先ほどの広場へとでた。
　チラホラと女性も見えるが、全体的に少なく男ばかりのこの場所は汗の匂いがよくして、鼻をつまんだ。となりのミナミは嗅覚が鈍いのか私の一連の行為を怪訝そう顔で見つめ、数秒経って理解したのか、手をポンとたたいていた。
「マスクとか取ってくる？」
「遠慮する。マスクはマスクで消毒液みたいな匂いがするし」
「不便な体質だねえ」
　同情と言うより、面白がっている顔をするミナミに私は内心悔しく思った。出来れば、この長年の苦しみを分かってほしいものだ。普通のヒトで言えば、至近距離で香水を顔に吹き付けられているようなものだ。しかも、その匂いは決してフレグランスなもので無い方が圧倒的に多い。
　得をするのは空腹のときに近場に美味いレストランがあったときぐらいだ。たとえ、金がなくて入れなくとも何か食べた気になれる。この鼻の良さが日常生活で役に立ったなど、後は鍋が焦げそうになったときぐらいしか思い出せない。全く以て難儀な体質だ。最近は意識さえしなければ、どうにか耐えられるようにはなったが、根本的な解決とは程遠い。
　隣のヒトが私にぶつかる。群を抜いて不細工なそいつは汗っかきなのか匂いが一段ときつく感じられ、喉元まで這い上がって来た１０ダース以上思いついた罵倒の言葉を飲み込む。ミナミはそんな私の頭を背伸びして撫でて、「どうどう」などと言う。私は犬だ、馬鹿野郎と突っ込んでやろうとした時、照明が突然落とされて、皆が一斉に黙った。
　何事かと右往左往する中で、ミニステージに照明がつけられて、先輩方が立っていた。そこに居るのは５人ほど。先輩以外の三人の内二人は女で、どちらも見かけからして雰囲気があった。一人はこめか

みから首もとに至るほどの長い刀傷の後があるウェーブが勝った金髪で、私達と違って紺のライダースーツを着ており、そこにマグポーチやホルスターを吊り下げたハーネスをつけている。一片の無駄のない鍛えられた体は正に鋼だった。

もう一人は反対に体つきはだらしない、と言う言葉が合っていた。男からすればそれはそれでアリなのだろう。度のきつそうなメガネをかけて幸薄そうな顔は見る物を魅了する背徳感が存在している。

男どもがおお、と二人を見て沸き立った。流石の反応の速さだ、と感心した。私が彼女たちがいかに魅力的であるかを見るより早く、ソレを察知し美人だと脳が判断するのだから、いかに視覚に優れているかがわかると言うのものだ。だが、もう一人の存在が男たちをいきなり失望の底へと追いやった。出てきたのはノーズレス、地底人の男だったからだ。

「静かにしろ、新入り」

スラックスにネクタイ、Ｙシャツ。お世辞にも見かけは文明的と言えないノーズレスが着るには余りにも文化的すぎた。普通ならコメディアンが出たと喜びそうだが、ノーズレスはこのアンダーハイブでは気性が荒いことが多いのを知ってれば誰もが笑い抑えるのは当然と言えた。

アンダーハイブ内で最下層に位置する彼らノーズレスは屈強な肉体で生身の状態で３８口径のリボルバーを全弾喰らおうと死なずに突撃してくるタフガイだ。基本は肉体労働者だ。一部では地下世界唯一の原始人なんて言われている程で、スーツを着ると言うだけでジョークになるのだ。

「私の名前はボルドー。長い付き合いになるから、今のうちに名を覚えてほしい」

袖から見える二の腕は丸太の如太く、Ｙシャツの袖も余裕がなく、パツパツの状態で今にも破けるのではないか、と心配するほどだ。

「まずは我が笛吹に就職、おめでとう。オリエンテーションで聞いたと思うが、我らの神様は大変寛大な心の持ち主で仕事と金を施してい

ただけるだけでなく、何と人間社会を支える意義まで教えてくれたと思う」
　随所に目立つ皮肉に会場全体が苦笑を漏らした。ヒトの社会における鉄則だ。「ヒトを憎まず、人憎め」、此処では職を憎まず、なのだろう。
「金も欲しいし、そのための職も欲しい。だが、人間様の意義とやらは要らない。コレは相互に一致した物だと私は信じている。しかし、君たちにはもう一つ必要な物、命に関しての講義を此処で行う必要がある」
　壇上でマイクすら使わないで放つ声は大きく、またその言葉に誰もが反応を返した。誰だって好き好んで命を捨てようなどは思わない。そんな望みを持っているなら、簡単な話で三階以上の建物から身を放りだせば済むことだ。そんな五分とかからない行動をしないのは当然命が大事で、金やら何やら欲しいからだ。私は少し違うが、死にたくないのは一緒だ。
「我々の仕事は端的に言えば、子攫いだ。だが、その方法は君たちが思っているのと少し違う。悪党には悪党なりの美学があるように、我々は我々の美学がある。それを学び実践するという事は少なからぬ危険を伴う」
　そこで、会場の誰かが手を上げた。話を中断させられるのを防ぐためか、鋼の女が「質問は後で行え」と魅惑的なハスキーボイスで述べたがボルドーはそれを抑えて、質問を許した。
「何かね？」
「仕事は子供をつれてくるだけでしょう？　俺達は義賊でもない。そこら辺から連れて来ればいいんじゃないのか？」
　その発言に何名かが頷いた。この仕事は危険な場所から子供を保護し、こちらの世界で一生保護するという物。こちらが危険だと判断すれば、石に躓いて泣いている子供を危険な状況と判断し、連れてくることだって可能ではないか。
　まさかとは思うが、命が大事と言っておきながら鉄火場に赴き子供を救うなど律儀な事をするなどと思わないのも一理あった。それは

理解できたが、私はそんな彼らを肯定する気にはなれなかった。
「わざわざ、死ににいけなんて言う訳ない、そうでしょう？」
「なるほど」
ボルドーはミニステージに立ち、ニコリともせずに彼の話を聞いた。一瞬会場が冷やりと冷えたのが分かった。ミニステージに立つ他の面々もこれからの予想図が浮かんだのか、ため息をついたり、面白がって見ていたりと、している。
「つまり、君はこう言いたいわけだ。我々の仕事が本気の子攫いで、そこら辺のガキをとっ捕まえて、今日、明日の晩飯におけるステーキ代になるだけの至極単純な仕事だと」
「……違うんですか？」
男も自分が地雷を踏んだのに気付き、強気な姿勢はどこかへと逃げて行った。同調を見せていた連中はこぞって、一分前の自分を忘れて知らぬ顔をする。
「嘗めるな」
どすの利いた低い声が会場に響いた。地獄の蓋が空いた、そんな空想が頭をよぎり会場の殆どが一匹のノーズレスに恐怖した。鋭くとがった歯が口から見え隠れするたびに会場が恐怖で揺れた。
「いいか、単純な子攫いの方が余程危険だ。その世界の住人を全員的に回すからな。弾丸どころか、１gの小麦粉だって手に入らなくなる。たった一人のエゴで全員を死なす真似してみろ、その頭を脊髄ごと引き抜いてやる」
その様を想像し、本当に出来そうに見えるのだから、ノーズレスの迫力たるや凄まじい。顔を青くする新入りから視線を移し、ボルドーは会場全体を見渡して言葉を放つ。命がかかっているだけに、その言葉の羅列に皮肉や冗句の類はなかった。
「これから君らに基礎を叩きこむ。今回は戦闘を教授するが、これ以降の立ち回りはぶっつけ本番と思え。この先はノロマや利己主義は生きていけない。今までの研修は忘れろ、君たちが引き金を引く時、向うも同じことをしている、と頭と体に叩き込め！」
ボルドーが言うのを皮切りにターキッシュがミニステージの台を

踵で蹴った。すると、私達の上から様々な銃器が吊り下がったハンガーが下りてきて、目の前に現れた。
ブルバップ式、ボルトアクションにレバーアクションと多種多様な銃火器はよく整備されていて、油を注されて十分に整備されている。アルミ合金で作られた銃のレシーバーが放つ暗い光は重く妖しかった。
皆が戸惑う中、ミナミが一歩進んで大型の自動拳銃を手に取った。実際に構えてサイトの見易さ、グリップの感触を確かめ、スライドを引いて内部も確認しマガジン内部に入っている弾丸を一発取り出して少し不満そうに言った。
「ベッキーちゃん、これゴム弾だよ」
「……本物じゃなくて良かったよ」
「そう？」
私も一歩踏みでてブルバップ式のアサルトライフル、ＣＣＲ５と刻印された物を持つ。重量２．５ｋｇ、口径４．８５ｍｍの標準的な物。特殊ゴム弾が込められたマガジンをポーチにしまい込んで、敬愛すべき先輩方に訊いた。
「それで、イロハは教えてくれるんですよね？先輩」
念を押すに訊くとターキッシュは微笑み、ミニステージを降り、新米たちをかき分けて武器ラックにたどり着き、長いマークスマンライフルを手に取って私の目の前に立った。
「イロハだけでいいのか？」
挑発をするかのように黒い特殊ゴム弾を取り出して、その切っ先を私の喉元に当てた。新米が生意気を言うなと、けん制しつつ何をするのか期待して目の奥が輝いて、黒い宝石を思わせた。
「まさか」
私も彼に見習ってゴム弾を取り出し、ターキッシュに向けた。教えてもらえるだけで済ませる訳がない。今まで散々ヌかしてくれたのだ。技量、経験なんて関係ない。お礼は当然させてもらう。そのチャンスをわざわざ向うからくれたのだ。
仕事の前に仕返しだ。躾られるまえに数回は噛みついてやる。

第2話

ベルトループ付きのポーチや胴体に括り付ける戦闘用の装備「チェストリグ」に30発入りのマガジンを詰め込み、スモークグレネードもついでに入れる。固い訓練用のカーボンナイフを鞘に仕舞いベルトに吊り下げる。無色透明のバイザーがついたヘルメットをかぶり、周りを見渡す。

・

ミナミの行動を見て、皆が装備を整えて研修時に扱った火器を手に握りしめる。来て早々の実戦訓練に愚痴をたれる者もいれば、ミナミのように心待ちにしていた連中と、その反応は様々だ。

そう言う私も出会って数十分の間に駆けられたおちょくりに対する返答の機会を頂いて内心では喜んでいる。嘗められる事だけは我慢ならない。特に犬だ、何だとからかう者に対しては特にそうだ。

「支度は終えたか？」

ボルドーではなくターキッシュが全員を見渡して訊いた。見渡している最中、私と目が合った。彼はフッと鼻で笑い人差指でクイ、と来いよとジェスチャーを送って来た。余程私の事がお気に召したらしい、と見て私は低く唸った。

何が何でも、私を挑発したいらしい。

「よし、全員終えたようだから、説明する。お前らには早速ケイブを潜ってもらう。潜った先に俺達を含めた先輩方が約900m先に待ち構えている。お前たちはそれを突破して、赤いフラッグを取ればいい」

ターキッシュが概要を説明するとミニステージの後ろにスクリーンが現れ、地形や仮想敵の規模が記されたデータが写された。仮想敵は約45名、地形は小高い丘がある以外はほぼ平地で、所々に障害物が置いてあるだけだ。相手を突破してフラッグを取る、簡単な作業と言えばそうだ。

「本来なら携帯用の端末を持つのが普通だが、今回は戦闘訓練のみのため省略させてもらう。また装備している物も基本は旧型の二級品

という事も覚えておけ。予算の節約で仕方ないから、そこは目をつぶって欲しい」
ダウンベストのようなジャケットに目を落として、そうなのかと納得した。よくよく調べてみるとジャケットの裏側に製造年数が記されており、十五年前の物だと分かった。匂いこそはしないが、相当なお古だという事はコレが証明している。
「もっとも俺達の装備そのものが人間様のお下がりだがな」
先輩方が皆揃いも揃って苦笑した。これからその装備を付けることを夢見る私達に対して何の容赦もない言葉だった。
「実戦にかなり近いが、あくまで訓練だ。死ぬ確率は低いが、死亡判定を受けた者から離脱してもらう。以上、行動開始!」
その時、ゲートにスパークが走り出した。何もなかったはずの虚空に金切り声を挙げて渦が生まれだした。真黒で底の見えないそれはブラックホールのようで、何秒か経過すると全てを飲み込む黒い渦の先に信じられないことに緑の景色がぼんやりと見えだした。
やがてハッキリと映り出し、窓ガラスの向うの景色の如く、青いペンキで塗られた真っ青なキャンパスのような青空に緑豊かな大草原が網膜に反射された。
どよめく私達新米に、ただ日常の事のように見つめる先輩たち。彼らにとっては日々の職務でしかないケイブの形成など、太陽が地平線の向うから顔を出すかのように自然な出来事でしかないのだろう。
それが彼らの現在で、私達の未来だった。私達にとって非現実めいた扉を前に後ずさりをしていると、いつの間にか準備を終えた先輩方が私たちとは違うケイブを潜ってその場から消えて行った。
「お先に」
ターキッシュの声が鼓膜にこびりついた。
彼らの平然とした態度に驚きつつも、あの男だけには負けまいという対抗心に火が付いた私は奥歯を噛みしめて大勢を押しのけて歩いて行きケイブの前へと立った。
「おい、行くのか?」
誰かがそんな事を訊いて来た。私の真意を確かめようとする誰か

の顔も見ずに私はケイブを見た。扉一枚向うの景色に飛び込むと言うだけで、心臓が高鳴る。正直不安もあったが、あの男に嘗められたくないという対抗心と、何より自分の求めた未来であることを思い起こして、私はそこへ飛び込んだ。

助走をつけて私はそこへ潜った。未知に対する恐怖を押しのけた先に行かなくてはならない。それは義務感であったけど、好奇心も混ざっていた。

ドボン、と私はその中へと飛び込んだ。ケイブの中はプールのようで呼吸はできるのに、皮膚に伝わる感覚は水のようで私を柔らかく包み込んで来た。温かく、落ち着きすら感じる異次元への廊下は私を邪険に扱うことは無かった。アンダーハイブの世界とは違うどこかへと通じる洞穴は私に優しかった。

一度も通ったこともないはずのケイブで懐かしいような、例えるなら幼いころに母親の腕の中で眠るような、そんな温かみを私は感じることが出来た。

そして、ドアの向う側への世界へと転がり出た。丘を転げ落ちて自分の体を緑広がる大海へと転がせた。背中に痛みが走ったのも束の間、大の字に転がった私を青空が迎えてくれた。雲一つなく、アンダーハイブの見せる鉄パイプとコンクリート、鉄板で埋め尽くされた天上ある空間ではない。空と言う無限に広がる世界があった。

「綺麗」

空気を吸い込んで、あの澱んだ空間の空気をここの空気と交換する。体を内側からクリーニングする新鮮な気持ちが湧き起こって私は今度は立ち上がってもう一度深呼吸した。

鼻に香るのは、あの金属臭とヒトの匂いが混ざったものではない、太陽の香りという物でヒトを潤し温かみを施してくれる自然の恵みだった。

後ろから他の新米たちが続いてやって来た。丘を下り視界に広がる緑と青のコントラストに皆が惹かれた。教科書や写真でしか見れなかった物と空気がそこに存在しており、それに触れることが出来るのは確かな喜びだった。

「凄いね……」
隣にミナミがやって来て風に髪の毛を揺らした。後ろで纏められた長い赤毛が吹かれて、リンスで整えられた髪が上等な絹糸のように艶がかった美しさを見せていた。
だが、同時に彼女が既にホルスターが抜かれた大型自動拳銃が目に入り、これが訓練であることを思いだした。自然に感動していて気が付かなかったが、目の前には深緑のバリケードやコンクリートブロックを積み上げられた障害物があった。
せっかくの大自然に置かれた場違いな人工物と、こんな場所でわざわざ訓練をしようと言う先輩たちの意地の悪さに憤慨したが私とて１５の女だ。やるべきことを再確認して、ＣＣＲ５のチャージングハンドルを引き、ゴム弾を薬室に送り込む。
軽快な金属音と共に非殺傷弾が込められた銃器が自らの存在を不気味にキラリと暗い輝きを放った気がした。
銃上部につけられた折り畳み式のダットサイトを起動して、研修通りの手順でセイフテイを解除した。親指で操作するセレクターをバーストにして目標地点があるであろうポイントに目を向けた。
「あの向うに……」
そんな独り言を言った時だった。９００ｍ先の小高い丘で何かが光った。一瞬カメラのフラッシュと錯覚したが、すぐ後ろで立っていた誰かが仰向けになって倒れた。スローモーに時間が流れて、脳がフリーズを起こした。今一体何が起こって彼が倒れていくのだろう、と。考え出して、その答えが出てこなくて処理落ちしたのだ。
「伏せて！」
ミナミに突き飛ばされて障害物の陰に入った。着用したヘルメットに音声機能が入っていたのか、音声が聞こえた。
『ＮＯ７０死亡判定』
無機質な音声が鳴って、ようやく私は何が起こったのかを理解した。訓練開始、ＰＴ、しごきの開始だ。頭上を特殊ゴム弾が飛来し、景色や空気に見惚れていた連中が泡を食って障害物の影へと飛び込む。間に合わなかった数名が被弾して死亡判定を受けて、その場で動けな

くなる。
非致死性のゴム弾が無数に襲い掛かってくる様は圧巻だった。瞬きする合間に数十発の弾丸が私の上を通り過ぎていき、そのうちの数発が誰かに命中していくのは冷汗をかくどころではなく、発狂すらしそうになる。
実弾より幾分か遅いはずの訓練弾ですら空を切る音は本物らしく、時折見える曳光弾のような光る弾丸は弾道を知るための物だと知りながら、死神が列をなして襲い掛かるかのような光景だ。
脳にアドレナリンが行き渡るより先に心にひんやりとした恐ろしさが流れ込み、ひたすら姿勢を低くする以外なかった。
「頭を下げろ！」
誰かが叫び、皆が銃を握りしめて、空を切る弾丸が障害物にぶつかって鈍い音を響かせるプレッシャーに耐える。断続的な弾丸のぶつかる音はこの遮蔽物が耐えられるかどうかすら怪しく思えるほどだ。
だが、勇気ある者は少なからず存在し、何名かが銃器を構えて反撃を試みようとするが、９００ｍ先と言うのは目で見ると遠く、倍率のないダットサイトやアイアンサイトでは人の影を見つけることは新米の私達には難しすぎた。
平地で迷彩服すら着ていないはずの相手のシルエットすら私達の目では捉えることができないのに気付き、想像より遥かに厳しい現実に奥歯を噛みしめた。バリケードの裏側に身をひそめる、それ以外に選択肢は無いように思えた。
しかし、障害物に隠れていても安全ではなかった。
コンクリートブロックの陰から覗き見ると、二人一緒に動いていた片方のジャケットにゴム弾が当たり、跳ねた弾丸がもう一人に命中し、跳弾に命中した方が死亡判定を受けたのだ。二級品のジャケットは確かに防いでくれるらしいが跳弾を起こしてしまい、意図せずに周りを傷つけてしまう事がわかった。
二級品の太刀の悪さに誰かが悪態を吐き、私もそれに同意する以外ない。

「誰かスコープを持っていないか?!」
　状況を打開しようとスコープ持ちを探す声がした。一人が低倍率のスコープがついたフルサイズのライフルｍｋ２１を構えたが、次の瞬間にはスコープを打ち抜かれてしまい、死亡判定を受けて倒れた。
「畜生!」
　私は狙いも定めない障害物に身を隠したまま、フルオートで乱射する。ブラインドショットで腕に伝わるブルバップの衝撃は小口径でもコントロールが難しく銃口が跳ね上がって撃ちづらい。
　轟音鳴り響く銃器だが、私が撃つと何とも頼りにならない。
「下手に撃ったらダメ！　光で場所がばれる!」
　ミナミに抑えられて、私はその場から引っ込むことになった。そして、彼女の言う通り目くら撃ちをしていた目の前の女性がアサルトライフルを撥ね飛ばされ、拾おうと飛び出たところを狙撃されて、死亡判定を受けた。私は生唾を飲み込んで、息を掃き出し南の方へと振り向く。彼女はこの手の戦いに知恵が回るようだと判断し、彼女の細腕を掴んで聞き出した。
「どうすればいいの?!」
　銃声と跳弾の音が木霊する中、彼女に訊くとミナミは伏せたまま銃弾飛び交う向う側へと指さした。
「銃弾の飛び方を見て！　さっきから狙撃しているのを除いたら、全部上向き気味！　ＭＧに紛れて狙撃手が狙い撃っているんだと思う!」
「どういう事?!」
「相手にも、こっちがはっきり見えるのは少ないの！　煙幕を焚いて視界を封じないと!」
　言われたとおりに銃弾の向きを見てみると、確かにバリケードにぶつかる弾丸は上を向いていた。もし、仮に相手が私達の事をもっと細かに見れていたら、弾丸は私達目がけて下向けに来るはずだ。機関銃で制圧し射撃を加えて、こちらの反撃を許さず頭を出してきた間抜けを一人ずつ潰していく。手堅い戦法だけど、呆れるほど有効だ。訓練でなければ，教習で習った迫撃砲や、グレネードランチャーも加えら

れて更に苦しくなっていただろう。
「多分だけど装備の差はほとんどない。サーマルとかの心配はないと思うの！」
　ミナミの言った通り、彼らも私達と似たような装備をしてケイブを潜っていった。ジャケットからゴーグル、ヘルメットに靴に至るまでほとんど同じだ。なら、煙幕で視界を遮ることは可能かもしれない。
「煙幕を張ったら?!」
　ミナミの大きな瞳が左右に忙しく動く。彼女も必死に頭を動かしているようだが、口元は笑ったままだ。これが彼女の求めたリズムの一種なのだろう。
「皆で近づくの！　このままだと負けちゃう！」
「負ける?」
　その言葉は頂けない。まだ、ターキッシュの面すら見えてないと言うのに、終わってしまう訳にはいかない。デカい口を叩いたのだ。このまま終わってしまえば、口だけの女だ。世の中は口だけの者は嘗められるのが普通だ。吠えるだけなら野良犬だって出来るからだ。
　ソレは私の流儀に反する。吠えたからには喉元に歯を突き立てに行かなくてはならない。走って、吠えた相手には必ず飛びかかる。嘗めた人間を私は一度だって許したことは無いのだ。
「負けてたまるもんですか……！」
　ベルトに通したポーチからスモークグレネードを二個取り出して、一本をミナミに手渡して、もう一本の安全ピンを犬歯に引っ掻ける。周りに目を配らせて、撃たれている方へ忌々しく睨みを聞かせている者達に目を向ける。
「呼びかけなくていいの?!」
「無理！　皆バラバラで動いてるし、私達二人だけでも行くしかない！」
　歯でピンを抜き、レバーが抜けないようにしっかりと握りしめる。ミナミも指でピンを抜いて、私の顔を見つめる。片手にはマグナムオートが銀色のボディを主張しており、準備を完了させていた。
「カウント3，2，1！」

ゼロの所でスモークグレネードを出来るだけ遠くへと投げ、レバーが外れたスプレー缶型の物体から２５０ｇほどの化学物質が反応し、染料で赤く染められた煙が大量に発生していく。
「ステイ！」
走り出そうと身をバリケードから飛び出そうとした時、ミナミが待てと手で抑えた。煙幕が張られた中でも、絶え間なく続く銃声のコンサートが一瞬でも途切れるその瞬間を彼女は待っているのだ、とすぐに理解した。
敵の照準が下向けに変わっていき、地面にゴム弾が跳ねていく。煙幕の向こう側で先輩方の機関銃手が未だ撃ちつづけており、その弾切れの一瞬を今か、今かと待つ。
跳ねるゴム弾の前に私達は小さな遮蔽物に身をかがめ、足元に飛んでくる弾丸におっかなびっくりになりつつも声を殺してその時を待ち続けた。
「ステイ！」
二度目のミナミの声が響く。待機する皆が覚悟を決めて闘気を宿し得物の新しいマガジンに交換する。ベルトに吊るしたバヨネットを着剣しギラギラと輝く目で復讐の機会を待った。
これ程、連射していれば弾が尽きて再装填をするか、加熱しすぎた銃身を交換するか、のどちらかの行為をするはずだ。それを待って数十秒、体感的に数時間は待ったペイバックのための隙が、遂にその時が来た。弾幕が一瞬消えたことで私達に訪れた刹那の静粛、それを合図にして新兵、または烏合の衆である全員が動いた。
「ラン！」
二人で飛び出し、全力で駆けだした。一直線に向うに向かのではなく、目的地付近まで続く障害物を蛇のようにすり抜けて地面を蹴っていく。ミナミの言葉が届かなかった連中も私達の行動に気付いたのか、呼応するように走り出し、ありがたいことに煙幕を追加してくれている。
視界を遮る煙幕は私達を守る盾だった。銃弾こそ防げないが、敵に目から守ってくれて、私達は己の足と幸運の女神さま頼りに

だが、向うは冷静だ。この煙幕下だろうとこちらの気配を察知しているのか、またしても機関銃の制圧射撃が向けられた。
絶え間なく動く電動ノコギリと似た音をこの緑豊かな大地に轟かせ、私達の体を掠めていく。ツキに見放された何人かが声をあげて消えて行く中、不幸なことに一発のゴム弾が私のＣＣＲ５を吹き飛ばした。
「クソ！」
小さな悲鳴の後に悪態をついたが、もう遅い。唯一のライフル銃は煙幕の中へと消えて行ってしった。せっかくのライフルがもうもうと立ち込める煙幕の向う側に飛んで行ってしまった。
だが、この曳光するゴム弾の嵐の中、引き返すことも足を止めることも許されない。火花を散らせて飛んでいった銃の行方も知ることなどできるはずもなかった。女の子が言うには汚すぎるＦワードを２ダースは叫びたい気持ちを押さえつけて、レッグホルスターから９ｍｍ口径の自動拳銃を抜き、走り続ける。
『Ｎｏ４２、Ｎｏ３４、Ｎｏ３８、死亡判定』
ヘルメットから聞こえる無機質な音声が倒れた仲間の番号を述べる。士気を下げる効果を狙っているとしか思えない声質が耳障りでたまらない。もう、何人が死亡判定を受け取ったことだろうか。
だが、今はそれよりも走って走って、見当違いな方へと銃を撃ちつづけている連中に食らいつくことだけを考えればいい。両手にしっかりと握られた拳銃を握りしめて煙幕が消えるその地点を視界に納める。
薄くなった煙の向うに先輩方が見えた。距離にして１００ｍもない。仲間が倒れつつも追加してくれた目くらましの数々がここまで道を切り開いてくれたのだ。
倒す、倒す！と喉から出そうな声を殺す為に訓練ナイフを咥えて、隣にいるミナミと共に煙幕の向う側へと突き抜けた。硝煙と土の香り混ざる戦場の中へと私を含めて七人が躍り出た。攻撃性をむき出しにして、先輩を一人でも打ち倒すべく、煙幕の向うの奴らの目の前に姿を晒した。

白い煙から飛び出た私達に相手はすぐさま反応して見せた。獣じみた輝きを宿したスコープと銃口の油と鉄の暗い輝きがアタシ達へと向けられた。
向けられる銃口の数々。サプレッサーやラッパ状の銃口、様々な口径の銃が向けられる中、私はその中央に目標を見つけ、そのすぐ後ろに勝利目標のブツがあることも確認した。
「ワウ!」
脚に力をさらに込めてミナミより早く走り出し、大地を駆ける。急加速を駆けた私に火力が集中されるのをミナミがマグナムオートを連射しけん制していく。巨大な発砲音を放つ４４マグナムの援護を受けて、私はターキッシュに向けて自動拳銃を向ける。
「ターキッシュ!」
人差指に力を込めて、引き金を絞る走りながらで上下に揺れて、まともな照準もつけれず９ｍｍ口径の訓練弾がターキッシュの後ろで地面に命中し抉るのみだが、構わなかった。一発でも当てれば、終わるのだ。感情に任せて連射し、でたらめに撃ちまくった。
ターキッシュは膝立ちの姿勢でマークスマンライフルの４倍スコープを覗き、一呼吸したかと思うと彼の体が揺れ、私の拳銃が撥ね飛ばされた。
ソレを一瞬目で追ったが、すぐ目の前を見直すとターキッチュの周りが銃口を下げて、別の場所へと向かい出した。彼らの顔にはニヤケ面が張り付けられており、見物に移る者すらいる始末だ。
ターキッシュは肩にかけたスリングを外し、ライフルをその場に置き、拳銃が入ったままのレッグホルスターすら外し出した。スラリと長い、訓練用のナイフではなくククリ刀を腰から抜き出した。
口は笑い、目には挑発の色を出して人差指と中指をくいと曲げて「来い」と無言の内に伝える。彼は何も恐れていない、むしろ来たことに意外さを感じ、喜んで売る節すらあった。
驕っているのか、それとも冷静に見極めた結果とやらかは知らないが、彼は私に来て見せろと誘って来たのだ。
噛みしめていた歯を解き、ナイフを利き手に落とし、ターキッシュ

目がけて飛びかかった。
「嘗めるなァ！」
縦に振ったナイフをターキッシュは一歩分下がって避け、続く首を狙った刺突をククリ刀で弾く。私は片足を少し下げ、訓練ナイフを突き立てようと、刺突を三度に渡って繰り出す。
一回目を頭部、二回目、三回目を胸から首にかけて切り付けようと動かすが、ターキッシュは上半身の身の動きで避け、重心を崩す素振りすら見せない。無論、その顔に張り付いた笑みも崩れることが無い。
舌打ちをしてターキッシュの足を払う。しゃがみこんで、足元を狙った回転蹴りを放ち、あっさりと避けられたが片足になったのは好機と見て、体全身をバネにしてナイフ握る右腕を思い切りターキッシュに突き出した。
「甘い！」
片足だけで立っていたターキッシュだったが、持ち上げた足にはいたブーツでナイフを防いだ。靴底にしかれた鉄板とブーツの固いゴムに歯は止められ、体重を利用されてそのまま利き手を踏みつけられた。
男の全体重が右腕にかかり、私は痛みに声を上げた。しかし、痛みに喘ぐ暇などない事を知り、そのまま地面を転がって、ククリの追撃を辛うじて躱して、続く二撃が来るところでナイフの代わりに土と草をむしり取って、顔目がけて放り二撃目も間一髪で避けることが出来た。
「嘗めるなって言ったでしょう！」
両手に力を込めて跳ね起きて、ターキッシュの背後を取って、押さえつけようとした。
このタイミングなら勝てるとすら思った。しかし、前のめりになったはずのターキッシュは瞬時にバランスを取り戻し、左足を軸にして時計回りに回転し、黒い訓練用の刃を振るった。
胴体を狙った鋭い一撃に私はつい昔からの癖で動き、その刃を辛うじて受け止めた。カーボン製の刃がピタリと止まり、ターキッシュの

顔が一瞬驚きの者へと変わったのを私は上目づかいで見ることが出来た。私はそれを見て、思わず口角を吊り上げた。
「無茶しやがるな」
戦闘ではなく、喧嘩でよく使った手口を私が披露したのに、彼はそんな感想しか言わなかった。文句の一つも言ってやりたかったが、生憎口を動かすことが出来ない身であるため、この場は唸るだけだ。
彼の目には訓練用のククリ刀を歯で受け止めた私が写っていることだろう。刃の使いどころが違うのは理解しているが、彼の驚きはそこではないだろう。訓練とは言え、刃物を歯で受け止めるなんて、わざわざ危険を冒すようなマネは普通はしないからだ。
身を守るために一番当ててはいけない部分を刃の前の晒すのだから当たり前だろう。でも、コレが私の喧嘩の奥の手だった。飛んできた拳を歯で受け止める。人間なら折れるだろうが、ヒトである私には縁のない事態だ。
歯の丈夫さは昔からの自慢だ。拳程度なら、逆に噛み砕いてやる自身だってあるのだ。
そして、今は刃物でも相手できると立証できた。相手が驚きに余裕を崩したのは中々に爽快だった。
今なら叫ぼう、お前のスかした面はどこへ行った？　と。
しかし、その後が続かなかった。このままマチェットを奪おうとすら思ったが、ターキッシュは柄をいとも容易く手放し、回し蹴りを容赦なく脇腹に叩き込んだ。
衝撃でククリ刀を口から離し、転がった私に待っていたのは敗北の二文字だった。起き上がろうとした私の首もとにツンと何かでつつかれた。
何かと思い、視線を下すと私の持っていた訓練ナイフでターキッシュの左手にいつの間にか握られていた。
「……ウソ」
「悪いな。お前が転がっている合間に拾わせてもらったよ」
ヘルメットに音声が流れ、死亡判定の申告が送られた。一泡吹かせたつもりだったが、彼は二手三手先を行っていたことに気付かされ、

私は何一つ買っていなかったことがハッキリとした。
「俺の勝ちだ。ベッキー」
憎き相手からの勝利宣言を耳にして私はその場に大の字に転がった。敗北の味はいつだって苦く、いつもと違って青い綺麗な空がいやに皮肉に思えた。

先

楽しい歓迎会を終えて、俺は休憩室へと早速駆け込んで缶コーヒーを一足先に買い、ベンチに座る。周りにとられるのを恐れて装備をヘルメット以外つけたままで来たので、重かったがその甲斐はあった。
無糖のブラックを手に入れ、プルタブを引いて中身を喉へと流し込む。ブラックの目を覚まさせる苦味に脳を癒すカフェインの慰撫が加わって至福の時を過ごす。まだ勤務中なのでアルコール類が飲めないのが残念だが、ぶっらくコーヒーの刺激で代用できたので、我慢することにした。
「来るのが早いな」
一人満喫しているとコルト爺さんの声がして、振り返った。ダストコートを羽織らず、Yシャツにループタイ、革製のガンベルトが巻かれたスラックスを履いた姿でやって来た。ショルダーホルスターに吊り下げられたブルーイングされた得物が光っているのを見て、それを指摘した。
「得物が丸見えだぞ」
「勤務中にコイツは抜かんさ。さっきは抜いたがな」
コルト爺さんはホルスターからソレを抜き出した。スタームルガーレッドホーク。もう十世紀近く昔に設計された骨董品のリボルバーだ。使用弾薬４５４カスール弾のマグナムリボルバーをコルト爺さんはガンスピンして遊び、腰のホルスターしまう。
「誰に撃った？」
「二人会った内の小さい方だ。色々と勘がいい子だったが、まだまだ

若いのには負けんよ。コイツも私もな」
　木製グリップをコツコツと叩き、自分と同じ老兵を褒め称える。俺も爺さんもフッと笑って今日の相手について話し合う。
「ベッキーはどうだった？」
「やたら動き回る奴だった」
　俺は記憶を駆け巡り彼女の姿を思い起こした。マーマルに相応しい優れた身体能力、おそらくロクな所で生まれなかったのか、反骨心をむき出しにして、ある意味幼いとも言える気骨を見せつけてくれた。
「しかも、凄いガッツだった。俺の振るったククリ等に噛みついたんだ」
「本当にか？」
「見てみろよ」
　訓練用のククリ等を取り出して、コルト爺さんの目に黒いカーボンブレードを見せつける。訓練用の固くはないブレードとは言え、そこにくっきりと歯型が出来ており、犬歯のある部分などへこんですらいる。
「大した度胸だが、向こう見ずだな」
「ああ、だが俺は嫌いじゃない」
　勝つために意表を突こうとする。それはこれからの仕事には必要な事だ。俺たちの仕事は時にカードに例えることが出来る。大金を稼ぐには何が一番手早いか、と思えば必要なのは仲間とイカサマとハッタリの技術だ。大事なのは勝つためにどんな手段を使うと言う気概と、それを実行するハートの強さだ。
　相手をだまし、自分を強く見せ美味しい所だけは取る。それこそが重要だ。緻密な計算も必要だが、最期に物を言うのは精神論になるのだ。敵に囲まれたら、諦めて拳銃を口に咥えるような者など最初からいない方がいい。
　その点言うとベッキーは最高だ。ガッツと言う点では合格点だ。技術はまだまだかもしれないが、そこは実戦と訓練の積み重ねだ。後は俺次第という事になる。

「顔がにやけているぞ、ターキッシュ」
「そうか？」
　コルト爺さんは自販機にコインを入れてミルクコーヒーの所でボタンを押す。そして手袋が嵌められた手でソレを掴み、俺の顔をもう一度見る。
「いい顔だ。先輩らしく、彼女を上手く導けよ。お前は腕は確かだし、現実を知っているが、皮肉や茶化しが多い。気をつけろよ」
「言われなくとも」
「年上に対する敬意もな」
　爺さんは俺に一言二言忠告を入れて、もうひとつミルクコーヒーを買い、それを持って休憩室を出て行こうとする。俺はそんな爺さんを飛びとめて訊いた。
「どこへ行くんだ？」
「勧誘さ。ミナミはいい相棒になる」
「俺の時よりもか？」
　俺はそんな質問をした。拗ねているわけではないが、突然聞きたくなった。ほんの数年前までは俺と爺さんで組んでいた物だ。自分で言うのも難だが、かなりのコンビネーションであったと自負している。
　おかげで色々と捻くれたところもある。俺と爺さんがコンビ解消したのにはベテランを後進育成のために、など他にもいくつか理由もあるが、それがあの新米には起こらないという自信でもあるのか、と疑問にも思ったからだ。
　コルト爺さんは振り返って俺に向かってほほ笑んだ。
「そんなことは無い。お前はお前でやりたいから自立した。私は私でやりたいだけだ。それにあの子が合うのでは、と考えただけだよ。心配しなくてもお前は私の一番の弟子さ」
　やりたいようにやる。彼はリボルバーの銀色の輝きと共に、そう言い残して廊下の奥へと消えて行った。
　その通りだ。爺さんは好きなようにやる。だから、仕事だろうとあのデカいリボルバーを使うのだ。まさに銃が彼のスタイルを語って

いると言えるのだ。俺はそんな爺さんから離れて自分のしたいようにするために今の自分になった。

もっとも、より理想に近づくたびに嫌な人間になったと自覚するのは、思った以上に辛かったが。

俺は缶コーヒーの空き缶をゴミ箱へと捨てて、ベンチから立ち上がり、ロッカールームへと戻ろうとした。背筋を伸ばし、固まった筋肉をほぐしながら蛍光灯で照らされた廊下を歩く。

ブーツの裏側に傷が出来たせいか、妙に歩きにくく感じた。ゴムの一部が削がれたからに違いない。訓練が終わっても、俺を困らせるとはベッキーと言う女の反撃も中々侮れない、と思えた。

第3話

犬

「喜べ、俺と組むことになった」

あの決定的な敗北の二日後。出勤してタイムカードを押し、昼時だから休憩室のベンチに座ってハンバーガーを包みから取り出した時に奴は来た。

この至福のバーガーを齧る時間に来た彼を見て、私はいつも以上に目を吊り上げたがその言葉を聞いてすぐに目を丸くしてしまった。奴は皮肉を言いに来たわけでもない、ただ自分を仕事に就かせると言ったのだ。それも大きなボストンバッグを担いでやって来たのだ。

前と会った時と同じようにニヤけていて人を小ばかにしているような面を張り付けて来ただけでなかった。私を相棒として向かいいれるとまで言って来たのだ。実は私をコケにするためにドッキリを仕掛けに来たのでは、と疑いすら持った。

しかし、渡された書類は正規の物で、笛吹の事務員が押した判子も揃っている。私はその書類をハンバーガーを咥えたまましばらく見ていた。

「いつまで咥えてんだ？　何か感想は？」

ケチャップとマスタード、それに合成タンパクの味を楽しむことなくハンバーガーを無理やり喉に押し込み、缶コーラでのどを潤して私はターキッシュに向かって訊いた。

「何で私と？　模擬戦で散々だったのに」

「色々と思うところあってね。元気が有り余っている方がいい」

そう言ってターキッシュは私に担いでいたボストンバッグを寄越してきた。投げ渡されて私はそれを抱え込む形となり、その重さによってベンチからひっくり返った。

「仕事道具が入っている。二階に本物のケイブがあるから、そいつを装着して来い。早速だが仕事だ。喜べ、新兵ベッキー」

ボストンバッグの中を開けてみると、そこには横笛を咥えた兵士が描かれたパッチが張られた新型のボディアーマーにチェストリグ、対

弾スーツと一式入っていた。新しいオリーブドラブ色の戦闘用の装備はカビ臭い前の二級品とは比べ物にならない程の高性能であり、そんな高級装備がぎっしり詰まっていた。

私はその真新しい装備の中にベッキーと刺繍がされているのを見て頬を赤くした。サンタの存在を信じていたころに、枕元にプレゼントがあったときと同等か、それ以上の喜びが胸の中に溢れる。

「ホントに……私が？」

ライダースーツのように伸縮性のある笛吹用の戦闘服を掴んで恐る恐る訊いた。あれ程反抗した私にいきなり、正式の装備を手渡されるのだ。コレは夢かとすら思ってしまうのは当然だ。ぬか喜びをしないために今一度私はターキッシュに訊いた。

あれ程噛みつきに行ったのだから、しばらくは仕事など来ないと思っていた。だがチャンスは思わぬところから、それも超特急でやって来た。

「マジだ。俺がお前を選んだ。仕事に悪戯を仕込むほど俺はお茶目じゃない。喜び終わったら装着して来いよ」

「……ハイ」

ターキッシュは私の様子に少し目を細めた。反応がそんなに珍しかったのだろうか。彼は頭を掻きながらどこかへと行ってしまった。私はその背中が視界からいなくなり、周りにも誰もいないことを確認した。誰も居なさそうだ、と確信し私はその場で跳ねた。

「イヤッホー！」

何だか知らないが奴は私の事を多少は認めたらしい。あの場で勝てなかったのは悔やまれるが、念願の笛吹の一員として選ばれたのに私はその場でジャンプし、刺繍の入ったスーツの裾を持って踊り、早速更衣室へとボストンバッグ片手に走り出した。

気分は最高潮に達し、アンダーハイブの鋼の天井をぶち破って、あの青空へと飛び上れる気すらするほどだ。今なら廊下でハードロックを歌いながらすれ違う人に飛びついて、喜びを分かち合っても何ら不思議ではない高揚っぷりだ。

クルリ、クルりと回って更衣室へと入り、ロッカーへと行くと先客

がいた。赤い髪の毛に小さなボディのミナミだった。おでこに絆創膏が張られていて、着替えの最中で下着姿で、紫のランジェリー以外何も身に着けていなかった。いつもなら目を伏せるところだが、今は勝ち取った称号の興奮が優ってさして気にしなかった。
「アレ？　ベッキーちゃん？」
「ミナミ！　見てよコレ！」
とびきりの笑顔で刺繍の入ったスーツとベストを見せる。ミナミは「ワオ！」と言いつつ、伸縮性の高いスーツを着て、胸元の刺繍を見せた。ミナミと書かれたのを見て、私は素直に祝福した。
「ミナミもなんだ！」
「そうだよ。お爺さんと組むことになってね。これからも頑張ろうねベッキーちゃん」
ミナミはアーマー以外はピストルマグポーチ以外、レッグホルスターだけだった。彼女はホルスターから装填されていないマグナムオートの銀色に輝く自動拳銃を取り出してキスをして、去って行った。
「お先に！」
手を振ってロッカールームを後にする彼女を見送った後、私は着替え始めた。スポーツタイプの下着の上に全身を覆う競技用の水着に似たスーツを着て、そのフィット感を堪能しその上にＯＤカラーのファティーグパンツを履き、上半身にアーマーにリグと装着していき、全身を鏡に映す。
胸を持ち上げる形で装着されたチェストリグに、女性用のＰＴアーマーと中々に色っぽい格好となり、此処に笛吹ベッキーが誕生した。銃を構えるポーズをしたり、調子に乗って鏡の前で指で鉄砲の形を作り、「バーン」と言ってみたりとひとしきり堪能して、ターキッシュの元へ行くことにする。
忌々しかったあの先輩もいいことをするものだと、内心でほんの少し褒め、出来ればもう少し真面目そうな人物が良かったな、と失礼な事を考えた。
廊下へと躍り出て、スキップをしていく私は視線に気づき少し落ち

着きを取り戻した。他の先輩方が装備品に身を包んで楽しそうに歩くのを怪訝そうに見て「いい気なものだ」と小声で話し合うのが聞こえたからだ。

私は一つ咳払いをして二階へと階段で登って行った。上がった先にあったのはターミナルだった。何十個と言うケイブへと通じるゲートが存在し、鉄格子の窓ごしに銃器が笛吹に手渡されていく。中央で休む者もいれば、煙草と缶コーヒーを片手に猥談をする先輩方もいて、私はここに来て大人の世界に入ったことをしっかりと理解した。

まだ２０にもなっていない私だったが、一人前になれた気がして再び舞い上がりそうになったとき、肩を叩かれた。

「遅いぞ」

振り返ると、同じような装備をしたターキッシュが居た。違うのはブーニーハットをかぶっていることぐらいで、背中に背負われた二つのバックパックの一つを私に持たせて、彼は口を開いた。

「舞い上がるのも結構だが、踊るのはよせ。この先いくらでも踊れるんだからな。全くどうしてマーマルってのは、すぐはしゃぐんだ？」

舞い上がった私に述べられた冷ややかな皮肉に私は頭を冷やすと同時に露骨な言い方に腹を立てた。この地下世界はいくつかの異人種で成り立っているが、全部で五つある。その中で底辺と言われるのが半獣人のマーマルと地底人と揶揄されるノーズレスの二種だ。

私はマーマルで、犬に近く耳や鼻は勿論、脚力では圧倒的に他の異人種より優れており、口の形こそ人間だが、犬歯は本物の犬以上に鋭く固い。

言ってみれば、動物と人間の相子だ。だから、動物なのか人間なのかハッキリしない半端者、わかっているのは哺乳類という事だけ。つまりマーマルと呼ばれているのだ。このように人間によく似たヒトが生活するのが地下社会の普通で私のようなヒトは別段珍しくない。

マーマルはその身体的な利点で職には困らない種だと言われる。しかし、民族性と言うのか、マーマルは良くも悪くも感情的で幼稚な異人種だとよく言われるのだ。それ故かマーマルは管理職、高学歴の

割合が最も低く、ほとんどが低所得層で今のターキッシュのように嗤う者も少なくない。
　もっとも人間からすれば、アンダーハイブの住人は全て中、下層階級の住民なのであるのだが。何せアンダーハイブは上の人間を支える巨大な労働者の街なのだから。
「マーマルお断りなら、今の内ですよ？」
　せっかくの喜びに水を差された私はターキッシュの皮肉で、一瞬彼を睨んだが、ターキッシュは何てことなさそうに肩をすくめた。
「言いすぎたな。悪かったよ、お前の素質には期待しているから勘違いはするな」
「そりゃどうも」
　引きつった笑みで返すと彼は私にＡｋタイプと言われるアサルトライフルを手渡してきた。シンプルだが野暮ったい印象のデザインで折り畳み式の樹脂ストックであり予備のマガジンとして７つ受け取る。
　しかし、前のブルバップ式とは大きく変わっているので頭に疑問符が浮かんだ。操作法も違い、旧型と揶揄されるこのライフルに私はいささか不満を覚えた。
「お前は本当によく走り回るし、道具の扱いも雑だ。だから、信頼性の高いＡＫタイプにしておいた。自分にお似合いの銃を作ってくれた設計者に感謝しな」
「でも、ＡＫタイプは確か命中精度が高くないって……」
　ＡＫタイプと言われる銃器の信頼性は抜群だ。砂塵や熱、寒冷地にも対応し、未だに金属で作られているレシーバーは使う者に確かな安心感を与えると言う。
　だが、お世辞にも命中精度は軍用、笛吹用としては高いと言えないと聞く。ベテランが使えば、そんな事はないのだろうが私は素人に毛が生えた程度。それに設計そのものは１０００年も前の化石レベルだ。出来ることならもっと当てやすく新しいものがいい。そんな思考の末に反論したが、ターキッシュは小さく笑って応えた。
「お前が努力すれば当たるさ。それに俺はお前の射撃の腕より、１０

００年近く使われてきた銃器設計の方を信じる。予備はこれだ」
嫌味を聞き、私は偉大なる先達様に舌打ちを小さくした。マガジンを全てをチェストリグにしまい込んでライフルをスリングで肩にかける。サブアームは小口径のリボルバーだ。装填数たったのが６発、今時１５発入りが主流の中、時代に逆効していたが文句は言わずに渋々とホルスターに仕舞った。
「これで準備は完了したわけだ。さてベッキー、お仕事の時間だ。言っておくがコイツは散歩でもピクニックでもない。手綱は握ってやるが、それだけで安心するなよ。せっかくの高給取りになったんだ。命は無駄にするなよ」
ターキッシュは嫌な言葉をわざわざ選んで言ったが、その瞳は笑っていなかった。コレは遊びじゃない、と仕事を熟知した先達の目は狩りをする狼のように思え、背筋に冷やりとした物が伝った気がした。
「行くぞ」
倍率六倍の大型のスコープを乗せたマークスマンライフルを携えて、私の前を歩いた。私も彼に倣ってバックパックを背負って付いていく。私はその背中を睨んだ。何故かと言うと気に食わなかった。
例えば、彼の銃がそうだ。彼のマークスマンライフルは中距離での狙撃をするための長いライフルだ。アーマーライトと呼ばれる銃器の末裔で弾薬は７．７ｍｍ弾を使用しストッピングパワー。つまり一撃で相手を殺す事に特化している。
だが、それが気に食わなかった。７．７ｍｍ弾、私の４．８５ｍｍ弾とはまるで違い、互換性は全くないので弾の共有は不可能だ。つまり彼は私に頼る気などないのだ。一人で全てこなす気でいると取ることが出来る。
確かに私は新米で頼りないかもしれないが、こうもあからさまな態度を取られ続けられると頭に来る。だから、私は彼の呑気な後ろ姿を睨んだ。
『ケイブ形成』
女性を模した機械音声が鳴り、目の前のゲートに渦が形成された。ゲートの隣にぽつんと置かれている小さな画面には行先が表示され

ており、ゴールデントライアングルと書かれている。その渦の中にターキッシュが飛び込んでいった。やはり、何事も無いようにヒョイと飛んでいく様は二度目だったが、呆気にとられる。
渦の先を見ると向う側に半そでのシャツを着たヒトが歩いており、木製の家屋の中で何人かがくつろいでいる。私はこの先に何があるのかと思い、足に力を入れた。
『グッドラック』
機械音声の励ましが聞こえて私もその渦中に身を放り投げた。水の中へと飛び込んで、温かな感触が再び私を包み込んだ。ゆっくりと深呼吸をして、洞穴の先へと進んでいき、ゲートを飛び出た。
案の定、バランスが取れずにその場に転んでしまい、、周りがその様子を見て笑う。ノロノロと立ち上がってみるとその部屋は古い内装だった。木製の建物で、天井扇が回っており、ジュークボックスから陽気なロックが流れ、室内の雰囲気をますます古風にしていた。
お洒落なバーと言うより、よく改装されたコテージと言えた。
周りのヒト達は半そでのシャツでバーカウンターに寄り掛かってビールジョッキを片手に雑談している。
「着いたな。ベッキー」
ターキッシュが目の前に現れて、ニヤリと微笑み、着いてこいと指をクイと曲げる。私は無言で従い彼の後ろにつく。初仕事という事で緊張に生唾を飲み込み、この木製の扉の向こうに何が待っているのか想像力を働かせたが、そんな事はすぐに無意味な行動だと知った。
百聞は一見に如かずとは少し違ったが、扉があけられるとそこには、黄金の稲穂が視界一面に広がっている広大な水田と、そこで編み笠を被って作業をするヒト。彼らの腕は鳥のような羽毛で覆われていて、顔やその他は人間によく似ている。
コテージから出て、現地の子供が私の知らない言語で何かを言って指さし、駆けまわる。短パンの子供達の足には靴が無く、グローブのように黒く固い素足が私を驚かせた。整地されたとはいえ、小石や砂利だらけの道を素足で駆け巡るなど信じられなかったからだ。
「これが俺達ヒトの元ってやつさ」

ターキッシュが目の前の光景にカルチャーショックを受けていた私に得意げに語る。
「ケイブが見つかってから、人間はこういう知らない世界から自分たちとよく似た生き物を見つけては連れ帰った。そいつらと交配して、労働力となる者を作り出したんだ。だが、作るだけじゃ、当然追いつかなくなる。子供が成長するのは十年以上はかかるからな」
その通りだ。子供と言うのは働けるようになるには十年の歳月を要する。一から作って、育て上げるのはかなりの苦労と金が伴う。だけどソレを解決するためにどこかの頭が良い奴が要ったのだろう。なら最初から大きいのを持って来ればいいだろう、と。
「アンダーハイブは人間のための土壌で、ヒトはそこに蒔かれる種なのさ。俺達はその種を植えたり、持ってきたりする職人だってわけだ。見ると違うもんだろ？」
アンダーハイブの人口は約7億。それら全てが人間の労働力で、7億全員が中、下層階級だ。人間は全員が富裕層で、私達の上で胡坐をかいて楽して生きれる神様だ。その社会を維持するために、新しい種を見つけたり、現地で何らかの危険に脅かされている子供をほどすると言う名目で子供を引っ張るのが私達笛吹という事を再認識した。
皆が皆、移民だと言えるのだ。人間様の世界に住ませてもらい、その下で働かせてもらっているという構図だ。私達笛吹も含めて、皆が人間のための労働者なのだ。
「じゃあ、コレが私達の故郷になるのですか？」
「かもな。今の俺達も大分昔に色々な種族とまじりあった混血児だから、ここかもしれないし、違うかもしれん」
私は黄金の稲の海を見、風に自分の黒髪をなびかせた。そして自分の腕を見た。此処にいる彼らと違い、大して毛も生えていない白い腕から、此処の世界の住人であったかも知れないと言う痕跡は見れなかった。
記憶をたどっても、無意味だった。私が覚えている限りではあまり綺麗ではない保育園の中で隣のクラスの男の子を泣かして祖父に起こられたのが最も古い記憶だった。

考えてみれば、あのアンダーハイブから自分がどこからやって来たかを知るなど不可能だ。多種多様な異人種たちが忙しく職場と家を行き来する中で一つでも特殊な文化という物があったことは無い。
大気を汚さないバイオエタノール車に、ポリエステル製の洋服。やかましいロックミュージックと愚にもつかない二級歌手のＣＤばかりがプッシュされ、高架橋下のスプレーで殴り書きされたＦワードがずらりと並ぶ。
口に運ぶのは遺伝子改良された農作物と石油から生成された人口タンパク質の偽物の肉類。
高層ビルの広告にははじける笑顔で商品を宣伝するアイドルに、ジャニーズと元居た世界の面影など一体どこにあるかなど見いだせるわけがなかった。
何もかもが人間由来でヒト由来の文化的創造物など十五年生きて一度も見たことは無かった。
何故か悲しい気持ちになった。自分の血がどこから来たか、全く分からないのが切なく思えた。ただ、目の前の黄金の世界を見ただけだと言うのに、心が揺れた。
「ターキッシュ先輩は何の種族なんです？」
「俺はライク。一番人間に近いって言われているヒトだよ」
「ライク」、一番人間らしいヒト。似て非なる者。アンダーハイブでは一番高位に当たる異人種だ。身体的有利性はないが思慮深いとされ、外見も人間に似てるせいか、ウケがいいと言われている。
アンダーハイブ内では最も高い位置に存在するヒトだ。
「先輩はどこから来たか、知っているんですか？」
私は興味本位だけではなく、真剣に聞いた。その質問に先輩は鼻で笑って応えた。
「知らねえよ。知ったところで無意味だ。俺達はアンダーハイブの世界の住人。街の中央にあるドでかいエレベーターを見上げて、人間に頭を下げるしか出来ないんだ。今更故郷を知っても帰れねえよ」
皮肉の連続だった。帰れるわけがない、私達はもう成熟してしまったのだ。あの地下世界以外で過ごすなど、もう手遅れだ、とターキッ

シュは言ったのだ。どこか寂しげな気もしたが、私は彼の皮肉にうなずくしかなかった。
　そんな他愛のないやり取りをしていると、道の向う側から一台のトラックがやって来た。目の前に止まると、嗅いだことのない油のような匂いがして、私は顔をしかめた。
「ガソリン車だ。匂いを嗅ぐのは初めてか？」
　ターキッシュは荷台に乗っかって、そのまま座り込んだ。どうやら、この上に乗っていくらしい。私も荷台に乗っかり、座るとトラックは走り出した。荷台の座り心地は悪く、ガソリン車の匂いもキツく感じた。変な油の匂いで好きにはなれなかった。
「どこへ行くんです？」
「町にな。セーフハウスがあるから、そこで仕事の話をする。つくのは四時間後だ。ゆっくり休め」
　ガタガタと揺れ動く車の上で四時間もいると言うのは苦痛に思えたが、ターキッシュは帽子を深めに被って、眠りについた。私は眠らないで景色を見ていた。すると、田んぼの向うの子供がコチラに手を振っていたので、私も手を振ってこたえた。

先

　トラックで行きついた先、ゴールデントライアングルで一等文化的な街、メコンに付き、ベッキーを引き連れて街を歩く。この世界に来たのは五回目でもう見慣れたが、都会育ちのベッキーには露店で売られる果物や農作物の市場が珍しいらしく、興味津々と言った顔で見ている。
　この地の言語で「安い、新鮮」と言う言葉が飛び交い、物珍しく見回るベッキーに果物を売りつけようとするのを追い払い、彼女によそ見をするなと言って手を引く。時間はあるが、出来ることなら早くやることに越したことは無い。
　市場を抜けて、歩くこと数分。安いモーテルへとたどり着き、宿の店主と話をして鍵を受け取る。まだまだ俺の言葉も流暢とは言えな

いが、何とか意思疎通はできる。それをベッキーは意外そうに見ていた。
「何でも興味津々そうに見るな。この世界の連中はがめつい、地下で学んだろう、ベッキー」
「でも、露店で果物とか売るなんて初めてみましたよ、私」
「珍しくても、だ。確かにここの食い物は美味いが、仕組みを知らないと大けがの元だ。今からソレを話してやるよ」
扉を開けて中に入る。真っ暗な部屋の中央まで足を運んで、天井の蛍光灯のひもを引っ張るが電気がつかない。またしても電気が通っていないことにため息を吐き、俺はバックパックから電灯を取り出し、着けて部屋の明かりにした。
簡易なベッドとソファがある以外何もない部屋で、電話は勿論、TVだってありはしない。簡易なラジオだけが娯楽の部屋でベッキーは床に座り、背の低いテーブルに腕を乗せる。
「ちょっとどけ」
腕をどけさせて、テーブルに地図とこの世界用の教科書を置く。俺は教科書を捲って、年表のページを開き、ベッキーに読ませる。
「さて、簡単な説明をしよう。この世界には国という物が存在しており、俺達はペイ・ガン王朝と呼ばれる国に来ている。此処の技術は高くなく、また紛争も絶えない。部族同士が果てしない戦争を繰り返している」
歴史によると、紛争そのものは百年以上続いており因縁朝はからぬ相手となっている。何が面白くて戦争を続けているのかは知らないが、俺達にとってはそれは重要な事であるのは確かだ。
「ここにはTVもないし、電話もない。そもそも放送局も中継基地も数々の戦いで壊されて、長い事修理されていない。それ程この国の現状は酷いものだ」
「うちの世界は何もしないんですか？」
「野菜の取引以外はしないな。お前は知らないだろうがケイブを通した外交っていうものがあって、人間は質の高い野菜を買い叩いているだけだ。それ以外は俺達に押し付けるだけ、まさにでくの坊だ。」

これは笛吹や人間と仕事をするごく一部だけが知っているが、人間はケイブを通した外交や戦争も行っている。この世界の場合は生鮮食品の取引だ。ケイブを使えるのは笛吹と人間だけだから、アンダーハイブの人間は知らないし、もっと言うと知ろうともしない。そんな事より今日明日の仕事の方が大事だからだ。

「村ごとでの付き合いは家族単位が主で男中心の社会だ。恋人同士のデートも親同伴の場合が多いほどだ。さて、コレがどう俺たちの仕事に繋がるか、わかるかベッキー？」

「……いいえ」

試しに訊いてみたが彼女は答えが思いつかばなかったようで手を上げて、興産の意志を表明した。俺は教師になったつもりで彼女にその答えを教えた。

「長い紛争で子供はよく攫われる。家族ぐるみで出かけたところを襲って親を皆殺しにして、連れ去るってのがこの地での日常だ。子供は大抵兵士に教育されるか、お楽しみか、はたまた……て感じだ」

「……酷い」

率直な感想を述べるベッキーだが、俺達の仕事はそれが無くてはならないのをまだ知らない。彼女は何せ生まれたてのヒヨコの如き、新米で知らないことが多いからだ。

「だが、それこそが俺達の仕事の絶好の機会だってことにもなる。そんな子供を俺達の世界に連れてきても、誰も文句は言わない。俺達は紛争地から子供を助けるヒーローだからな」

ベッキーは憤りを感じているようだった。顔が強張って、声を出さずに俺の顔を見つめるだけだ。

「あのボルドーも言っていたろ。子供をただ単に攫う訳じゃねえって。つまり、俺達は攫ってもいい子供を見つけて行かなくちゃならないんだよ。その点言うとこの世界はうってつけだ。可哀想な子供で溢れて、取り放題だ」

言うなれば俺達は他人の不幸があって喜ぶ嫌な奴らだ。ちょうど脳死もしくは植物状態になった子供の遺族たちの元に赴き、臓器提供してくれと頼む連中と大差ない。子供の親がいないと言うのは好都

合なのだ。この世界の善人たちとの関係を壊すことが無いというのは、人間にとっては商業の邪魔にならないし、俺達笛吹にとっては敵を増やさないで済むという構図だ。

悪党から子供を救う。字面だけ見れば何と正義に溢れて優しい言葉だろうと思うが、本当は悪党など最初からいない方がいいに決まっているのだ。

だが、俺たちの仕事は悪党なしでは遂行できない。この悲しい構図に大体の新米は良心の呵責だとかに襲われて辞めてしまうのだ。

第一、子供を救う理由からして、ロクなものではないのだ。アンダーハイブに連れてくるのが子供である理由は効率的な同化政策のためだ。

こっちの文化、風習に慣れさせて元々の文化的なアイデンテイを崩す必要があるからだ。ナイフとフォークの使い方ひとつとっても俺達と同じにすることで仲間意識を持たせると言ったものだ。

その方法は極めて簡単だ。子供に選択肢がない事を良いことにコチラに連れて来て、常識や礼儀作法を教育と称して叩きこむのだ。過去、移民や征服地での教育という物はすべからく上手くいった試しがなかったが、それは文化や言語は誰にとっても重要なアイデンティティであり、それを無くすことは自分を無くすと同意語だっただからだ。

だがそうした〈祖国と故郷〉が無い場合は話は別だ。対して教育も受けていない、国家に対する思いなども自分たちの境遇を思えば愛すべき理由だってないからだ。だから、最悪の環境下の子供を救うことでこの条件を見たす、と言うのは理に適っているのだ。

人間達の過去でアフリカ大陸と呼ばれた場では様々な国が存在していた中で国外への人材の流出が止まらなかったのは、国への愛とやらか希薄であったと聞くが、それと同じだ。悪党を除けば誰だって地獄に好き好んで済む奴はいない。

しかも、先ほどのようなナノマシンが出来てから言語面での問題もクリアされ、教育も遥かにしやすくなり、なにより言葉と言うアイデンティティを希薄化させることもできた。

同じ言語を話すと言うのは仲間意識で最も重要、その上で祖国の言葉があっては非常に困るのだ。異国の言葉と言う認識が残ればこちらの同化に距離を置いてしまう。
これが大人では教育を施すには難しくなる。大人の多くは何かしらのアイデンティティを持っており、また独自のコミュニティを作り出す可能性が高いため、連れてくる例はかなり少ない。
こうして見ると、確かにロクでもない。
だが、それでも救いになると俺は考えている。死ぬよりかは生きるほうがいいに決まっているからだ。
「先輩の言い方も酷いですね。自分もその職場の人間だって自覚しているんですよね？」
「まあな。だが現実は現実だ。問題はそこでどんな仕事するか、だ」
俺は話ついでにバックパックから、一つの器具を取り出す。一つは小さな蜘蛛に似た機械で大きさは直径一センチもないものだ。名前をティ―チという。
「それとコイツをこめかみにつけろ」
「何ですか。コレ？」
手に取って不思議がる彼女は気味悪そうに銀色の機械をこめかみにつけた。蜘蛛の機械はそのまま頭の中にスルリと入り込み、彼女は一瞬悲鳴を上げた。だが、痛みがない事に違和感を覚え、視界に数字が出るようになったであろう彼女は目を白黒させた。
俺はそれを確認してこめかみを押し込み、念を送る。
『驚いたろ？　ソイツガ一番新しいＨＭＤ、ティ―チャーだ。ナノマシンの複合体で、頭ン中に入り込んで、現地語の翻訳から、バイタルチェックまでしてくれる優れものだ』
『気持ち悪い……頭の中に声が響いて』
顔色を悪くした彼女は壁に寄り掛かって荒くなった息を落ち着かせようとする。確かに最初は気味の悪さで俺も貧血用になったモノだ。この機械を作るのに何人か脳に異常をきたして死んだらしい。何せ、ナノマシンが脳に寄生して機能するのだ。死人が出ない方がおかしい。もしかしたら、そいつらの怨念でも入っているのかもしれな

い。
だが、コレが実に役立つ。通信基地なしでも相棒と話すことが出来、位置も知ることが出来るのだ。
『慣れろ。コレがあれば、相手にこっちの言葉が漏れない。盗聴もできないしな』
『そんなに便利なら何で、最初からつけさせなかったんです？』
『お前らは無知だ。戦闘も言語も、世界の違いも全く知らない。だから、ゴム弾で体に痛みを叩きこむ必要もあるし、この世界はお前の世界とは違うって分からせないといけないんだ。電卓を使う前に算数を覚えるのと一緒だ』
ベッキーは不満な顔をした。十代の少女らしい反抗的な態度だ。八重歯を覗かせたふくれっ面は可愛らしく見えたが、此処ではその顔は場違いだ。これも必要な事だから俺はいつも通り笑顔で応対する。
もし、あの模擬戦闘や道の言語に触れることなしに、これらを行えば大体が増長する。十代のヒトが来るようになってからはその傾向が強い。自分は何でもできるようになったと勘違いして、最悪単独で独立しようとすらする者もいた。
そんな事になれば、馬鹿なそいつだけではなく、俺も一緒に地に転がって、躯を晒して土の養分となって消える。そんなのは絶対に御免だ。
俺はこめかみから指を離して彼女に言いつける。躾と同じように語気を強めにハッキリと述べる。
「お前はナイフが上手かった。恐らくロクな生まれじゃないし、それなりに危ない橋を渡ったかもしれないが、此処はそれ以上で、ど汚い場所だ。無論俺達だって綺麗じゃない」
その時、俺は他人の気配を感じ取った。モーテルの薄い壁の向うに誰かが来たのを感じ取った。ベッキーも何か聞き取ったようで、怪訝な顔を浮かべている。
俺は舌打ちした。ここの場所もばれてしまったのか、と思った。だが、同時に言うとタイミングがいいときに来たとも言えた。大きくため息をしてライフルを自分の傍へと持ってきて銃口にサプレッサー

をつける。音を消すためではなく、聴覚を保護するためにだ。
「だが、問題は仕事の仕方だ。たとえ自分が悪党だとしても、善か悪かなんてものは行動の末の結果で決まる」
口でそんな事を語りながら時々こめかみに指を当てる。
『伏せろ』
「はい？」
ベッキーは一瞬何だと思ったが、すぐに察した。俺にはぼそぼそとしか聞こえないが
彼女には相手が何を話しているのかが分かるらしく、表情をこわばらせて固まった。
俺はライフルを片手に持ち、瞬時に彼女を床に伏せさて、壁に銃口を向ける。
「伏せろって言ったろ！」
壁越しにマークスマンライフルを連射する。引き金を何度も絞り、金色の薬きょうが排出され、宙を舞う。安モーテルの薄い壁に防弾能力は無く、薄いベニヤ板に穴が開いて、木片を派手に散らせていく。
八連射すると向うからも反撃が来て、フルオートで出鱈目な射撃が床に伏せた俺達のすぐ上を通過し、ベッドにラジオと穴あきチーズのようにズタボロにする。ベットは羽毛をまき散らし、ラジオは端子とスピーカーの欠片を飛び散らせていく。
もう五秒遅ければ、俺達がああなっていたことを想像し、射手のいる方へ二連射し、壁の向うで何かが倒れて派手な音を立てた。
更にもう一人いると感じ取って俺はベッキーの太ももにあるレッグホルスターからリボルバーを抜き取って玄関の方へと照準をつける。その際ベッキーは「脚を触るな！」と喚いたが気にしなかった。
「ターキッシュ！　将軍からの贈り物……」
最後までセリフを聞いてやる寛容さもないので。言わせる前に連射し、ドア向うの誰かを撃ち殺した。いつも自動拳銃を使っているせいで装填数を八発と間違える凡ミスをしたが、ノープロブレムだ。次の瞬間爆発が起こって玄関丸々吹き飛ばした。
「素人が」

アサルトライフルで殺しにかかり、ダメ押しで手榴弾でとどめを刺す。殺す方法としては悪くない手だが、いかんせん人員が粗悪すぎたようだ。
俺は立ち上がって、崩れた壁から隣の部屋へと入った。三人いて、二人は死亡。一人は虫の息で血だまりの中でうずくまり、目から涙を流して、痛みに悶えている。
俺はリボルバーから空薬きょうを取り出し、新しい弾薬を込めて、頭を抱えるベッキーに言う。
「さっきの続きだが、一つ言っておくことがある」
リボルバーの回転弾倉を銃に収め、その銃口を倒れている悪党に向ける
「俺は悪党が嫌いだ」
人差指に力を込めて、目の前の悪党を一人この世界から消してやった。脳漿と血がぶちまけられ、頭蓋骨の小さな破片が宙を舞った。世の中便利なものだとすら思う。手に握るコレさえあれば、悪党一人殺すのに２０ｇの弾丸と人差指に込める僅かな力だけで事足りるのだから。
死体の服に手を突っ込み、目当ての物を見つけて額に汗をかくベッキーに見せつけて俺は仕事の内容を述べた。
「将軍、そう呼ばれている大悪党がこの世界にいる。ガキを賭け事の対象として扱って大金をせしめている不逞な輩だ。俺とお前の仕事はそこからガキを救うことだ」
見せつけたのは解放革命統一戦線と書かれた部対象であり、悪趣味な事に将軍自らの威風堂々とした自画像がセットで付いている。
「という訳で、誇りを持って仕事をやろうぜ、ベッキー」
崩れたモーテルの中で俺は言った。子攫い、人間の手下、ヒトでなし、と数多く呼ばれるが俺は仕事に誇りを失ったことは無い。悪人を一人だろうが百人だろうが殺した所で俺の誇りは失われないのだ。
死体と木片が積み重なった中、月明かりだけが俺達を照らした。

第4話

先

夜を超えて、山を越える。あのモーテルでのお粗末なウェスタン映画のワンシーンのような銃撃戦の後、俺とベッキーは将軍と呼ばれる、この地で最大の民兵組織の元へと向かうために荒れ果てた大地を進み、山の中へと入った。

鬱蒼とした木々、アンダーハイブのコンクリートジャングルとは違い、此処では本物のジャングルが存在していた。背の高い名も知らない木や様々な植物が生い茂る中で自分たちが歩いてきた場所を振り返ってみる。

この世界の風景の八割は荒涼としており、見渡せば湿り気もない赤く固い土の地面にコケ類の緑が点々として大空には青い空と太陽があるだけ。ひとたび都会から離れれば、大自然が広がるだけで、そこではヒトを拒むかのように厳しい気候と恵みも少ない土地があるだけで、言ってみれば神に見捨てられた土地だ。

だが、こんな所に好き好んで済むと言う者もいるらしいのだから、正気を疑う。と言うより貧民の殆ど、この世界の六割は大体この荒地に住んでいるのだから、正気を疑うべきは現地のヒトより、この世界そのものだろう。

この世界は俺達の世界に似て、酷い場所に弱く貧しい大勢が住んでいるのだ。富裕層たちが豊かな地を独占していると言うのはどこへ行っても変わらないという事で実に酷い。世の理不尽と言う奴はどこへ行っても共通なのだろう。、

山に入れば、今度は緑に包まれた地獄が待っている。アンダーハイブの住人なら誰でも受けるワクチンなどの予防接種が無ければ、たちどころに熱病を持ち運ぶ蚊や危険な植物性の毒の餌食となる。現地のヒトは赤血球の形が変わっているらしく感染しずらいらしいが、俺達はより発達した医療技術が無ければ、この地に足を踏み入れることはできなかっただろうことは確実だ。

そして、乾いた空気に高い気温は俺達の体力を蝕む。そのせいか

ベッキーは歩き出してから、一言も話すことなくバックパックと銃器、弾倉という、どれ一つ失っても命とりになるであろう命綱を背負って歩き続けている。
健気にも文句の類を口にすることは無かった。根性があるのか、もしくは俺に対する対抗意識によるものが彼女をそうさせているのだろう。
俺は彼女の様子を見た。肩を揺れ動かし、息を切らせて歩いている。整った顔は疲労で白く見える反面暑さで頬を赤くしている。無理もない、伸縮性のあるスーツにはパワーアシストは無い。あるのは人間工学を用いられた重さを軽減するためのプロテクターだけだ。
これは頑丈なヒトに高価な装備は要らないと言う人間様のありがたいお気遣いによるものだ。人間用のパワードスーツは存在するがヒト用のは存在しないのだ。
俺はそんな彼女を見た後で腕時計を見た。最後の休憩から二時間半。頃合いと思い、ブーニーハットのつばを指で折り曲げて彼女の顔をよく見て言う。
「休憩だ。そこの木の下に言って休むぞ。水分補給も忘れるな」
「……ハイ」
木の影へと歩を進み、俺はその場に座り込んだ。ベッキーは荷物を置いて倒れこむように、体を大の字にして転がり、真っ先に水筒の中の水を喉に流し込んだ。肌を伝う汗の粒は大きく、酸素を求めて大きく深呼吸をする。
「思ってたのと違うだろ?」
俺はベッキーにそんな事を訊いた。大抵の新米は話と違う、何故自分がこんな苦しい思いをするのか、と不満を声にして吐き出すものだが、ベッキーは言わなかった。もしかすると、先日の殺しの光景を目の当たりにしたせいで俺を恐れているのか、と気になった。
「楽なお仕事では無いのは理解しましたよ」
「意外と口がきけるな。俺は昨日の出来事でショックを受けたと思ったんだが」
ベッキーはショックを受けた顔をして、首を横に振った。俺の目で

はなく、俺の手を見て彼女は言った。
「生まれはいい所じゃないですけど、ナイフで刺し合いっこしたりしましたからね。でも……あんな簡単にだなんて……知りませんでしたよ」
「仕方ないさ。ゴム弾じゃ誰も救えない。ここでは誰かを救うなら、誰かを代わりに地獄に送らないといけないんだ」
そこでベッキーは目つきを鋭くした。どうやら、人殺し云々で文句はあっても、俺に対する恐怖心は微塵もないようだ。中々芯のある強い女の子だと感心してしまったほどだ。
「悪党ならいいと？」
「善人よりかは」
冗談らしく言ったつもりだが、ベッキーの顔は険しくなった。必要なら善人も殺すのか、と彼女は疑問に思ったのだろう。だが、俺は善人と言うのには手をかけずに来たつもりだ。理由は色々あるが、誇りと言う面が大きいかもしれない。たった一つの願いを秘めたためだけだ。意地と言ってもいい。
だが、こんな考えを通していると善人をお前が決めるのか、ともっともらしいことを言うヒトもいたが、俺はそうだ、と答えてきた。真に公正な判断と言うのは難しいし、それをとやかく言う奴らは基本的に何もしない。
口だけの連中だ。だが、俺は行動を起こし誰かを救うと考える。だが今のベッキーにソレを説くのは難しい。彼女は悪党の所業を見た訳でないのだから。
だが、言わないよりマシだと考え直し、俺は疑いと嫌悪の目を向けるベッキーに向けて頭を掻きながら言った。ため息を吐かなかないよう気をつけ、彼女の感情を刺激しないために配慮した。
「悪党に同情か？　新聞屋の連中みたいな真似はよしてくれよ。俺は仕事に対して真摯でいたいだけなんだよ」
楽な仕事は存在してはいけない。それが俺の中のルールだ。俺は笛吹の過酷な環境下におかれた可哀想な子供を救出すると言う目的を正しく理解して、実行しているのだ。多くの悪党を打ち殺し、時に

は締め上げ、叩きつけて囚われの子供を救い出す。
「どうでしょうね？」
「おい、勘弁しろよ。悪党をぶっ殺して、未来の危機を減らして子供も救う、コイツのどこに文句がある？俺は笛吹の目的を正しく行っているだけだ。そいつに何の不満が？」
　決して現地民兵に村を襲わせるように仕向けたり、そこいらの孤児院から現地にとっての大金で子供を無理やり買い取ったりもしない。俺はただ単純に子供を救い出しているだけだ。その過程で幾人かの悪党をゴミ掃除しなくてはならない、シンプルな答えだ。
　それを非難される謂れがあるとするならば、より理想的かつ現実で実行可能な方法を示してもらわねば、俺は納得しない。できるというなら、伝説の兵士を呼び出し相手を無傷で取り押さえ、聖人や神様の如き万能さと清らかさを持って仕事をしてほしいと思うものだ。
　ベッキーは反論をあげなかった。意外にもこの犬獣人の少女は感情的な反論をあげなかった。ただ、拳を握りしめて堪えていた。憤りを感じざるを得ないが、行為の正しさには一定の理解があるらしい。
　それもそうだ。ベッキーはあの地下世界で由緒と金があるお家で育ったものではない。刀傷沙汰を喧嘩と言うような奴は何が正しいかを知っていても、それを行使する方法など知るわけもない。
　むしろ、正義の反対を行った方がずっと簡単で益があることを知っているのだ。夢だのなんだのは結局は現実に押しつぶされてしまう。ヒトは成長するのには夢を食いつぶしてしまわなくてはならないのだ。そこから這い上がれるのは諦めない奴だけだ。
　もっとも、それが全体で数えると何人いるか、など聞くまでもないほど少ない。
「物分かりがいいようで助かるよ」
　俺はとりあえずの礼を言った。皮肉に聞こえなくもないが、この話し方は自分の性のため直すことは出来ない。だが、この口調故に相手によく響くのだからやめる気もなかった。実際、目の前の彼女も嫌悪感にまみれた視線を送ってくるが、それだけで収めている、
「……余計なひと言が多いのよ」

一言つぶやかれた言葉は俺の耳に届いたが、聞こえなかったフリをして俺は明後日の方をみやろうとしたが、突然山全体が揺れた。
遠方で爆発音がして、鳥たちが驚いて飛びたつ。新米のベッキーは俺より半秒早く反応し、ライフルのグリップを握りしめて、爆発音のした方向へと振り向いた。俺は方向と音の速さを勘で計算し、大体の場所を突き止めて、走り出す。
「どこへ?!」
「音がした方だ！　走れ！」
マークスマンライフルのセレクターを回し、安全装置を解除、チャージングハンドルを引き初弾を装填する。木々を走り抜けて、草木を払い奥へと進むごとにフルオートで放たれる銃声と耳をつんざく悲鳴が上がる。
この辺で村落があったなどとは聞いていないが、一つはっきりしていることがある。それはこんな辺鄙な場所に村があって、そこで銃を撃つ輩はどう考えてもロクでもないアウトローだという事だ。
証拠はそれだけでない。断続的に発せられるフルオートの銃声は練度の低さを物語っており、正規軍の者ではない。正規軍なら通常はフルオートによるバラマキを避けるように訓練をする。単発ないし、バースト射撃で撃つ方が命中するし、余計な弾薬の消費が少ないからだ。
次に悲鳴が女の声も混じっているという事と笑い声が聞こえるようになってきていることだ。そんな事は頭のネジが外れた阿呆しかしない。
俺は林を抜けて、崖の淵に立った。そこから見下ろしてみると小さな村落が確かに存在し、あちこちで煙が立っている。一歩遅れてベッキーもやって来て、その光景を見て驚く。俺にとっては見慣れたものだが、彼女は違う。
目のあたりにされる村落つぶしの光景に彼女は昨日以上にショックを見せていた。俺はそんな彼女を一瞥して、予備の二十倍率の狩猟用のスコープで村落を偵察する。
村の中央に両手を上げた老人や大人の集まりが写り、その周りには

木製のストックとハンドガードを備えたアサルトライフルで武装された集団が取り囲んでいる。装備はバラバラで、半裸だったり、正規軍のようにボディアーマーだけでなく、ヘルメットまでご丁寧に被る者もいれば銃ではなく、山刀しか持っていない者もいる。明らかに民兵、ゲリラの類だ。ベッキーは肉眼でも多少は見えるらしく、その動向をスコープもなしに見る。

俺はそんな彼女にバックパックから取り出した双眼鏡を手渡し、同じように偵察させた。すると、中央の怯える群衆の前に赤いベレーを被ってタイガー迷彩のズボンを履いた男が出て来た。写真で見た男、将軍と呼ばれる大悪党のお出ましだった。

部下が拡声器を持って歩み寄り、将軍に手渡した。これから一体何をしようと言うのか、俺も頭には答えが出ていた。俺は８倍率のスコープをつけたままのライフルを肩付けしてストックに頬を乗せて、構えを正す。

距離にして、７００ｍ以上８０００ｍ以下。スコープをその距離に合わせてダイヤルを回し、長年の経験をもとにレティクルを将軍の体の中央に持っていく。引き金に人差指を持っていき、呼吸を整レティクルの揺れが収まる最高の瞬間を待っていた。

しかし、そこに新たな影が現れて俺は人差指を引き金から離した。狙撃を断念せざるを得ないその物体をスコープで見定め、舌打ちをした。

「何ですアレ?!」

「……俺が聞きたいな。何でこんな所にあるんだ？　ウチのとこのパワードスーツだぞ」

噂をすれば何とやら、俺の思考を神が読み取ったのか。

将軍を俺のライフルから守るかのような絶妙な位置に着いたのは高さ二メートル程のフラットブラックの厚い装甲に包まれた兵器、「プレジデント」だった。アンダーハイブ内にしか生産工場が無いはずのパワードスーツが俺達の視界に映ったのだ。

装甲は曲面を描いた丸々としたデザインでライフル弾程度は物ともせず、走り出せば時速４５ｋｍ程で走れる。数値だけなら熊より遅

く感じるが、１２．５ｍｍの重機関銃とその弾薬５００発を携行し、そのパワーは軽自動車程度なら片手でひっくり返せるという物だ。当然だが、このまま撃ち合っても勝てる相手ではない。

だが、本当におかしな話だ。普通はゲリラや民兵が持てるわけがない兵器だし、彼らの教育、技術レベルを考えれば整備が複雑な兵器は避けられるはずだ。この厳しい自然の中であんな兵器を整備もなしに稼働するなど自殺行為だ。それなら、適当な軽トラックに機関銃を乗っけた方が身の丈に合っているという物だ。

「どっかの馬鹿が流したな……しかも整備のアテもあるのかもな」

俺が一人思考を口にしていると、向う側に変化があった。将軍が拡声器を手に離しだしたのだ。デカい音声でこちらにもよく聞こえた。

『この村落は統一戦線が徴収する！　統一戦線は人民に真の自由と独立をもたらす！　だが、そいつに従わないモノには容赦しない！』

プレジデントの傍から動かず狙撃が出来ない中、将軍は懐から何かを取り出し、大事な演説を続ける。

「異世界だがから来た奴にこの国は根っこから腐敗した！　それもこれも、お前たちのような戦いもしない臆病者の手によってだ！　未来をこの手に掴んでお前たちはこの国を駄目にした！」

不穏な雰囲気が流れだした。これから行われるのは間違いなく大虐殺だ。革命の敵である人民を処罰すると言うのだ。主義主張で連中が動くわけがない。動くならこんなことはしない。基本的に金にクスリ、そして征服欲と言う名のおぞましい欲望に飲み彼らは動く。だから、敵対するはずの人間から頂いたであろう兵器を何の迷いもなく使うのだ。

どこかの村を暴力で潰し、泣いて喚くヒトを背後から撃って殺し、誰かの娘か妻を地面に押し倒して腰を動かして楽しむのを父や夫に見せつけた後で喉を掻っ切る。酷いときには母親にソレをやれと小さな男の子に強制するときだ。逃げれば切れ味の悪い斧かナタでなますにされる。

「統一戦線は裏切り者や無気力な売国奴をぶっ殺す！　革命万歳！」

万歳三唱と、殺し屋以下の獣畜生な連中が革命やら聖戦を称える。

前兆だ。これから筆舌しがたい残虐行為が今行われようとしているのは猿でも気づくことだろう。スコープの視点を将軍からズラし、中央に集められたヒト達をもう一度見る。すると大人達の中央に子供が隠れているのが見えた。

小さな男の子と女の子が二人ずつ。そこに頭を抱えて震えているのを見つけた。

「ああ、クソ！」

普通なら、こんな状況は見て見ぬふりをするのがセオリーだ。誰だって死にたくない。火傷を負うと知りながら、熱々のヤカンや火中の栗を拾う者は愚かだというのは笛吹でなくても分かることだ。

敵の人数は確認したところ、15人以上入るとみて間違いない。それにパワードスーツまで要るのだ。対戦車ロケットすらない、できることなら戦車や爆撃機を呼び出したいほどだが、そんなものはありはしない。

俺は手持ちの火器を確認した。破片手榴弾にマークスマンライフル、9mm口径の自動拳銃、発煙筒がいくつかに、ナイフと見て俺はマークスマンライフルを携えて立ち上がった。

全く以て自分が嫌になる。あんなのを見ると衝動を抑えられなくなるのだから、つくづくこの仕事には向いていないと思う。ハッキリって馬鹿同然だ。全く以て度し難いと思う。

だが、馬鹿にならないとやれないこともあるのだ。

「おい、ベッキー」

俺はまだ頼りない相棒の名を呼んで振り返った。しかし、そこにあったのは双眼鏡だけ。近くにあの女の姿は見えない。

「あの馬鹿犬！」

気付かなかった俺も間抜けだが、彼女も相当だ。どうやら、馬鹿は二人だったらしい。俺は村の方へと走り出した。

犬

木々の間を駆けていく。ブーツの底に感じるぬかるみと太い木の

根っこのせいで、いつもより早く走れない。距離にして１０００ｍもない距離なんて、舗装されたアンダーハイブの道路で走れば大した距離ではないはずなのに、随分と遠く感じる。
走っていると枝の先がパシン、と顔にあたって痛みが走ったが、私はそんなもの気にせずにただ全力で駆けた。
ＡＫタイプのライフルのレシーバーの右側にあるセレクターを操作してフルオートに位置で固定する。正直な話、自分に撃てるのか自信が無い。あの夜、ターキッシュはいとも簡単にヒトを三人撃ち殺した。一切の容赦なく殺した彼の顔にはＴＶドラマの犯罪者のような笑顔があったり、怯えたりしなかった。ただ無表情のまま普通に行ったのだ。
あれを見て、私の甘い砂糖菓子のような覚悟なんてものは消え去った。アンダーハイブでいくら意気込もうと何の意味もない、今この状況で覚悟しなくてはならないのだ、と気づかされた。所詮想像だけで作った覚悟なんてものはガラス細工だ。綺麗なだけで、すぐに壊れてしまう。
敵と出会ったら、引き金を引けるだろうか。走り抜ける中。頭の中はそればかりだ。こんな三キロ程度の物体から弾丸を撃ちだすのに使う人差指が重く感じられた。
だけど、双眼鏡で見たヒト達と子供、あんなのを見捨てることなんて出来ない。ターキッシュの事は分からなくとも、自分の気持ちは知っている。助けなくてはならない、と助けろと心が私に命令する。
感情で動くのは三流だとか、あの嫌な先輩は言うだろうけど私はそれが出来るほど、経験を積んではいないのだ。
木々を抜けて村の入り口に立ち、ライフルを将軍と呼ばれる男に照準をつける。私の姿に今まで気づかなかったのか、あっさりと後ろを取れたので拍子抜けだったが、気にせずに大声で警告を発する。
「動くな！」
何名かが銃を向ける。水平二連のショットガンに、錆びが浮いて赤茶色になったアサルトライフルや針金でライトを無理やりくっつけたサブマシンガンと様々な粗雑な銃器が一斉に私に銃口を向けてき

て、私は首もとに汗が流れるのを感じる。緊張感、それに恐れが心を支配して心臓の鼓動が早くなり、喉がカラカラに乾く。
「何だお前は?!」
「異人だな？　しかも女とはな」
一人銃を持ってやって来た少女、周りからそう見えるのだろう。下種な視線が私の体のラインをなぞる。終わった後のお楽しみの事でも考えているのか。
奥歯を噛みしめて周りを人にらみする。唸り声を上げて、周りを威嚇する。ふざけるな、嘗めるな、と銃口を突き出し私は大声で言い放つ。
「嘗めてんの?!　いいから、さっさと銃を下ろせってんだよ！」
その時、後頭部に固い感触が伝わった。次に聴覚がカチリと金属の音を捉えた。自動拳銃のハンマーが下ろされた時のモノだ。私の後ろに敵が回り込んで、頭に銃口を突きつけている。
「下ろすのはお前だ。異人が」
迂闊な事に後ろを取られた。助けに来たつもりが、私まで捕まるとは何と間抜けな事だろうか。悔しさと未熟さに歯噛みをし、自分の技量の無さを恥じた。
横目でチラリと除くと、年季の入ったリボルバーが私の後頭部にしっかりと狙いを定めており、彼の気分次第で私が一秒もかからずに地に伏せることは明白だった。
しかし、素直に銃口を下げても無事などあるわけがない。それを証明するかのように男は息を荒げて、私の胸と顔を視線が行き来しているのが分かった。
周りの連中は奇声を上げ、大声で笑う。中にはこの村の痩せこけた娘より肉付きがいい事を口にし皆がソレに同意して、さらに下品な笑い声を山中に響かせる。
「心配すんなよ。飽きるまでは生きていられ……」
最後まで言葉を言い切る前に私の頭に生暖かい物が飛び散った。頬についた液体の色、鼻孔に香る鉄の匂いで、それが血だと分かったとき、私の思考は止まるどころか猛烈に回転しだして、チャンスだと

すぐに判断した。
ライフルをフルオートのまま腰だめに撃った。狙いは付けていないまま、ただの威嚇に近い射撃をすると、民兵たちは一斉に散った。将軍は木々の中へと隠れ、それをカバーするようにプレジデントが楯になりつつ、狙撃手のいそうな方向へ向けて重機関銃をばら撒き、大きな口紅のような空薬きょうを排出し続けた。
「散れ！　散れ！」
敵の誰かが叫んだが、次の瞬間に銃声が響いて頭がポップコーンのように弾けた。四肢に命令を伝達すべき脳が破壊された民兵は二歩三歩歩いた後で、その場に崩れ落ちた。
「逃げろ！　走るんだ！」
ターキッシュの叫び声が木霊し、村人たちと私は徒競走のピストルの音の代わりにマークスマンライフルの鈍い金属の金切り声を含んだ銃声で一斉に駆けだした。何人かの民兵が村人に銃を向けたのに、私は再び銃撃して抑え込み、血とアンモニアの臭さに私は嘔吐感を感じつつも民家の一つへと飛び込んだ。
地に伏せて、使い切ったマガジンを捨てる。荒い息のままアドレナリンが分泌されてハイになった頭のせいか、それとも恐怖のせいなのか、マガジンをチェストリグから取り出して交換しようとするが、引っかかって中々上手く入らない。
「嘘でしょ！」
頭の上を無数の銃弾が飛来し、訓練のゴム弾ではない本物の殺しの弾丸が木造家屋の壁を突き抜けて、私を喰いにかかって来る。モーテルの時と違う恐怖が全身を襲って来て目をつぶる。
空を切る音が次の瞬間には自分の頭部を狙ってくるのでは、と思うと怖くてたまらなかった。ターキッシュ、先輩がいないだけで怖くなって仕方がない。
目じりに涙をためて嗚咽すら流しそうになるのを必死にこらえ、マガジンを挿入しようと四苦八苦する。
「お願いだから、入ってよ！」
ショットガンの一際大きい音が鳴って壁が消えて遂に私の姿が向

うに丸見えになった。ダブルバレルのショットガンから二つの空薬きょうを取り出し止めを刺すために新しいのを入れている。
四名ほどの民兵が小火器を向ける。スローモーになって視界に映る彼らの動きが私の見る最後の瞬間になるように思えた。
死んだ、死んでしまう。これで私の人生が終わる、と確信を得た。仕事に夢を託して来たと言うのに、十五で終わる私の人生ははかなく思え、私は涙を頬に伝わらせた。
「馬鹿犬！」
男の声がして、民兵の右側から正確な射撃が彼らを襲った。腕や胴体を貫き、突然の奇襲に右往左往する彼らにターキッシュがライフルで5連射して、1名倒して、二人目の足と腕を撃ち抜く。半秒ともかからぬ動きで自動拳銃に持ち替えて残りも片づける様は神業的で、殺しのプロの動きだった。
銃口から発せられるマズルフラッシュの輝きが聖なる導きに見えて、先ほどまでの恐怖をどこかへと吹き飛ばした。呆然として、見つめているとターキッシュが私の方を見て、腕を掴んで立ち上がらせた。
「立て！　公園を散歩してるんじゃないぞ！」
激しい剣幕で言われた私は足に力を込めて立ち、ターキッシュの後ろを引っ付いて走る。そこまで来て、ようやくマガジンが入り、私はチャージングハンドルを引いて薬室に弾丸を送り込めた。手の震えがようやく落ち着きを見せたのだ。
「何てザマだ、助けに行っておいて後ろを取られやがって！」
「でも！」
助けたかった。救いを求めているであろう子供たちを放るなどできるわけなかった。私達は笛吹、子供を過酷な環境から救い出すのが職務、だからこそ私はこの職場に入った。
例え、人さらいと言われようと私には違う。
埃ある仕事とは、そうではないのか。私は少ない語彙をフル動員してターキッシュの罵倒に反論しようとした。しかし、目の前を走るターキッシュの横から一人が長銃身のボルトアクション小銃を逆さ

に持って彼に殴りかかった。
「うぜえ！」
敵のフルスイングは空振りに終わり、ターキッシュがストックで頭を殴りつけ、民兵の歯が数本、空中に飛んだ。脳震盪を起こして意識朦朧となった民兵の頭にターキッシュはマークスマンライフルのスリングを引っ掻けて、強制的に頭を上に向かせて、身動きを封じると共に、肉盾にして右８０ｍ先に見えた敵兵を二名射殺する。
「お前も撃て！」
怒号が私に向かい、私はＡＫタイプの小銃を構えて、走りながら撃つが、命中する弾丸はほぼゼロ。安定しない姿勢に何より気が引けて引き金を引く指に決定手的にキレがない。
そんな私達に榴弾が飛来し、派手な土煙が私達の間に舞う。運よく破片を免れたのか、至近弾の割に私にはもんどりを打った痛みのみで体はぴんぴんしていた。頭の中で鐘が鳴って耳が切ない悲鳴を上げている中。目の前に新たな民兵たちが現れたのを視認し、私は先輩の方へと振り向いた。
ターキッシュは飛来して来た破片を盾にした男に受けさせて、無事だった。不幸にも楯になった男は大声でわんわん泣き、先ほどまでの威勢の良さもどこへやら。味方に撃つな、と叫んですらいる。
「ベッキー、もう一度射撃だ！」
「ハ、ハイ！」
ターキッシュが三連射し、私も言われるがまま乱射し、跳ねあがる銃口を必死に抑えていると、偶然にも一発が相手に命中した。男が痛みに喚き、のたうち回る姿はそれはもう、痛ましく自分がやってしまったと言う心理的ショックが襲い掛かったが。ターキッシュのとった行動がそのショックを打ち消した。
「弾け！」
彼は民兵の腰に吊り下げていた手榴弾のピンを抜いて、縦代わりの彼を敵陣へと蹴り飛ばした。スリングが外れて自由になった民兵は助かったことに喜び、自分が人間爆弾になっていることにも気づかず。味方に抱き付く形となり、その場で炸裂した。

炸薬で熱されて、破片でスライスされた民兵は例えるなら不格好なレアステーキのようで血と肉と焼け焦げた衣服の欠片が爆風に乗って飛び、潰れたスイカのような頭部が私のすぐそばに転がって来た。
ヒトが物になった瞬間だった。映画のＶＦＸなどと比べ物にならない光景が目の前に広がり、私は半分恐慌状態になりつつフルオートの連続射撃を行うべく、トリガーを絞り続ける。
血の滴る半生の死体の臭気と硝煙と汗の匂い混じる場で私の先輩はあくまで冷静だった。
ターキッシュは弾切れになったライフルのマガジンを交換する暇すら惜しんで再び拳銃を取り出し、ダブルタップの二連射でサイドを狙っていた一人を射殺し、ホールドオープンした拳銃を握ったまま、左手でナイフを取り、投げた。
投げた方向は私で、私は驚きのあまり硬直したがナイフは頭のすぐ横を通り過ぎて髪の毛の何本かを切った後に私のすぐ後ろにいたナタを持った大男の喉仏に突き刺さった。
「伏せろ！」
間髪入れずにターキッシュが私の方へと走り、抱き付いて押し倒した。その半秒後には私達の立っていた場所に大口径の機関銃弾が通り、曳光弾の輝きが網膜に映った。
今まで見た度の弾丸よりも狂暴に見えた弾丸の唸りが私達の上を通りすぎていると、ターキッシュは自分のではなく、私のライフルを手に取って重機関銃の持ち主に向けて応射する。
その先にいたプレジデントに命中するが悉くが弾かれてしまい、効果をなさない。火花を散らして装甲が弾丸を弾き、周りにいた民兵の何名かに跳弾を喰らわすだけだ。
ターキッシュは派手な舌打ちの後に手榴弾を投げて、私の首根っこを掴む。
「逃げるぞ！」
「どうやって!?」
「いいから、任せな！」
彼が私の手を握りしめて、村のはずれへと全力疾走しその先へ行く

と、そこには急な斜面が見えた。この斜面を下ると言う勝機を疑う逃げ方だ。私は足を止めて彼の逃走ルートを拒もうとしたが、すぐ後ろでロケットかグレネードランチャーか何かわからないが、爆発を起こして爆風が私達を前へと押し出した。

悲鳴を上げて私は宙を舞い、ターキッシュも同様に叫んだ。二秒間程無重力を味わい、体がふわりと空を飛んだかと思うと、すぐに斜面に体をぶつけて痛みに声を上げる。

堅い地面を転がり、木々の枝が体のあちこちに引っかかり傷をつけ、その辺に転がる石ころでさえ、転がる勢い故に凶器と化して体を傷つける。脳に痛みが伝わるたびに私は情けない声を上げて、さらに下へ下へと落ちて行く。

皮膚に伝わる痛みに口の中に泥が入りこんで土の味を噛みしめる。埃を巻き上げて急な斜面を身一つで転げ落ちていく。灼熱にも思える痛覚が発する信号で私は短い悲鳴を上げ、最後に背中に伝わるひときわ大きな衝撃で痛みに悶えた。

一瞬何が起こったのか分からなかったが、腰に太い大木を打ちつけてようやく止まった、とと理解するのに数秒かかった。。

対衝撃、対弾性能に優れたスーツやアーマーを着ようと痛みはわずかに和らげられるだけだ。いかな装備で身を包んでもヒトである以上は痛みから逃れられない。それを理解した私の上で小鳥が呑気に歌うかのような鳴き声を上げて飛んでいた。こっちの状況も知らないで無邪気にさえずる鳥に何故か見とれた。。

一種の現実逃避、綺麗な空を仰いで痛みと今を忘れていると、急に腕を掴まれて私は現実へと連れ戻された。

腕を掴んだのは勿論ターキッシュで。整っている方の顔は傷だらけで、額から血を流していた。

「よお、お一人で英雄やった気分はどうだ？　ああ？　楽しいアクションムービーさながらのジャンプもできて満足か？」

「私は……」

そんなことはない、と言おうとしたがターキッシュの視線が私の口を封じた。反論などしようものなら殺される、と本能で感じ取って再

び涙目になった。
「いいか？　今後勝手なことはするな。お前はまだ十五だから、なんて言い訳をアイツらは聞きはしないんだ！今度敵陣にダイブしてみろ、次はお前を最初に狙い撃つ、いいな？」
　ターキッシュは私を突き放し、ライフルもついでに返してきた。私は唯それに頷いた。言葉を発する余裕はなく、今まで反抗していた自分がいかに愚かだったかを思い知らされた。ここは笛吹の職場で、如何なる理不尽も受け入れなくてはならないのだ。
　たとえ、目の前で子供が連れ去られようとも。そう思って私は涙を拭って、今頃起こった体の震えを止めようと自分の体を抱きしめた。ターキッシュはそんな私を見てため息交じりに言った。
「……だが、ガッツは認めてやる。お前のおかげで何人かは救われたかもな。それだけは褒めてやる。蛮勇は捨てても、その心意気だけは捨てるなよベッキー」
　底へ言われたのは意外な言葉だった。完ぺきに私がへまをやらかしたのに、彼は私の心意気は褒めると言いだしたのだ。
　何故？と頭に疑問が浮かんだ。彼は殆ど動かなかった。村人を救う気が無かったように思えた彼が、合理的に殺しを行う彼がどうして非合理的な心意気なんて物を褒めだしたのかが理解が出来なかった。
「何してる？　行くぞ！」
　苛立った言葉に急かされて、私は彼の後を追った。長い仕事はまだ始まったばかり、今日見た光景はまだ序の口と言わんばかりにターキッシュは奥へと歩んでいく。
　その背中に私は奇妙な感覚を覚えた。彼は一体何なのか、と。未知なる存在のようで、それでいて懐かしい者に思えた。

第5話

先

『ヘマをしたな、ターキッシュ。手綱を握るのを忘れていたな』
『……何の反論もできないな、爺さん』
　こめかみに指を当てて、遠くにいる元相棒コルト爺さんと通話する。あの爺もこの世界に来ていたらしく真っ先に俺の通信に答えたのが、彼だった。事情を話して五分とかからずに的確な評価を下してくれるのは有難くないが、融通が利く相手で俺は胸をなでおろした。
『ベッキーがあんな行動に出るとは思わなかったさ。アイツの出身はロクでもないはずだから、もっと現実的だとばかり思っていたよ』
『底辺こそ夢を見るものだ。そこはお前の勉強不足だな。もっともまだ三十も言っていないお前では難しいかね？』
『言ってる場合かよ、コッチは死にかけたんだぞ？』
『そう言うな。昔のお前ソックリで私は面白いと思うぞ』
『……思い出させるなよ』
　向うからカラカラと笑う声が届き、俺は舌打ちした。誰だって思い出しくない記憶の一つや二つあるが、爺さんは俺の黒歴史を１０は知っている。そのうちの一つを思い出されて、言い顔を出来るわけなかった。
『まあ、お前達の助けた連中はこちらで見つけ、回収しよう』
『助かるよ』
　俺は爺さんに礼を言った。俺の言う事、為す事に一定の理解を示してくれる相手は本当に助かる。普通なら無駄な戦闘をしたことを咎める。特にノーズレスのボルドーなら「平和への努力が足らん」と言って、無駄な流血とそれに生じる必要経費について口やかましく責めるだろうからだ。
　だが、俺の事をよく知りすぎているのは考え物だった。加えて、頭の構造も違いすぎるという点も。
『まあ。お似合い同士。楽しむことだターキッシュ、私のようにな』
　活き活きとした齢六十近い男の声は年相応ではない。むしろ、そこ

いらの十代より生気にあふれていると言えた。俺は人知れず奥歯を噛みしめて、コルトに言った。

『……俺とアンタは違う。仕事だからだ』

『素直になれない奴め。唯の仕事ならこんなこと続けはしないさ。楽に考えろ』

俺はその後の言葉を聞くことなく、切った。爺さんはいい相棒だった。ベテラン中のベテランで、冗談も通じる。だが、仕事にまで冗談を持ってくるのだ。しかも、大真面目に冗談を現実にするのだから、始末に負えない。

俺は鼻息荒くして、水筒に補給した水を飲んだ。フィルターと薬品で消毒した水の不味さに不満を抱きつつ、流れおちる水の向うのユラユラと揺れる景色を一瞥した。

予想外の戦闘の後、俺とベッキーは滝つぼの奥に見つけた洞窟で休憩を取ることにした。周りの植生も濃く、滝と言う水のカーテンで隠されたこの場所は先ほどの戦闘の火照りを癒すのにはちょうど良かった。

荒く息を吐き続けるベッキーはリグを取り外し、アーマーこそ脱がなかったが、スーツの前部分を開けて、体に風を取り込んで汗と戦闘のストレスを和らげようとする。滝つぼから得た水を頭の上にかけて、腕や顔を必死にこすって、取れない汚れを落とそうと躍起になっている。

ムリもない、と俺は彼女に同情した。戦いとは常に二つの側面を持つ。負の部分が大半を占めるがそれを受け入れることで変化が生じる。戦闘による高揚、生きるか死ぬかの一種のスリルという物は快楽に通じ、ヒトによっては最高の悦楽たり得るものであるが、それを感じられるようになるほど、ベッキーは経験を積んでいない。

別にベッキーが珍しいわけではない。新米なら誰しも最初の戦闘が終われば、罪深さや罪悪感から拒否反応を示す。アンダーハイブで初等、中等教育を受け、親からの躾がしっかりとされているなら、必ず身に付く道徳という物がこれらを引き起こすのだ。もっと言えば、

心を持つものなら誰しも良心と言う安全装置が付いているもので、これがあるからヒトは安易にヒトを殺せないし、戦闘を、闘争を忌避する。
だが、この職場ではソレを無視しなくてはならない事が多すぎる、誰かの子供を勝手に自分たちの世界に連れてくる、という事を一度頭に思ってしまえばその時点で迷いが生まれる。
まして、それが悪党とは言え誰かを殺すことになれば、比べ物にならないショックが心を襲うのは当然だ。インターネットで死刑囚の記事を呼んで、その残虐性ゆえに義憤に燃え、掲示板やＳＮＳに殺せ、と書き込むことなどとは訳が違う
１００ｇには程遠い一発の銃弾を指先一つ動かして音速で飛ばし、肉を切り裂き骨を砕くことで相手の人生を終わらせるのは、遥かに難しいのだ。たった指の関節一つ動かすのに俺達は鋼の心を持つことが必要となる。そして、その殺し方が最も罪悪感を覚えないと言うのだから、いかにヒトの心という物がコントロールしにくいものか分かるだろう。
ナイフで切り裂き、ワイヤーで絞め殺すなど以下に訓練された者でも嫌悪感を抱くものだ。相手の息の途絶える瞬間を生で感じない銃ですら感じるのだ。本来、殺しは恐ろしいのだ。
「大丈夫か？」
目の前で咳き込む少女に俺は訊いた。まだ現実を知らなかった女の子はソレを知って、顔を青くしていた。前を開けたスーツから見える水をはじく活き活きとした肌の健康そうな輝きと裏腹に。
「……意外と優しいんですね？」
「先輩だからな」
バックパックを下ろし、チョコレートバーの入った袋を取り出して破った。のっぺりと、味気なさそうなこげ茶色で保存料タップリの砂糖菓子。俺はそれ口に含んだ。ヌガーが入った恐ろしく粘つき砂糖たっぷりの菓子を口にして、俺は彼女の姿から自分の昔を思い出していた。
この女が取る行動が、何故か知らないが俺の昔と被った。出来もし

ないことをしようとして、死ぬ寸前までに追い詰められて一々後悔する。理想がデカいだけの頭でっかちと言っていい。とにかく青臭いのだ

「お前と同じ苦労はとっくに経験済みだし。そいつを克服する術ってやつも知っている。今のお前がすべきことは水で見えない汚れを落とすことじゃない。深呼吸だ」

「深呼吸？」

「そう。落ち着かせるんだ。でもって、忘れろ。自分のしたことを」

ベッキーは怪訝そうな顔をした。俺はチョコレートバーを噛み千切るだけで表情は別段と意識しなかったが、彼女の俺を咎めるような視線を見て俺は内心ため息を吐いた。

「忘れるなんて、出来るんですか？」

「出来るようにするんだ。まず悪党を殺す自分を正しいと思え、そしてお前が撃つのはただのヒトモドキだ。でないと精神を自分でぶっ壊すことになる」

ストレスへの最大の対処法は忘れることだ。鉄のような精神を持つとか言う精神論は通用しない。ストレスがその程度で収まるようなら誰だって苦労しないのだ。サラリーマンや労働者のように別に死地にいるわけでもないのに自殺する者だっている、どこに居ようとヒトを死に追いやるのがストレスだ。

だが、大抵は一晩眠れば消えてなくなるのだ。もしくは気の合う連中と酒を飲むなりすれば解決する。だが。笛吹の場合は特殊で、酒や薬に手を出しても記憶から離れないのだ。

笛吹のベテランは多くがコイツに悩ませられている。今のベッキーのように忘れにくいショックを受けて、毎晩寝るたびに思い出して苦しむ。

殺すべきでなかった。もっと大勢を助けられた、そんな咎を背負っているのに、何故自分が幸せを感じたり笑ったりしているのか。疑問を思い浮かべてしまえば、最期永遠にその過去に苦しむ。

過去は最悪の殺し屋、どこへ行っても自分を殺しに追いかけてくる。その手口は陰惨にして確実なり。その殺し屋から逃げる方法が

忘却だ。どんなに消えなくても、消そうとする以外に術はない。奥底に仕舞いこんでしまうのだ。
「覚えるのは最初だけだ。後のは覚えなくなる。そう言う風になることで俺達は前を向いて生きていける。一生後ろ髪を引っ張られるのは御免だろ？」
俺は至極当然の事を言った。職場の先輩としての助言、生きるために必要な事を言ったはずだ。だが、俺の中ではため息を吐く自分がいた。口では言っても本当に正しい、と言い切れない自分を何故か感じ取った気がした。
そして、その納得しない自分を映す鏡のようにベッキーは両足を腕で抱きしめるように座り込み、両手をじっと見つめて頬を水滴で濡らした。
「……何で泣く？」
俺は訳を聞き出そうとした。相手に同情しているのか、それとも自己嫌悪の極致に陥ったのかと俺は訊いた。ベッキーは前者の質問に対しては首を横に振り、後者に対してはたてに振った。
「こんなことになる可能性は考えなかったのか？」
「……考えましたよ。でも違いすぎた」
「馬鹿だな」
率直に浮かんだ言葉を吐いたが、ベッキーは前のように反抗しなかった。雨露に濡れた子犬のように表情を暗くするだけだ。
「悪党を背中から撃て、と言われたことは？　相手が頷くまでぶん殴れ、ってのは？」
「ないですよ！」
「なら、覚えろ。それが重要だ」
そこで思ったのは、この少女の動機に対する疑問だった。一体何を望んで彼女は入って来たのか。
給料目当てならいくらでもいた。試験と研修さえ通れば、学歴、経歴は不問の職業は此処と軍隊くらいで、それでいて他の業種を遥かに超える給料だからだ。何せ大切な人間様の元で働く労働力の提供者だ。それに見合うだけのペイは来るのだ。

だが、彼女はそんなもののために来てはいなかったようだ。
来ているのなら、あの場で村に突撃をかます馬鹿をやらかすわけがない。利己的な者は蛮勇を振りかざさず、ひたすら保身に努める。それこそハゲタカのように死体を漁るようなマネだって平気でするのだ。
「お前は何で此処に入ったんだ？」
その問いにピクリと彼女が反応した。子犬に似ていた気がしたが、そこは無視し、面を上げた彼女の顔を見た。頬は赤く、嗚咽を小さく漏らす彼女は年相応の少女である証のようであった。
笛吹と言う職に就いた者ではなく、女の子の顔を見せたベッキーは涙を手でふき取って、鼻をすすった。そして、彼女の口からその理由が放たれた。
「……憧れがあったんです」
「憧れ？」
小さく頷いて彼女は言葉を紡ぐ。
「誰かの太陽になりたかったって言ったら笑いますか？」
太陽、その単語に俺は目を見開いた。アンダーハイブにはないものを彼女は夢にしたと言うのか。皆自分の事で手いっぱいで、家族を養うだけで奔走する中で誰かを照らす存在になりたいとこの少女は言ったと言うのだろうか。
しかも、笛吹と言う体のいい誘拐犯と揶揄される場に来ておきながら、そのセリフはあまりに想像の斜め上だ。ハッキリ言って有り得ないと言ってもよかった。そんなもの、目指したところでたどり着けないと分かるはずなのに、だ。
「太陽なんていつ知った？」
「五歳の頃。若い笛吹が喧嘩に負けて公園でベンチに座っていた私に教えてくれたんです。最初は怖かったんですけど、優しかった。その人が言ってくれたんです。誰かを照らせるヒトになりたいって」
俺は黙ってベッキーの話に付き合いだした。いつの間にかチョコレートバーを口に運ぶことすらやめていた。
「自分たちは色々言われてるけど、子供を助けて、彼らの暗い心を照ら

して笑顔にして挙げるのが仕事なんだって、誰かの心を照らす太陽になるんだ、と」
　太陽、その存在は大きい。俺達には縁のないものだが、人を無償で照らし、悪人善人の区別なく照らす様はまさしく理想的だろう。だが、太陽は一方で誰かを熱し、殺してしまう存在でもある、と知ることになる。俺にはその未来が見えていた。
　ベッキーは右手で足元の石を触り、次に洞窟の隅に生えていた一輪の花に手を伸ばした。白い花弁の花は美しく、その香りは柑橘系の爽やかな香りがあった。
「私の育ちはロクなとこじゃない。ヤクザ者の祖父に育てられて、女はコールガール、男はチンピラにしかなれない。底辺中の底辺、あの日だって、なけなしの小遣いで買ったクッキー欲しさに殴られた」
　ロクな生まれでない事は予想していた。あの手慣れた体の動かし方に反抗心の強さ、あれらはどうにもならない場所で吠えつづけた者にしか身につかない。恭順も無気力な非暴力も拒否した者の強さだ。
　そのルーツが俺達にあるとは知らなかったが。
「皆妬んで、奪って、荒んだ場所でした。でも、そんな中で与えてくれる人を祖父以外、家族以外で知ることが出来た。太陽の輝きも、花の綺麗さとか、私を魅せるものをたくさん教えてくれた！　だから、私はあの世界になかったモノになりたかった！」
　ベッキーは目じりに涙をためたまま、必死で自分の想いた夢を語った。俺は笑うことなどしなかった。冗談でも笑ってはいけなかった。自分の置かれた環境下で抗って、遂にその夢の尻尾を掴みかけている少女を愚弄するかのようなマネなどできるわけがない。
「あの地下世界には何もない。人間に与えられた太陽の温かさと光も、上から降ってくる雨だってない。当たり前だった平等すら私達にはない、でも、だから私はせめて、誰かの太陽になりたかった。どんな場所でも希望を見出せるって信じたかった！」
　ベッキーの言う通りだった。あそこには雨も太陽もない。当たり前の平等すら与えられない常世の世界。俺達笛吹も含めた全てのヒトの住処では欲するのなら、求めなければ与えられない。

欲しいものの為に対価を払う、当たり前だがそれ故に残酷だ。弱者を救うための福祉すら存在しない。死にたければ、何もしないだけでいい、生きたければ働け、労働こそが自由への道だと言う。

そんな中で与える側に、しかも我が身削って笛吹に来たと言うベッキーはあまりに真っ直ぐな少女だと言えた。それが儚い事を知っている自分を憎らしく思えた。素直に彼女を肯定することが出来れば、どれだけ良かったことか。

「なのに、私は無力で、結局は町のチンピラと同じ！　中途半端な暴力に秀でたくらいで調子に乗って！　足を引っ張って！　汚れきった手で夢を叶える気でいたんて！　こんなので誰かに笑顔だなんて、お笑い草じゃない！」

思いつくのは、現実の前に無力だ、という面白くもない言葉や、いつか思い知らされて終わりだ、と否定するモノばかり。十五の女の子に説教しか思い浮かばないのだ。

実際、太陽と言うには彼女の手は綺麗とは言いづらい。何かの為に殺すのは正義でも、清いわけがない。

きっと俺の知らない内に彼女に嫉妬しているのだろう。そんな簡単に上手くいくのなら苦労はしない、現実を見て妥協しろ、と。俺はそんな心を押し殺し、目の前ですすり泣く少女の肩に手をやった。せめて嘘でも何か言うべきだと考えた。

「ベッキー」

その名を呼んで、少女が俺の顔を幼い泣き顔で見た。俺は彼女に何を言うべきか、迷い口を閉じたり開いたりした。なんて言うべきか、少しの間思考を働かせて、その言葉を声に変えた。

「俺達笛吹は綺麗じゃない。そいつを分かったと思う。だが、言ったろう、悪党を殺すことは正しいと。誰かの笑顔の対価がそれで何が悪い？　多くのヒトの笑顔を望むなら、仕方ないし、ソイツは悪い事じゃないはずだ」

「でも、そんなの！」

「お前は今日、あの場にいたヒト達を助けた。彼らだって生きてりゃ笑顔になれるさ。死んだらそこで終わりだからな。だから殺そうと

したアイツらは悪だ。わかるな？」
身勝手と言われても仕方ないだろう。だが、これが俺の思う正しさだし、笛吹の在り方だ。押しつけと言えば、そうだろうが、目の前の少女がこのまま過去とやらに追い回されるのは不憫だ。
だから、せめて自分のしたことが完全な間違いではないという事は知ってほしい。俺の今できる助言だ。現実を知りすぎた哀れな笛吹のせめてもの慰みの言葉を彼女に投げかけた。
「仲間には連絡しておいたから、何人かは救われたはずだ。お前は今日、誰かの笑顔を守ったんだよ」
肩に置いた手をベッキーが握った。誰かの温かみに触れたかったのか、それとも孤独に耐えることが辛かったのか、彼女は俺の手を握りしめた。訓練時に見せた獰猛さもないか弱さだった。
濡れた短い黒い髪の毛が色香を与え、アーモンド形の瞳が少し前まで反骨心で細くなっていたのも、今ではしおらしく見える。狂犬じみた輝きは失せて愛らしさすらあった。
「お前の理想は間違ってない。今は泣いて悩め、笛吹にその可愛らしさは似合わない」
暴力と優しさは正反対のものだ。同居させるには馬が合わないにもほどがある。だが、俺達にはきっとそれが求められるべきなのだろう。一方で殺し、一方で救う。なんとも勝手な人種だろうか。偽善と言われてウン、と頷く以外許されない。
だが、完全な善よりかはいい。何故なら実行できるし、誰かを救うことが出来るのだから。だから、それをベッキーは知るべきだ。
俺は彼女を咎めることが出来なかった。あの言葉を聞いた以上、非情に徹するのが難しくなってしまった。我ながら大甘だと思うが。
ベッキーは立ち上がって俺の胸に飛び込んだ。俺は彼女を抱くことはしなかったが、彼女はそうした。
「少しだけ……少しだけ胸を貸してください。そうすれば、耐えられるから……」
「俺はお前の言う殺し屋だぞ？」
「でも、貴方だって」

彼女は俺の顔を見上げて言った。
「助けに来てくれた」
そう言って泣く少女が俺をほんの少し認めていたことを口にした。ふと、滝つぼから聞こえる水音に耳を澄ませた。ベッキーは俺に眩しすぎた。真正面から直視するには。

犬

朝陽が指しこみ、木の葉の隙間から優しい光が漏れて大地を照らす。水のせせらぎに、小鳥の鳴き声、かぐわかしき緑の香りと大自然の中を最先端の防弾装備と徹底的に殺しの為に研究された銃器を握って私とターキッシュは進む。
ブーニーハットを被ったターキッシュが私の顔を見て、ニヤリと笑って風邪かと聞いてきた。彼の視線に映る私の顔は赤く、パッと見すれば確かにそのように見えるだろう。
洞窟を出た後で私は昨日の事を思い出して、自分を殺したくなった。冷静になってみれば、まだ十五の私が二十代の男に抱き付くなど、正気を疑うものだ。いくらショックと無力感と勢いでやったとはいえ、自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れる。
「あの、昨日の事は……」
「ああ、いい思い出にしとくから安心しな」
ニヒルな笑顔を浮かべるターキッシュに私は苦虫を一ガロンはかみつぶした顔を見せたことだろう。この先輩を昨晩で一時期はいいヒトと勘違いしそうになったが、そうではないことを思いだした。
「マーマルはホント、感情豊かだよな。勢いで大胆すぎることしちまうんだから」
「ああ。なんで抱き付いちゃったかな」
昨日の行動をフラッシュバックさせて私は頭を抱えた。まさに人生の黒歴史にまた一ページ、訓練で無様な様を晒したのも数えれば二

つ目だ。あの時は気遣ってくれる彼が嬉しかったし、温かさが救いになったが、今ではそれが私を殺しに来ている。
　恥ずかしさとこれから弄られる悔しさに握り拳を作る。
「道端で百面相するんじゃない。嬉しいのか、悔しいのかどっちかにしろ」
「悔しい」
「……リップサービスはなしか」
　ターキッシュはカラカラ笑って私の顔をもう一度見た。私はその視線が今までのとは違う気がして何か、と思った。すると彼は何を思ったのか、意外な事を口にした。
「ま、良かったさ。そんな顔できるくらいには回復したんだろ？」
「いや、まあ」
　曖昧な返事をしてしまった。まさか、彼の口から私の心配をするようなことが訊けるとは思わなかった。だが言われてみれば、確かに昨日よりかはずっと心が楽になった。この憎き男の胸の内に泣いたのが、そんなに効果を発揮したと言うのは何とも素直に喜べない。せめて、彼がもっと白馬の王子様の如く、スマートな八頭身で、ニヒルではなく爽やかで、耳をとろけさせるような甘い声で優しかったら良かったが、そんな事は無かった。
「泣くって意外とストレスには有効だしな。それにお前も少しは固い頭を柔らかくできたろう？」
「私は……」
「ヒト殺しだって、痛いのは最初だけさ。何事も初めての痛みが怖いが、その後はどうってことは無い。世の理だ」
　嫌な言葉選びだ。女相手に初めての痛みなどと言うとはセクハラもいい所だ。だけど、確かにその言葉は正しかった。私の昨日の痛みも大分引いたようで、今では軽口は多少叩けるようになっている。
　それでも、心のどこかに引っかかりがあるような気もするのだが、とにかく昨日よりはマシになった。彼の言う通り、初体験、山を超えたという訳だ。
「今思えば、殺しをそんな簡単に言うなんて先輩が初めてですよ」

「昨日言ったろ　忘れるようになることだって。俺は割り切っているだけだ」
　呆れた口調で陰に彼を誹ったが、ターキッシュは余裕そうに答えた。だが、私はそれだけで、彼の言葉に頷けなかった。卓越した殺しの技術は素人の私にだってわかる。
　スリングまで利用し、迷いなく銃口を敵の急所に命中させる。とにかく早く殺す、そうプログラミングされたマシーンだ。そんな姿を見せておいて、割り切っているだけ、と言われて納得できるだろうか。
　むしろ私は彼は割り切っていない方ではない気がした。割り切ると言うのは合理的な行動、発想だ。割り切っているなら、もっと必要最低限の技術でいいはずなのだ。
　だが、あれは十分に訓練された者ですらたどり着くのが難しい達人の域だ。ただ長く経験して来ただけでは絶対に身に付くことは無い。そこに強い意志が無ければ、ああはならない。
　ちょうど、私があの最底辺から此処まで登ってこれたのと同じだ。割り切るのなら、もっと賢く楽に行く。例えば、笛吹にならずに適当な商社にでも入った方が余程楽で安定していると言った風に。
　彼は助けに来た。私と言う無謀、無鉄砲なお荷物な小娘とあの場で凍えていたかのように震えていた村人の為に。そして、私のガッツを認めるような発言、実は彼も何らかの想いを抱えているのでは、とふと思った。
「先輩は……本当に割り切っているんですか？」
「俺はそう思っているさ。少なくとも殺しに悩むようにはなっていない」
「そうじゃなくて、本当は私と同じなんじゃないかって」
　そこまで言うと、ターキッシュは一旦足を止めて私の方へと振り返った。視線は鋭く、私の目を射殺すかのようなギラリとした輝きがあったが、すぐに消えてため息を吐いて言った。
「俺は太陽になんかなれない。他人を照らせねえよ、ベッキー」
「でも私を励ましてくれて……」
「勘違いするな。俺とお前は仕事上のパートナーだ。お前の迷いは俺

の死にもつながるだけだ」
突然、彼が不機嫌になった。私と同じ、そう言っただけでターキッシュは急に態度を変えただしたのだ。触れてはいけない部分に触れてしまったのか、彼は狼のように私を睨み威嚇していた。
「俺は仕事に忠実なだけだ」
決して笑わないで言った言葉は私にだけに述べられたように思えない。まるで、自分にも言い聞かせているようにも見えた。けど、私はそれを指摘することはしなかった。
委縮したのもあるが、これ以上は彼の深層にまで手を突っ込むような気がして、行動に移せなかった。アンタッチャブル、触れれば棘に刺さるどころですまないだろう。
「嘘だ」
小さくつぶやいて、私は彼の主張を否定したが、先輩はもう前を向いて私の方を見てなかった。聞こえていたかもしれないが、彼は無反応だった。ただ、つまらなそうに石ころを蹴り上げて前へ前へとせっせと足を運ぶばかり。
「大人の誤魔化し」だと直感した。多くを語らないようにして、威厳やその時々の権威を振りかざし相手を間違っていると言うパワープレイ。先輩と言う立場を利用し、自分の持もつ雰囲気を盾に彼は私の言葉を封じたのだ。
自己防衛だと思い、私は別段怒りは感じなかった。むしろ悲しく思えた。誰とて自己防衛はするだろう。踏み入れられたくない部分に入ればたちどころに牙を剥くのは当然の反応だ。それが出来なければ、幾人もの侵入を許して自分という物がなくなってしまう。
だけど、昨日優しさを見せ、非情に徹しているようで徹せられないかのような彼の行動を見てしまうと、彼の反応が急に痛ましくも思えた。何をそんなに彼を素直にさせないのか、と。
昨日彼は私を素直にさせてくれた。足を引っ張って、痛みと後悔に堪えかねた私の背中を支えてくれた彼には貸しがあると言える。歌詞を作ったままで嫌だし、それは私の流儀に反するものだ。
巻ければとりあえず従う、貸し借りは作らない。あのごみ溜めとも

言えなくもない場所で育った私が得た教訓だ。ある意味では家訓とも言えなくもない。
手に握りしめた銃器を見て思う。初めてコレを握ったその日、ＡＫタイプと言われる野暮ったいデザインの鉄と樹脂で構成されたアサルトライフルを握る私は万能感に溢れていた。しかし、昨日と言う山を越えて自分が何ら特別でもなければ、銃を持つだけで強くなれる訳ではない、と思い知らされた。
腕も未熟であるのは無鉄砲な若さだけ。ターキッシュに借りを返すことが出来、なおかつ彼を素直にさせることは出来るだろうか。私は彼の本当を知りたい。もしかしたら彼は私の想っていた理想に近い存在なのではないのか、と疑問が浮かぶ。
ソレを確かめたい。無論だが、恋ではない。好奇心と恋慕は違う。立った一晩優しくされただけで惚れるような安い女ではない。
私は決心して彼に訊こうとした。何故頑固にひねくれ者ぶっているのか、と。しかし、彼は足を止めて、突然姿勢を低くして辺りを見回しだした。
何かを警戒しているとすぐに察知して私も彼と同じ行動をとる。それだけでなく、昨日は出来なかったマーマルとしての機能を使うことにして耳を澄ませ、鼻を利かせると、驚くほど多くの事を知覚できた。
『感じるか？』
ナノマシンによる年話で声が聞こえ、私も同じように返信した。
『火薬とグリース、それに汗の匂いが。足音も多い気がします』
『まるでレーダーだな。他には？　何人いる？』
探りはしたが、私は残念ながら機械ではなく、勘を働かせるにはいかんせん若すぎた。ただ、一つ分かったのはヒトの足音に混じって妙な金属音も混ざっていると判断することが出来た。
「人数はわかんないですけど、変な金属音が……」
『馬鹿野郎！』
私は声に出して話してしまった。いつもの癖と言えばそうだが、それは致命的なミスだった。相手の装備が分からぬうちに迂闊に声を

出してしまったのだ。大きな発射音が幾重も重なり、何かが空を切って堕ちてくるのを近くした時、私とターキッシュは次の瞬間には爆風と言う見えないハンマーに身を吹き飛ばされた。

第6話

先

斜面を転がり、太い木の幹に腰を打ちつけて、ようやく止まる。頭上から土埃と榴弾の欠片が降って来て、ブーニーハットのつばを叩く。

口の中には血の味が広がり、口腔から鼻へと匂いが通って、ツンと刺激が走る。スーツのおかげで擦り傷すらない、体に与えられた衝撃もいくらかは抑えられて意識がもうろうとすることも無く、アンダーハイブの技術と己の経験によって、素早い戦闘態勢へと移行できて幸運と言えた。

ベッキーの声で位置がばれるとは予想外だ。まさかとは思っていたが、探知されたのだ。恐らくだが、あの村で見つけたプレジデントによるものだろう。集音マイクを備えていたとなると、ヒト狩専用の物となる。サーモに簡易のモーションセンサーを備えているとすると相当に厄介な代物だろう。

連中がそんな高度な装備を扱いきれるかは疑問だが、持っていると見た方がいい。現実はいつだって俺達をいじめるのだから。

『ベッキー!』

ナノマシンによる念話で名前を呼んだが、反応は無し。一瞬やられたのかと思ったが、辺りを見回すと、すぐ近くで耳と頭を抑えている彼女がいた。

『おい、大丈夫か?!』

彼女の元へと駆けよって話しかけるが、彼女は俺の顔を見て不思議そうに見るだけ。額から流れ出る赤黒い血が彼女の白い肌を染めているのが痛ましいが彼女は痛覚を感じ取ってないのか、心ここに非ず、自分の状況がわからないと言った風だ。

『聞こえないのか?!』

もう一度試しに訊くと彼女は応答した。ただし、念話ではなく右手の人差指でこめかみを指して指でバツを作って見せた。ジェスチャーで返した後で、彼女もこめかみに当てて通話をしようとする・。

『よ……聞こえ……』
『ナノマシンの異常?!　こんな時に!』
彼女の頭に手をやって、見てみると後頭部が血で濡れていた。派手に出血しているかと思ったが、そうでもない。だが、彼女のナノマシンの不調から、頭部への強いショックで何らかの異常が起きた可能性が高かった。
榴弾で吹き飛ばされた勢いをモロに後頭部に伝えたのかもしれない、普通なら頭蓋骨が割れる所を彼女のマーマル、つまり種としての強さが防いだと言う所だろう。だが頭部への損傷と言うのは本人ですら分からない程重大な時もある。
あのナノマシンは血液に乗って体全身に送られるのとは違い、言ってみれば脳に新たな機能を植え付ける、寄生中に似たものだ。一度肌に浸透し、頭蓋骨の内側、脳の外側に新たな器官を作る。本来なら、ちょっとやそっとじゃ怒らない故障。それが強すぎるショックで起こってしまった。
最悪のタイミングで、問題が起こるとはつくづく神様に好かれていない。もとより祝福される身でもないが。
後方でバタバタと走ってくるのを感知して俺はマークスマンライフルを構え、二連射。リュグマン式の反動の少なさによって作られる正確さを証明するように後ろから迫る民兵の頭蓋を貫通し、無力化する。７．７ｍｍ×５６ｍｍ弾の確かなストッピングパワーと俺自身の経験からくる業が合わさった結果だった。
ペアになっていたもう一人が驚愕で足を止めたのを良いことに八倍スコープを覗いて、引き金を絞り、マズルから噴き出る輝きと共に足を止めた自分の鈍くささのツケを払わせた。地獄でその身を焼かれながら悔いるといい。
距離にして１５０ｍ程、かなりの近距離にまで接近されていることを確認してベッキーを引きずろうとしたが、彼女はどうにか自分で立ち上がって、ＡＫタイプのライフルをフルオートで三発ずつ、２セットの射撃を行い、一人倒した。その顔色は青かったが、彼女はこの前とは違い、自ら反撃した。

「……指示を！」
「ずらかるぞ！」
　あちらこちらから聞こえる民兵の怒号に奇声、口にするのもおぞましい言葉の応酬、そして大量の足音。彼らはプレジデントの火力と索敵の長所を捨てた戦法で来た。包囲殲滅、少数の敵を撃破するのには一番単純で確実だが、こうも敵味方を接近させればプレジデントの火力で誤射しかねず、また自慢の索敵も味方だけ避けるようにできていない。
　連中の練度不足のおかげで声を出して指示を出すことが出来る。俺はそのことに感謝し、出来ることなら、今から落雷などの天罰でも起こって、連中を一掃してくれれば、と空よりはるか上に存在するだろう神や悪魔に内心祈った。
　ソレをさせないためか、民兵たちはフルオートで大口径のアサルトライフルや水道管に似たサブマシンガンを連射し、俺達を押さえつけようとする。
「ベッキー、斜面から降りてくる連中に制圧射撃！　当てなくていい！　撃て！」
　バナナ型のマガジンをグリップ代わりに持って、彼女は連射する。三発ずつ、マガジンが空になるまで撃ちつつ後退し、その弾幕を抜けた数名を俺が狙い撃った。
　中腰で後ろに下がりながらストックに頬づけしての簡易な狙撃。ライフル弾が下りて来た五名の内三名を新たに墓穴へと誘ったが一人が耐えた。驚くことに服の下にジャケットを着こんでおり、ジェケットに弾かれた弾丸が四人目の腹部を抉った。
「異人が！」
　仕留められなかった一人がナタを振りかざして俺に振るってくる。血と大気で錆びだらけの刃が到達する前に左フックで頭部を殴り、転倒させ彼の持っていた得物を奪い取り腹部深くに差し込んで、ジャケットを血の泡で染める。刃を押し込んで体内に空気を含ませて、
　内臓を深く切り付ける。
「先輩早く！」

ベッキーは空になったマガジンを引っこ抜いて交換する。俺はベッキーが援護する中で走って後退する。だが、そこへ落下音がいくつも山中に響き、その正体を察知した時には俺達は爆風に巻き込まれて、肺の中に熱い空気を吸い込むことになった。

迫撃砲とプレジデントの榴弾が降り注いできたのだ。轟音と空気の振動、体に伝わる苦痛に苦しみつつも、横目で着弾点を見てみるとデタラメもいい所だった。付近の民兵も巻き込んでの砲撃は大地に生える草木と大勢の味方の命を刈り取っていく。

ベッキーと俺は伏せながらも下がり。敵がいそうな場所に銃弾を撃ちこんでいく。発射によって跳ね上がる銃口と極度の緊張で跳ね上がる心臓を押さえつけ、生き残るために全身の筋肉を使い再び立ち上がって走り抜ける。

脚をもがれて喚く誰かを見たが、次に瞬間には消えていた。ライフルグレネードすら飛んできて面と言う面で制圧されていく中、俺とベッキーは頭の中で鐘が鳴り響くのに耐えて、斜面を下っていく。

「走れ、走れ！　女々しい泣き言は生きてからにしろよ！」

「クソ！　畜生！」

悪態を吐き、マガジンを落として交換、ボルトキャッチを叩いて薬室に装填する。ベッキーが下る中で三発連射した所で、近くを榴弾が吹き飛ばし榴弾片が排莢口に入り込んで、衝撃でライフルが手から離れて転がってしまった。

横目で見て最早使い物にならないのは明らかだった。レシーバーにも破片が突き刺さっており、機関部を完全に破壊しているに違いなかった。スコープもレンズが割れて、ガラス片が散らばっており、愛銃は無残な躯をさらけ出した。

「ライフルが……！」

戦いで最も怖い意志無き偶然が俺の身に起こった。流れ弾や破片ほど恐ろしいものはない。いつ来るか分からない死神の鎌を予見することなど、どんなベテランでも不可能だ。

その鎌が俺のライフルを襲って天へと召してしまった。

気配を感じて背後へ振り向きもせず、ハンドガンを引き抜き5連射

し、今度はサイトを覗いて正確に3発、接近して来たゴロツキ共の胸を穿つ。
そのままハンドガンを握りしめたまま、ベッキーと共に全力で斜面を下りていく。ベッキーは時々振り向いてはバースト射撃を繰り返し、敵兵の接近を許さないように動く。
「ベッキー！　手榴弾！」
大声で命令し彼女は歯で安全ピンを抜いて投げたが、焦って投げたために飛距離が微妙に足らなかった。ハンドガンでエイム、そして引き金を絞り銃口から飛び出た９ｍｍ弾が手榴弾を弾き、距離を稼ぐことに成功。三名の敵兵を宙に浮かせてやった。
破片が舞い散ってぼろ雑巾になった相手をベッキーは生唾を飲み込んで。見た。やはり、踏ん切りはついても慣れていないのだろう。ＡＫタイプのライフルのトップカバーが小刻みに震えてカチカチと揺れていた。
だが、彼女にはもう少し頑張ってもらわなくてはならない。俺のライフルは既になく、中距離を撃つことが出来るのは彼女だけだ。彼女のライフルを借りると言う手もあったが、ライフルは自分そのもの、後輩の戦力を奪うようなマネは出来るわけがない。
「ライフル無くして自分は役立たず、ライフルも自分無くして役立たず」、と言ったものだが俺はライフルなしでも戦える。
「丸太が落ちてくる！」
ベッキーの悲鳴のような叫びを聞き、斜面を見上げると無理やり切られた太い木々が数本転がって来た。周りの木々にぶつかり、鈍い衝突音を発して猛然と下って来るそれらは質量を武器にした殺戮兵器と化していた。
戦車の装甲すらへこますことが出来るアレに巻き込まれれば、どうなるかなど想像するまでもない。俺達は走って走って、逃げる。太い幹にぶつかっても勢いを衰えない丸太に追い回され、さらにその頭上を重機関銃の大口径弾とサブマシンガンのピストル弾が行き来して、髪の毛を短くされる。
何本目かの大きな木の幹に丸太がぶつかって派手な爆音を響かせ、

ようやく止まったが危険は怒涛の勢いで振ってくる。重さ２０ｇの弾丸の雨が俺達を狩りに来ているのだ。
息を荒げて、体全体で呼吸をして酸素を口から肺へと次々に送っても肺はもっと、もっと、と酸素を求めて止まない。喉が痛みを覚えるのも無視して過呼吸気味になっても俺とベッキーは逃げていくために足と口を動かすのをやめない。
「もう少しで麓です！　このまま一気に！」
俺達の前に鬱蒼とした木々の切れ目から見える光が差し込んで来た。ベッキーが歓喜の声を上げて、喜びを露わにした。助かる、自分は生き残ったと確かに彼女の声が語っていた。俺もハンドガンのマグを交換して、その先を見た。
そこはまるで天国の入り口のように思えた。暗く思えた木々の闇を抜けて日光で照らされたそこは普段太陽などお目にかかれない俺達アンダーハイブの住人には十分すぎるほど神々しく、榴弾と銃弾の届かない聖域に見えたのだ。
しかし俺はその先にある物を見据えて、表情を一変させた。日の当たる場所の先に赤いカメラアイを光らせて、丸々とした鋼鉄の装甲に包まれた2本足の兵器プレジデントが。２体待ち構えているのに気が付いたのだ。
鉄とガンオイルを日光で光らせて、口径６０ｍｍのリボルバー式のグレネードランチャーが
前を走っていたベッキーを捉えていた。
彼女はそれに気づいて足を止め引き返そうと足を動かした。ＡＫライフルをフルオートで放ち、少しでも抵抗をして見せようとするが、プレジデントの装甲の前に貫通力重視とは言え、４．８５ｍｍ弾では傷一つ付かない。全てが弾かれ、細かいひっかき傷を作るだけに終わってしまい、ベッキーが声にならない悲鳴を上げたのを見て、俺は彼女に叫んだ。
「飛べ！　ベッキー！」
俺とベッキーは反射的にジャンプし、プレジデントの視界の外へと飛び出た。

言葉を言った後には榴弾の雨が降り注ぎだし、俺の意識を刈り取った。体が無重力になってフワリと浮く中暗くなる視界の中、自分が死んだのか、死んでないのか、それすらわからなかった自分が急に忌々しく思えた。

死ぬときはぐらいは理解してくれ、と。そして、彼女の生死を確認したかった。

せめてもの無事を望み、背中に衝撃が伝わって俺の視界は真っ暗になった。

犬

暗い意識の中、私は誰かの声を聞いた。妙に反響しており幾人もの声が重ねって聞こえてしまっている。鼻に香るのは火薬とグリース、蒸発した汗にかび臭い空気の独特な匂いと混ざり合って、最悪の一言だった。

意識が徐々にクリアになっていき、手や足、肌の感触が戻ってきて自分が今横たわっていることに気付いた。ひんやりとした湿ったコンクリートの床の上で私は突っ伏していて、装備を背負っていたはずの体が妙に軽く、反面手が後ろで錠をされていて動きが取れず、非常に鈍い。

ジャケットやチェストリグなどの装備が無いまま、私は目を開いて起き上がった。暗い洞窟と思ったが、見てみると半分正解で半分間違いだった。洞窟を所々鉄筋コンクリートで補強している地下施設のようで、その様は我らが故郷アンダーハイブによく似ていた。

鉄格子に囲われた私が目を凝らすと、他にも鉄格子の籠がいくつもあって、その中に子供がいるのが見えた。彼らは私の事を不思議そうに見つめて来た。奇異な目、好奇心の対象とされて私は何がそんなに珍しいのか分からなかったが、自分の姿を見て、理解した。

伸縮性の高いスーツの上にTシャツ1枚、だけだった。ボディラインがハッキリと浮かび上がるスーツの上にこれ1枚で向うからすれ

ば、とても不思議な格好でいるに見えて当然だった。
しかし、その子供たちの目も最初は好奇心旺盛に見えたが、次第に熱が冷めたのか。光を失って虚無的になった。まるで人形のように、生気がなく無機質になってしまったのだ。
何故か、と思っていると重い扉が開く音が響いて、子供たちが一斉にビクリと肩を震わせて鉄格子の奥へとさっと隠れた。音のする方向へと意識を向けると、鉄と硝煙の、それに生臭いような、きつい匂いを纏った男たちが現れた。
その中にタイガーストライプと呼ばれる迷彩のパンツを履き、上半身をジャケットで覆った赤いベレーの男、将軍と呼ばれる悪党の主がいた。
彼らが何かを話している。あの先輩の通信が聞こえなくなった以降、頭に入り込んだナノマシンが不調なのか、連中が何を言っているのか理解できなかった。ただ分かったのが、将軍と呼ばれる男が部下の話を聞いて、静かに頷いているだけで彼らに待機するように命令したらしいことだ。
将軍はいかつく、傷だらけの顔を私に向けてしばらく見つめて来た。黒い目は想像以上に暗く、その瞳の奥には何もなかった。煌めきもヒトとしての感情も何もなかったように思えた。
口を開いて何かを私に話しだした、しかし、何もわからない。ナノマシンの翻訳機能に頼っていた私に現地の言葉は理解が出来ないのも無理はなかった、
将軍は少し考えて理解したのか、咳払いをして口の動かし方を変えた。
「これでわかるか?」
その言葉はアンダーハイブの共通語だった。民兵組織の長は私達の言葉を知っていたのだ。
ソレを知って私は先ほどから気になっていた事を彼に訊いた。
「ここは?……ターキッシュは?!」
「飼い主に忠実とは、流石は雌犬だ。場所は言えないな。あと悪魔なら今探しているところだ」

飼い主、悪魔、その二つの単語は私の頭に血を登らせるには十分な言葉だった。私をターキッシュの飼い犬のように嘲笑し、まるで自分が悪魔ではない、とほざいて回る口に青筋を立てた。

だが、一方で生きているのか、死んでいるのかすら分からないという情報に心が揺れた。まだ彼は生きていると希望的な見方もできたが、痕跡すら残らない程散らばったのでは、と思うと拳を握りしめて、その光景を想像しないようにするしかない。

だけど、今は頭を必死に働かせるのに集中した。この状況を少しでも多く理解し、自分がどうなるのかを見極めねばならない。

「……私をどうしようっての？」

試しに訊いてみると、将軍は鼻を鳴らし、私に話しだす。

「お前をどうするか。俺は色々と考えさせてもらった。形も異人にしては中々で売りや楽しみに当てるか、即刻首を切って晒すか、ガソリンで焼くと言うのもあった」

ここまで私の処遇について話されたのも中々ないだろう。自分が女と言うことに後悔を感じ、果てしなく暗い未来ばかりが用意されているのに私は生唾を飲み込んで、身をよじった。男からの視線に恐怖を抱いたからだ。

「だが、俺はそんなことはしない。そんな事をしても大した旨みにもならん。汚らしい異人のお前を楽しみの道具にするほど俺達も道具に困っちゃいない」

後ろの民兵たちが薄気味悪い笑みを浮かべて私を見る。敵意と欲にまみれた目。明確な敵意を私に向ける彼らに私も欲以外で同じように向ける。女を道具と言う男の汚らしい欲望と尊大さに嫌悪を抱いた。

「お前は俺達の興業に出てもらう。精々稼いでもらう。その命でな」

「興業だって？」

「今見せてやる」

将軍がクイと顎をしゃくると、私の前に一台のＴＶが置かれた。この世界に来て初めてみたが、そのＴＶはアンダーハイブでは一般的な薄型の３２型だった。あのプレジデントと言い、なぜ民兵組織が都市

にもなかった物を持っているのか、不思議でならなかったが、そのTVに映るモノを見た時、私の疑念は吹き飛んだ。
疑問が解消したわけではない。あまりに異様な光景に圧倒されたのだ。
「何これ……？」
サッカー場のように、観客たちが大勢大声を張り上げ、手に紙の束を握りしめて何かを見ている。中央には小さなテーブルが置いてあり、そこに三人のヒトがいた。二人は赤いバンダナをつけて座り込んでおり、その顔は普通ではない。
二人は子供で汗を滝のように流し股下までびっしょりと濡らし、顔の筋肉全体が恐怖で揺れているようだった。その顔は私が撃った男が見せたものにそっくりだった。死への恐怖に怯え、自分の首もとに死神の鎌を見てしまった者の顔だ。
その二人の男の子が震える中、大人の男が会場全員に見えるように高々と何かを掲げ、手でソレを弄って、テーブルの上に勢いよく置いた。カメラの視点が変わり、それが何なのかを見せた。
旧式のリボルバー。見た目からして6発の銃弾を込めるタイプで、口径は大きく、マグナム弾を発射するものだろうか。ミナミが持っていたマグナムオートと変わらない程の大きさだった。
そのリボルバーが姿を現した時、会場の連中はこぞって歓声を上げた。その声は大きく、鉄の扉の向うから聞こえているのがわかる。彼らが何をしているのか、私はそれを処刑か何かかと思った。しかし、それは間違いで一人の男の子がそのリボルバーを手にしだした事でようやく理解した。
男の子は涙を流し、ガタガタと震える手でリボルバーをゆっくりと自分のこめかみに当てた。ハンマーを起こしシリンダーが回転する。後は引き金を引くだけの状態になり、私は息が荒くなった。
引くな、と心で念じた。当事者でもないのに私の手は彼らと同じように震え、体の芯から冷え込むような悪寒が流れる。躊躇いを見せて、大げで喚く男の子に対して、観客たちは容赦がなく、一斉に何かを叫んでコールする。

その内容は雰囲気で判断がつく。そして男の子が叫んで人差指に力を込めた。
「駄目！」
ハンマーが撃針を叩いた。だが、銃口から弾丸が飛び出すことは無く男の子は血の一滴も零さずに息を肺から大きく吐き出した。リボルバーをテーブルに放り投げ、とりあえずの安全を得た子は自分の体を強く抱きしめ、もう片方が次は自分の番という事に絶望し頭を抱える。
会場は二つの空気に包まれたようだった。一つは喜び、片方が生きていたことによってその手に握っている金券が紙くずにならなかったと言う黒い喜び。そして次の子供の頭が吹き飛べば、という期待だ。
もう一つは落胆、自身の金券がフイになる可能性に顔をしかめ、ついで大金を受け取るチャンスがお預けになってしまったという事への落胆だ。野次を飛ばし、恐らくは死ねと叫んでいる彼らの頭の中には子供のことなど、知ったことではない。
喜びと落胆、二つの相反する感情の二重奏だった。不協和音ではない。何故なら、二つの感情は結果的にどちらかが死んでくれなくては困る、といった共通点があり、誰かの命を駆けの対象にしたどす黒いギャンブルに酔いしれているに違いないからだ。
ロシアンルーレット、彼らの興業は純粋で、スリリングでバイオレンスな賭け事の提供だったのだ。
「最近は純粋な賭け事がない。カジノのマシンも裏で操作され、カードもディーラーの手のひらの中。純粋に運を賭けたギャンブルってのは無い。だからお前らにそれをさせるという事だ」
聞いてもない説明を将軍は話しだした。私はあらん限りの怒りを込めて飛びかかろうとした。しかし鉄格子に阻まれて、がらんどうとした大きな音が響くだけで終わってしまう。
「ふざけるな！何が純粋な賭けよ?!　ただの殺しじゃない！　地獄を彼らに味わせて、楽しむ最低野郎！」
「何とでもほざけ。一番金を手っ取り早く儲けたきゃ、地獄を作るの

が一番だ」
　将軍はニヤリと笑った。私の怒りなどものともしていない。彼には銃も部下もいる。私のような小娘など歯牙にもかけない。
「地獄ってのは必要だ。地獄は金を作り出す釜だ。女に薬、銃、ダイヤモンドとなんでも扱える。何をしてもお咎めが無い。お前らだってそうだろう？　笛吹」
「私を言い訳にするな！」
　笛吹が子供を救うには地獄がいる。それは変えようのない事実だ。元々が子攫い、それを少しでもマシにした結果だが、本当の事を言えば地獄が無い方がいいに決まっているだろう。
　だが地獄を作っている張本人がソレを言い訳にしていい訳がない。何より、私の夢見た場をこのヒトモドキにとやかく言われるなど、もってのほかだ。出来ることなら、素首に歯を突き立てて喉をかみ切ってやりたい。
　地獄は金のなる木。成程血を吸い続けた方が確かに儲かるだろう。過去、人間の歴史では大国という存在が小国を弄んできたのは私だって知っている。私達のアンダーハイブもそうだ。所詮、私達の犠牲の上で成り立っている人間は今も昔も変わらないし、将軍のいう事も間違っていない。
　でも、それを許せるわけがない。たかが金なんかの為に命と尊厳を弄ぶ邪悪な連中をどんな理由があって許せるだろうか。上から立って、嗤うお前達を赦しなんかしない。
「吠えるな雌犬。コイツを望んだのはお前ら笛吹の神様ニンゲン様だ。その見返りに俺は儲けている。正直な話な。こんな実りのない世界なんぞ、支配したところで何もない。お前らのしていることはそもそもが場違いなんだよ。大人しく子供のおこぼれを頂いてりゃいいものを」
　将軍は邪悪な笑みを浮かべて高らかに笑った。奴らは人間と結託していた。笛吹、人間、将軍たちと三者三様で旨みが取れる仕組みを彼らは作ろうとしていたのだ。私はその掌で踊っていたと言うのか。ふざけるな。私の夢を汚し、子供を大勢を地獄に落としたお前たちが

何故笑っているのか
お前達こそ地獄へと堕ち、永遠の時の中で地獄で焼かれるべきだ。
「違う！　私達はそんなの認めない！　地獄なんかでお金なんて得たくない！」
笛吹は命を作る場所だ。そう夢見て来た。地獄からの解放と人生を誰かに与える。そう言う職場で合って、地獄で小賢しく儲けなどしない。他人から何を言われようとも誇りを見せたあの笛吹の正義を否定させはしない
「それが世界の法則だ。惨めだな笛吹の女。あの悪魔と同じだ」
「お前らが悪魔だろうが！」
鉄格子に体をぶつける。肩に鈍い痛みが走るが、鉄格子はびくともしない。そんな私を嘲笑する彼らを睨み、私は叫ぶ。
「叫ぶな。ほれ見ろ。お前たちの無力なざまを」
そう言って民兵の一人が鉄格子ごしに私の髪の毛を掴み、ＴＶの画面を見せた。既に何回も死地を乗り越え、自分が死ぬのが今か今かと思い、目の焦点がはっきりしない二人目の男の子が映った。
「やめろ！　やめて！」
「しっかり見ろ！　そろそろだぞ！」
将軍が目を背けさせまいと私の瞼を閉じさせないように指で瞼を抑える。私は目を背けられなかった。心臓が跳ね上がり、唾をまき散らして叫んで、彼を止めるよう叫ぶ。
「撃っちゃダメ！」
「黙って見ろ、小娘！」
彼がリボルバーを手にしてこめかみに当てた。民兵たちの笑い声、確かな期待をはらんだ目でＴＶ画面を見る彼らとＴＶに映る悪党の群れたちの静粛、そして動けない私が見守る中、一発の銃声が轟いた
糸の切れたマリオネットの如く、頭から鮮血と脳漿をぶちまけて男の子は椅子から転げ落ちた。赤く塗装された地面の上に倒れた彼の体は痙攣し、まだ生きて痛かったと言わんばかりに手を広げてがくがくと動き回った。湧き起こる歓声の渦。踊り、叫び、怒鳴り、誰もが狂ったかのように本能のまま動く。

私はその中で唯一泣き叫んだ。死んだ少年と交流があったわけではない。でも、彼を絶望の中から救うどころか、何もできなかった。こんな所で死ななければ、人生の喜びを感じられたはずだ。それを彼らが金とちっぽけな快楽の道具にして台無しにした。

憎い、怒りが湧き、目の前の悪魔どもを視線で殺す勢いで睨んだ。この悪党どもの腸を引きずり出してやりたかった。

「俺が憎いか？」

「殺してやる！」

だが、将軍は大爆笑して私を笑った。

「ハッ！　笑わせるな！　お前は引き金もロクに引けない臆病なメスだ！　それに、お前もあの場に行くんだよ！　無力なまま、泣いて喚いて、俺達を楽しませろ！」

暗い鉄格子のなか、私は呪詛の言葉を吐き続けた。このまま終われない。夢も私も子供も世界も何もかもを嗤った奴に好き勝手されたままでいられない。

こんな男の言うことなど認められない。それを認めてしまえば、私の負けだ。でも、私には手段が無く、力もなかった。

せめて、隣にあの先輩がいてくれれば、そう思っても彼はいない。

私は叫んだ、犬のように。彼らが去るまで吠えつづけた。

第7話

先

夢なんてものは見るものじゃない。これは人生としての望みとしての夢ではない、眠ったときに見る夢の事だ。遠い幼き日を思い出せば、TVで偶然目にしてしまったホラー映画の世界に入り込んでしまい、布団を濡らし何度次の朝に母親を怒らせ、父親を呆れさせたことか。

今思えば、昔から怖いもの、思い出したくもない記憶に悲惨な未来図と、夢は気持ちよく眠ろうとする俺に嫌がらせに来たものだ。

夢は見たくない物ほど出てくるもので俺は大嫌いだ。しかも、それは大人になるほど残酷さを増していく。

俺は夢を見ていた。さっき榴弾で吹き飛ばされて意識を手放したはずなのに、何故かスラックスにスーツ、ネクタイまで締めて立っている。周りはアンダーハイブには珍しい自然を意識した緑に包まれた小さな学校があって目の前には子供たちが走り回っている。

校庭を多種多様な子供たちが元気に遊ぶ姿を俺は眺めていて、ポケットに手を突っ込めばキャンデイにチョコレートが出て来た。子供らは俺に気付いて、それらをねだる。目を純粋にキラキラ輝かせて甘いお菓子を手渡していくと、彼らは包みを剥がしてそれらを口に含む。

そンな俺の傍にはベッキーが何故かいた。彼女は出会ったばかりのパーカー姿で、俺に微笑みかけて子供を見やる。俺が何故彼女がいるのか疑問に思っていると後ろから大勢の影が現れた。

振り返ってみてみると、それは武装した大人達だった。アサルトライフル、拳銃、果ては剣に棍棒、石ころを手にして走ってこちらにやってくる。俺の本能が危機だと告げて、どこからか取り出した分からない銃器を向けて、彼らに放った。

ストックから肩に突き抜けるライフル弾の反動、手に馴染むピストルグリップの感触を感じ、一人、また一人と葬っていく。自分を何より後ろの彼らを守るために俺は一人の突破も許さずに脳天を撃ち抜

き、二度と歩き出さない安全な死体へと変える。
俺のしていることに間違いはない。俺は悪党を殺しているだけだ。完全なる善とやらを掲げて無気力な非暴力に走ったり、無駄な慈悲を与えて彼らをほくそ笑ませるようなマネはしない。物事はシンプルに徹して、撃ち殺すのが正しいはずだ。
だが、不思議なことに俺が一人殺すたびに後ろの楽園は遠ざかっていく。正しいはずだが、俺の傍には誰もいない。否定もされないが肯定もされない。ただ俺と死体の山が積み重なっているだけだ。
「本当は私と同じなんじゃないかって」
ベッキーの言葉が俺の脳裏に響き、俺は後ろを振り返った。確かにベッキーはいた。はるか遠くの楽園から俺にその言葉を放っていた。
「本当は私と同じなんじゃない」
俺はそのセリフの微妙な変化に気付いた。だが、俺はそれに納得していた。同じでないから彼女は向うにいる。彼女は子供たちと居て、俺は死体と共にある。そうだ、同じなんて言えない。
俺もかつてそこに居たはずだった。青臭い理想論を語ったものだ。だが、俺は仕事をこなしていくうちにいつの間にか楽園から遠ざかっていた。その訳は簡単だ。俺はいつの間にか、子供を救い、彼らを救うことではなく、悪党を殺すことを目的にしている節があったからだ。
子供はいつだって被害者と言う現実は幾度も見て来た。少年兵として戦場で使い捨ての駒同然に扱われ、ヘマをしてガソリン入りのタイヤを首にかけられて燃やされた男の子や、欲望のはけ口の為に歯を全て抜かれ、服すら着ることを許されない女の子、そんなものは飽きるほど見て来た。
俺はそんな大人たちを救うために大勢葬って来た。それこそが救いだ。悪党は駆逐されるべきで、たった銃弾一発で彼らを地獄に落とすだけなのだから、むしろ俺は慈悲深い自分を聖職者だと思ったことすらあった。
だが、目的と行為が同じ正義であるという事はあまりに少ない。救うために殺し、悪党を上回るためにより残虐性と暴力の術ばかりを磨

き上げていく。故に悪党撃った数だけ救えたとしても、俺を完全に称賛することはもはや不可能になっていくのだ。救いと殺し、相反することをする俺は一体どちら側なのか、区別がつかなくなる。
「本当は……」
「知っているさ」
血濡れた自分をベッキーは鋭い視線で突きさしてきた。
俺は悪党が嫌いだ。自分を悪とすら見つめられない愚かで残忍な連中を俺は心の底から嫌悪し、存在すら許したくない。だが、悲しいかな。一度鏡を覗いてしまった時に俺は嫌悪すべき対象をその中に見てしまったのだ。
「私と同じじゃない」
「俺も悪党に近いって事ぐらい」
俺の目的はもう「救い」ではない、「殺し」になっている。相容れない存在を撃ち殺す、それが悪党でなくて何なのか。
仕事にのめり込めすぎた哀れな男が俺だ。そんな俺が彼女と同じか、と言われれば俺は否定する。だが、本当は同じでありたかった思う自分がいて、それが棘となって自分に突き刺さった。
俺と彼女は違う。彼女は向うにいるのだから。
「起きろ!」
だが夢は唐突に終わる。脇腹に鈍い痛みが走り、俺は急に現実に引き戻されたのだ。口から胃液を少し掃き出し、目を開けると少し時間をさかのぼった現実が視界に広がった。
焼け焦げた木々の中で俺は眠っていたようで、周りがほんのりと温かい。空は曇天の重苦しい鉛色で、太陽すら拝めない。
そして左右に見えるのは夢に中で殺した連中とそっくりな男が四人。雑多な小火器を携えて、俺を見下している。
「悪魔を見つけるとはラッキーだ。懸賞金も弾むし、箔がつくな」
「ああ、俺達はツイてる。見ろ、虫の息だぜ」
彼らの顔は優越感で溢れていた。昨日まで猛威を振るって脅かしてきた俺を葬れるのだ。これから得られる名誉に地位、金を計算した上で俺を殺すのだから王様にでもなった気でいるのだろう。

一人が赤錆で汚れきった自動拳銃のスライドを引いて俺に向けた。古すぎてスライドの滑らかさが無いのか、力任せに引かれて銃口が俺の額に向けられた。
「悪く思うなよ、悪魔。アンタには大勢仲間をやられているんだ。銃弾一発で赦す俺を慈悲深いと思ってくれや。そうだろ？　本来ならバラバラにしてやりたいが、俺は優しくてな」
　これから殺すと言うのに、偉く饒舌に語る奴だ。長話をする悪党は長生きしないのを知らないらしい。たとえ、ここで俺を殺しても長い命ではないだろう。
「あばよ」
　男が引き金を引こうと力を込めた時、別方向から銃声が二発なった。ライフル弾とは違うドラム缶を思い切り叩いたような轟音が鳴り、四人が一斉に倒れた。その死骸は通常とは違い、大きく胸を抉られた者と、ザクロのように頭を弾かせた者と通常の弾丸より凶悪な弾丸で貫かれたことは疑いようが無かった。
　銃声は二つ。だが死体は四つ、つまりは飛び出た弾丸は四発。普通なら計算が合わず、自分の頭がどうかしてしまったか、と思う所だ。だが、それをやってのける人物を俺は知っている。先ほどの銃声が４５４カスール弾のものだ。そんなロマンな銃を好んで持ち歩く男を一人だけ。
「すっごーい！　本物のガンスリンガーだねお爺ちゃん！」
「昔に比べれば遅いものだ。年を取るとコイツは重く感じる」
　甲高いソプラノボイスを聞いて、片方は新米の女、ミナミと言う少女の声だと思いだした。ベッキーと一緒に歩いていたチビだ。もう一人は俺の元相棒にして師、コルト爺さんだと言うのはすぐにわかった。
　爺さんは俺の顔を覗きこんで二カリと笑った。
「悪党は大好きだ。とくに殺す前に長話をする奴程な……酷い顔をしているなターキッシュ」
「ああ、救っていただいて感謝するよ」
　コルト爺さんは笛吹用のスーツの上にダスターコートを羽織り、骨

董品を提げた皮製のピストルベルト。肩には古い木製ストックのボルトアクション狙撃銃を担いでおり、何の意味もない牡鹿の彫刻がほられている高級仕様だ。いつも通りの冗談のような格好で現れ、俺の手を取って立ち上がらせた。
「らしくないなターキッシュ。職務中に居眠りは厳禁だと教えたろう？」
「好きでした訳じゃない……プレジデントのランチャーを浴びたんだよ」
「それは結構な問題だな」
コルトは苦笑いを見せて、俺の肩についたホコリを叩いて落とした。公園でベンチに座っているような好々爺のように笑みを浮かべて、俺にブーニーハットを手渡し、俺はそれを頭にかぶった。
「こんにちは！　ターキッシュ先輩！」
「どうも」
榴弾の衝撃で痛む体の俺に元気の良い挨拶が浴びせかけられた。高いソプラノボイスが俺の体を刺激し痛みがチリッと走ったが特に抗議はしなかった。
ミナミの方を見てみると、彼女も変わった姿でいたことに気付いた。女性のSサイズのスーツの上にスカートを履いており、黒い無地のシャツの上にピストルベルトを吊ったY字型サスペンダーをしており、極めて軽装だ。
反面、小さい体には合わない大型のバックパックを背負っている。その姿は自然公園で冒険ごっこをする小学生に思えた。もしくはボーイスカウトか。目に見える銃器はレッグホルスターのマグナムオート。銃身がむき出しで後部がスライドする骨董品で失敗作と言うモデル「オートマグI」を意識したマグナム自動拳銃だ。
だが、彼女はひとしきりきょろきょろと周りを見回した後で小首を傾げて訊いてきた
「ベッキーちゃんは？」
「……わからん」
俺は周りを見渡して、そう言った。日の暮れ具合から見て大分時間

が立っているのは間違いない。彼女の姿が無いという事は多かれ少なかれ、厄介な事態になったという事だろう。
ふと頭をよぎったのは拳銃のハンマーが起こされる音だ。後頭部の後ろから聞こえた幻聴に俺はありうる一つの情景を頭に思い起こし、深くため息を吐いた。
ベッキーの後頭部に銃が突きつけられている、その光景が俺の頭に思い浮かび次の瞬間には銃声とともに消えて行った。もしかしたら、最悪な事態になっているかもしれない、と思うと俺は胸を締め付けられる思いになった。
「そう、なんだ……」
ミナミは困ったような笑顔をした。その表情を見て俺は先ほどからの彼女の変なリアクションに気付いた。この少女はさっきからヒトの生死に対して、さして動揺を見せていないのだ。
流石にベッキーに関することになると表情に曇りが見えたが大よそ新米の見せる顔じゃない。普通ならベッキーのように泣いて喚くものだ。
「嘆くのは早いぞミナミ。こういう時は知っていそうな者に話すに限る」
コルト爺さんは倒れた内の一人を仰向けにさせた。まだ彼には息があり、肩を撃ち抜かれていただけだった。三人を地獄に送っておいて一人はまだ殺さない、銃声が重なるほどの早撃ちでぶっ飛んだ技量を披露するのは流石と言えるだろう。
仰向けになった男の目の前にレッドホークを突きつけてコルト爺さんは負傷者に穏やかに訊いた。尋問開始の合図だった。
「さて少し歌ってもらおうか。八重歯とグラマラスな体が特徴の女の子を知らんかね？　何にでも噛みついてきそうな強気な子だ。どうだ？」
「知るかよ」
コルト爺さんの穏やかな口調に対して民兵はそう返した。もう少し強気なら爺さんの顔に唾を吐きかけた処だろうが口調は上ずっていた。大迫力の大型のリボルバーの睨みがあっては、どんな男も縮み

上がってしまうのは当然の帰結だ。
「いや知っているだろう。君の目は私の目を逸らした、体も心なしか震えているぞ若者よ。こういう時に先ほどの饒舌ぶりを発揮しないでどうする？」
「……ふざけんな！クソ爺！　お前に話す事なんか」
言い切る前にコルト爺さんは鼻を鳴らして、愛銃をクルリと回して遊びだした。重量１．６ｋｇの銃を器用に回す兆候は何の前触れか俺はよく知っていた。そして唐突に回転を止めると民兵の膝に容赦なく撃ちこんだ。
マグナム弾が男の膝の皿を割って、右足がビクリと跳ね上がった。無残に引きちぎられた筋肉線維と骨がむき出しとなり、皮一枚でぶらりとぶら下がっているのみとなった。獣の咆哮じみた轟音の後に男の大絶叫が山の中で木霊した。膝の骨の出っ張りが潰れて無残な姿を晒しており、もう使い物になるか、など聞くまでもなかった。
「君もマゾだな。コイツをもう一発受けたがるなんて。だが、残念なことにシリンダーには後一発しかない」
「クソ！　やめろ！」
男が悲鳴のように叫んだ。俺はそれを何とも憐れんだ目で見た。よりによってコルト爺さんの手にかかるとは運のない男だ。爺さんには慈悲は無い。俺のように仕事や使命感から来ているわけではなく、道楽で動くからだ。
道楽で行動する人間ほど恐ろしいものはいない。加減と言う文字を知らないからだ。そして、そんな奴が爺さんのほかにもう一人いて、彼女はニコニコと爺さんたちを見ている。
「という訳で君たち流に賭けにしてみよう。君が何発目で話すか、見てみるとしよう」
シリンダーから空薬きょうを取り出し一発だけ残してシリンダーを勢いよく回転させた。ロシアンルーレット、噂では聞いていたがそれを彼は当事者の一人の民兵に実演しようと言うのだ。流石に４５４カスール弾の二度目の被弾で楯つく気も消えうせたか、彼は完全に狼狽して口を回しだした。

「生きてる！　生きてるよ！　アジトでボスに飼われている！」
　コルト爺さんは不服そうな顔をした。民兵は自分の情報を疑っているか不足していると思い込んでいるらしく、さっきまで貝のように閉じていた口をひたすら動かして懸命に生きようと努力する。
「本当だ、信じてくれ！　後一日でショーに出させて、そこで金をとってから殺すって言ってたんだ！」
「……だそうだ」
　爺さんは不満げに片眉を吊り上げて言った。ミナミはホッと胸をなでおろしており、とりあえず生きているらしいことに喜んだ。俺も彼女と同じで深く息を吐き出して、気を落ち着かせた。
　だが、その中で爺さんはレッドホークのハンマーを起こしだした。シリンダーが回り出しトリガーが少し奥へと下がった。後は引き金にほんの少し、フェザータッチするかのような力を人差指に込めるだけで発射できるようになるのを見て民兵は更に体の震えを大きくした。
「待て、俺は話したろ！」
「話すのが早すぎたな。私を楽しませない内にお前は全て話してしまった。残念だがルーレット開始だ」
　命乞いのコツという物は多くあるが、爺さんに対しての命乞い程、難易度が高いものは無い。爺さんは趣味人だ。楽しまないと気が済まない厄介な性質の悪さで、その性格は今彼の手握られている拳銃に表れている。
　長時間過酷な環境下を歩き続けることが多い笛吹にとって普通マグナムは邪魔にしかならない。いくら威力が高かろうと、エネルギー量で見れば確かにフルサイズのライフルに匹敵するほどの威力も持つものもあるが、所詮は拳銃。命中率はライフルほど期待できない。
　猛獣等を警戒するにしても威力の高いものを欲しがるにせよ、それなら安定性の高いライフルや散弾銃を持った方が効率的というものだ。
　拳銃はサブウェポンの域をでない。だから水や携帯食糧を少しでも多く持ちたがる笛吹にとって、重くて大きいマグナムは好まれず

精々が４５口径の自動拳銃どまりだ。
リボルバーがいくら信頼性に優れていると言おうと、それなら小口径の物で済む。わざわざマグナムを選ぶ理由は存在しない。まして対熊以外に使い道がないような４５４カスールなど無駄を超えて、阿呆だ。
マグナムを持ちたがるものは馬鹿か素人と言っていい。使いずらく当たらない、装填数も少ない全くのロマン武器。だが、爺さんはその素人丸出しの拳銃で誰よりも長く生きてきたのだ。
何故なら趣味で生きているからだ。今のようにニヒルな笑みを浮かべて引き金に力を込めて、状況を楽しむのだ。
彼は自分をハーフ、それもノーズレスとライクのハーフだと言ったことがある。種族的に言えば、「理論じみた暴力性」を身に着けた大馬鹿野郎と言う訳だ。
ハンマーが撃針を叩いた。男は悲鳴を上げたが撃針が銃弾に衝撃を与えることは無く、派手なマズルフラッシュも焚かれなかった。ハズレ、男はラッキーだった。
「おめでとう、君は生き残ったようだ。では次。ミナミ」
「ハーイ」
だが、男の一瞬の喜びの後、すぐに彼は絶望へと転がっていった。小柄な女の子が目の前にニコニコと無邪気そうに笑って現れて、「おじさん、遊ぼう」などほざいてきたのだ。
「おい、嘘だろ？」
「じゃ、私とロシアンやろうよ」
そう言って彼女はマグマムオートを取り出して一発だけ弾倉に残して装填した。性質の悪い冗談にも限度があった。
「じゃ、一発目」
何の躊躇もなくマグナムオートの独特な金属音が鳴り響いた。後部のみがスライドして４４マグナム弾の大きな空薬きょうが排出され民兵は顔を無くして二度と立ち上がれなくなった。出来上がったクレーターからは肉と骨の細かく砕かれた破片が噴水のように飛び出る血と共に噴き出していた。

「ラッキーは二度続かないね」
「奇跡は安売りはしないから仕方ない」
二人は楽しそうだった。それこそ同好の者同士で会話すると言う程度の認識でしかないだろう。俺はミナミに空恐ろしさを感じ取った。頭のネジが最初からないのと同然だ。爺さんの趣味に最初から適応しているのだから。
「楽しそうだなミナミ、今までどんな教育を受けて来た？」
試しに訊いてみると、彼女は何てことなさそうに答えた。
「このピストルを１２の誕生日にパパからプレゼントされるような所で育ちました～」
俺はそれ以上聞かないことにして、曖昧な表情を向けるだけにした。誕生日に大型拳銃をプレゼントとはロクでもない場所だ。本来なら俺は彼女に哀れみや同情を抱くところだったが、彼女の顔からしてもう手遅れだと悟った。この齢にして爺と同じだからだ。
俺はそんな二人の談笑を尻目に民兵の持っていた武器を漁り、マシなものを見つけて先を急ごうとした
「行くのか？」
俺の背中を爺さんが呼び止めた。俺は振り返って楽しそうな二人に言った。
「当然だ。先輩として後輩助けるのは当然だろう？　それに元々向うに行く予定だったしな」
「素直じゃない奴だ。お前はいつでもそうだ。心の内側を隠したがって斜に構えた風を取る。素直になった方がいいと言ったろう」
爺さんはにこやかに言った。俺にとってはそれが癇に障った。睨み付けてやるが彼がこの程度で動じるわけはない。自分の半径１５ｍ内にいる限り、彼は絶対負けるという考えをしないと言う男だ。睨み程度は胡椒一粒の刺激にさえならない。
「お前は自分が悪党になったように思い自己嫌悪しているが、そうではない。本当は誰よりも誰かを救いたいのだ。しかし、あらゆる呵責がソレを邪魔している」
「うるせえ」

だが彼の口は閉じることは無い。
「俺は仕事でやっているだけだ」
「だから言ってるだろう？　そうしろと。どの道心配しなくてもお前は悪党にはなれん。それとも中途半端なまま行くかね？」
頭に完全に血が上り、骸から剥ぎ取った拳銃のグリップを強く握りしめて向けた。ふざけるな、と叫んでやりたかった。俺がどれ程、際悩んだかも知らないで、趣味でのうのうと渡り歩いてきたアンタに何がわかるのか、俺は爺さんの特技すら忘れて銃を向けた。
だが、次の瞬間には俺の手の中にあった拳銃ははじけ飛んでいた。スライドを粉々にされて、熱を持った破片に俺は一瞬もだえた。俺が噛めるより早く、爺さんは装填を済まし俺の拳銃だけを器用に破壊した。
「クソ爺！　誰も手前みたいに生きられりゃ、苦労なんて要らないんだよ！　何人も殺して俺は悪党殺しか笛吹かの区別もできない！　それでも、と信じても報われるか、なんて誰が信じてくれんだ?!　ぶっ殺すぞ！」
「銃もないのに?」
ミナミが爺さんの後ろからそんな言葉を放ったので、右手を抑えながら睨むと彼女は悪戯好きの子供のようにダスターコートの後ろに隠れた。俺をおちょくるとはいい度胸している。
手に道具さえあれば。７００ｍ先まではワンショットワンキルだというのに肝心な時にないのに気付き俺は悪態をつき、巨人のように立ちはだかった爺に叫んだ
「中途半端だと?!　何が違う?!　俺とアンタとそこらに転がっている奴らと！　俺もアンタも殺し屋同然だ！　俺は子供とか可哀想な奴を一人でも救いたいと願ったさ！　それがコレだ！　結局大義を得た殺し屋かぶれだ！」
爺さんは殺しを楽しむが、俺は楽しまない。そんなこと本当に言えるのか俺には自信がない。モーテルでの戦闘の後のベッキーの目、あれは俺にとって予想外だった。彼女ならある程度の耐性があって決してピカピカの理想掲げて笛吹になったわけではないと思っていた。

見るからにロクな育ちでない少女にそんな理想があるわけがない、俺はそう決めつけていた。だが、彼女は血の底で育ったからこそ、希望と言う光の大切さを知っていたのだ。

そしてソレを持って笛吹にやって来た。俺は彼女の話を聞くうちに自分が結局言い訳だらけの大人だと再認識させられた。悪党を殺すことばかりに目がいっていた俺には彼女は眩しすぎた。

俺は悪党だ。結局殺しがしたい連中と何が違う。楽しまずに嫌悪を抱いて殺しをすれば、マシだとでもいうのか？　いや言う訳がない。目的に近づくたびに悪辣になっていく自分が嫌になっていく。

「それが中途半端だと言うのだ」

「何?!」

爺さんは静かに言った。

「いつまでもお前は子供にのように悩んでばかりだ。私と組んでいた時からずっと。だが、お前は気づいていないのだ」

爺さんはレッドホークをホルスターに仕舞った。獲物から手を離して俺の前に立って爺さんは堂々と言った。

「悩みこそが善人の証だ。お前が絶えず良心を持ち続けたことの証だ。いい加減、悪党ぶるのをやめろ。自分に素直になれ。お前は間違いなく人々を助けて来た笛吹だ。悪党なら迷わず。楽しむものだよ。私のように」

爺さんは目を猟犬のように輝かせて言った。俺はその目に食い入るように見た。笛吹を趣味の場として仕事をそこそこに純粋に悪党を殺すことを楽しむ狩人。彼のような男にとって俺は悪党ではないと言う。

だが、それでも俺は納得しきれなかった。爺さんの言葉だけでは、悪党の説教だけでは頷くことが出来なかった。

「アンタの言葉で納得すると思うか?」

「いや、思わんよ。　だが、お前が救おうとしている女が私は鍵となっていると思うのだよ。でなければお前が助けに行こうとしない。お前は悪党が嫌いだからな」

その通りだ。俺は悪党が嫌いだ。だから俺と爺さんは違った。俺

は理想を追って、爺さんは道楽を選んだからだ
「ほざけ、アンタが捕まっても俺は助けに行くぜ」
爺さんは俺の言葉を聞いて深くため息を吐いた。俺の態度が一向に変わらないことに呆れたと見える。
「娘の安全を聞いて胸をなでおろしたヤツがよく言う。余程気に入ったと見える」
爺さんが勝ち誇ったように言うのに俺は負けた気分になった。早撃ちでも負けたうえで口でも勝てないとは情けない限りだ。
そう思っているとミナミが俺の隣にやって来て、いくつか道具を手渡してきた。見てみると、9mm口径の自動拳銃だった。マガジンは三つで先ほどの粗悪品と比べれば格段と性能の良いものだ。
「コレ貸しますねターキッシュ先輩」
「……お前は味方撃った奴に銃を貸すのか？」
ミナミは鼻を鳴らして薄い胸を張って言った。
「撃つ気なかったのは知ってますよ～。だって人差指まで使ってグリップを握ってましたし」
俺は驚いた。無意識にそんな事をしていたとは気付かなかった。しかし、それを聞くと酷い話にも感じた。ミナミで見えたのなら、爺さんにも当然見えていたはずだ。
「……恐れ入ったよ、悪党ども」
「どうも～。悪党弟子2号です。でもね……」
ミナミは笑顔を消して、オートマグの弾倉を変えてスライドを勢いよく引いた。寸分の狂いもない正確な動作。重く固いマグナムオートのスライドを小さな手でよくできるものだと感心するほどだ。
「ベッキーちゃんは友達だから死んで欲しくない……でも、死神相手の代わりならいくらでもいるし、この際大勢を釜に落として楽しもうと思うんですよ。いけませんか、先輩？」
「そうだとも、ターキッシュ。私もお前と新入りが死ぬのは辛い、此処は一つ協力させてくれんかね？」
俺は頭を抱える思いだった。先ほどまで俺を励ましてくれた老人も、これから救おうとする女の友達も本当に悪党だった。清々しいほ

ど自分に素直で言葉も行動も本能の行くまま、と悩んでいる自分が馬鹿らしくなっていく。
「悪党を殺せ、ターキッシュ。ただし自分は悪党と思うな。お前は善人として殺せ。ベッキーに手本を見せてやれ。善人なりのやり方をな」
「自由に行きましょう！」
「……ああ、好きにさせてもらうよ、お前らみたいにな！」
俺達は目的地へと歩を進みだした。大よそヒト一人救いに行くには物騒すぎる面子で行くのだ。何もかも冗談のようだ。
悪党から説教を受け、チビにも小ばかにされ、今はそいつらと一緒に歩いている。だが不思議なことに、あの胸糞悪い夢による心の霧が少し晴れた気がしないでもなかった。
「本当は私と同じなんじゃないかって」
またあのセリフが頭の中で響いた。俺はその答えを知っていた。だが、今度は違う回答だった。
ああ、助けに行くぞベッキー。だから教えてくれ。俺がどちら側なのかを。
俺は再び歩き出した。周りを見れば、曇天の空に一筋の光が見え、焼けた大地に木の実が転がっていた。

第8話

犬

牢獄という物は想像以上に不快な場所だ。血なまぐさい匂いに水で濡らしたモップで拭かれただけの床。そこにこびり付いた汚れは見るだけでおぞましい程で、コンクリートの床が茶色く変色していて、ここでの不潔さと残忍な仕打ちのひどさを物語っている

空調などあるわけもないので、湿気も酷く、もうこの後すぐにショーに出される私には当然だが食事も出て来やしない。スラム街に近い場所で育ったおかげである程度痛みや苦痛の耐性があるとはいえ、それでも強い不快感がなど身を絞めつけてくるほどだ。

だが、何よりもすぐ目の前に近づく死の恐怖、すぐそこに居る子供が連れてかれる無力さ、あの憎き獣畜生の如き男の喉笛どころか腕すら噛みつけずに死ぬと言う怒りが私を突き動かし、何度も鉄格子を蹴飛ばして脱出をしようとした。

まだ死ねない、死にたくないと心が叫びが胸の内側で無限に増幅され、私は鉄格子を蹴り破れることを願って渾身の力を込めて蹴り続ける。マーマルとして自慢の脚力を以て鉄板入りのブーツの厚底を鉄の檻目がけて、叩きつける。

一度、二度、三度と繰り返し、数が十を超えても尚私は続ける。繰り返す度に金属が悲鳴のような音を上げるが、それだけだ。鉄格子は無意味だと私に語り掛けるようにへこみすら見せない。現実と言う壁がいかに分厚く、小娘一人で何が出来ると嘲笑のような反響音を響かせるだけで何一つ変わらない。

「クソ！　クソ！」

悪態を吐いて二回連続でこの狭い場所からの解放を望んで、攻撃する。脚全体が痛みブーツの中で足の裏から血がにじんで来た。靴の中が液体で湿りジワリと広がる痛みを感じ取って私は目じりに涙をためた。

痛みに泣いているわけじゃない。何をしてもどうにもならない無力さと死への恐怖。それが原因だった。一人こんな狭い場所に閉じ

込められ、明日か数時間後には殺されるだけであっけなく終わる人生に希望など見いだせるわけもない。パンドラの箱の底に希望はあっても、それは物語の都合の話でしかないのだ。私にはそれが無い。

目の前に助けに行きたい子たちがいるのに、たかが鉄枠で囲われただけでどうにもならなくなってしまってる。たとえ、目の前で子供が連れていかれても何もできない。数分後にはショーの見世物として死ぬ動物以下の家畜程度の扱いを受けている子供を一人も助けることが出来ない。

私は何をしているのか、なんて無力なのか、と自分を責めるばかり。銃もナイフすら持たない私は唯の女の子でしかない。何の脅威にもならない一人の少女だ。鉄格子の冷たい箱の中で一人うずくまって、目から水滴を零す。水分なんてほとんどとっていないのに、水は目から零れ落ちて私にせめてもの癒しを与えようとする

だけど、癒されない。瞳の中に入るのは闇しかないのだから。他の鉄格子に入っている子供たちの顔を見れば、誰もが隅に座り、もういっそ地獄から抜けれるのなら死すら容認するようにすら見える。

右奥にいる少女などは特にそうでシルエットだけで想像以上の闇を抱えているのが分かった。私より年下にもかかわらず、その腹部は丸く大きくなっており、獣たちの征服の証をその身に宿しているからだ。

そして真黒に染まった目が私にある疑問をぶつけて来てるのだ。どうしてお前はすぐ殺してもらえるのか、と。

「何でよ！　畜生！」

鉄格子をもう一度蹴り飛ばし、息を落ち着けようとする。

現実と言う名の闇しか映らないのでは何も慰めにならない。欲しいのは此処を抜け出し、皆を救って、鬼畜共に相応の報いを与えることが出来る力だ。でも、ご都合的に悪魔なり、神様なりが出てこない限りソレは不可能だ。

神も悪魔もいないのは知っている。いや、いても何もしない無気力なだけかもしれないが私達の前には唯の一度も、救いも悪の道への誘いも来たことは無い。もし居るとするなら、今すぐ私の前に来て何か

を寄越せ、と叫ぶ。
虫のいい話だと言う奴も出るだろう。救うためにヤツがまず救われたいと願うなど、失笑もいい所だろう。でも現状それしか言えない。唯の銃の一丁でも欲しい今、この際どんな罵倒も受けても甘んじて受け入れる覚悟がある。
「悪党を背中から撃てるか？」
その時、私の脳裏に一つの言葉が響いた。ターキッシュの物だ。あの洞窟の中で私を支えてくれた男の言葉が今蘇った。それは鮮烈に、強く突き刺さった。ヒトを殺すたびに震えていた私には痛烈過ぎた。そして思った。一時の怒りだけで、彼のしていたことを再現できるのか、と。
なら、私はどうすればいい？
殺しも上手くできるか自信がない。かと言ってこのまま無力に終わるのは耐えられない。上手く抜け出せても、結局何もできないのではないのか、と疑問がもたげ私は胸を締め付けられる思いになった。
「何よ……」
私は何をしにきたのだろう？　笛吹？　太陽？　訳の分からない事をほざいていた唯の小娘でしかないではないか。デカいことを言うだけの口にそれに似合わない腕前に心、全てが小さくて儚い。足で踏まれれば終わってしまう存在でしかない。
「何なのよ……私やっぱり……」
沈み込んでいく中で私はブーニーハットを被り、ニヒルな笑顔をしていた男の名前を口にした。せめてもの救いを信じて。
「……ターキッシュ」
その名を口にして膝を抱えたまま横になった。このまま眠ってしまえば、楽になれるような気がした。このまま居なくなっていしまえば、とすら思った。しかし、そこに誰かの声がかかった。大人の野太く野卑なものではなかった。
「今、ターキッシュって言った？」
その言葉はアンダーハイブの言語であった。そして声には幼さがあり少年特有の高い音域でその声は私のすぐ目の前の鉄格子から聞

こえて来たのに気付き、そこに目をやった。
すると、そこには現地の腕に羽のようなものが生えている子供がいて、痛ましく痩せこけた体と痩せこけた顔を見せていた。
「お姉さん彼を知っているの？」
「……知ってるも何も、組んでいたのよ。貴方は？　どうして私と話せるの？」
少年はより自分の顔が見えるように鉄格子に近づいて話した。
「僕は町出身だから。父さんと母さんがニンゲン相手に商売していたから言葉を勉強したんだよ。そんなことより彼の話だよ、ターキッシュと組んでいたって本当？」
「そうよ」
私は簡潔に答えた。私がここに来た時、散々悪魔と言われていたと思うが少年は訊いていなかったのだろうか。
「……聞かなかったの？」
「ここじゃ、アイツらと話すのはタブーなんだ。目を見ただけで殺された子もいるし、大半はアイツらがいる中では見ざる、聞かざる。長生きのコツだよ」
少年がいう長生きのコツは重い響きがあった。私より年下なのに達観しきった、悟りでも開いた目をしていた。この暗がりの中で世の全てを知ったような少年の無気力な目は悲しくて悲しくて仕方が無かった。
でも、それが現実なのだろう。此処では彼らに選択肢などない。ただおこぼれに預かり気まぐれに怯える以外に彼らに与えられた生き方はないのだから。
「ターキッシュは生きているの？」
その問いは何のためか。私は察せないわけがなかった。彼らの求めている言葉が何なのかわかったが、それを言ってもぬか喜びになるのでは、と言う恐れが出た。
だから、私はただ一言「わからない」とだけ彼に言った。
「そっか。わからないか」
少年は別段落胆した様子を見せなかった。ただ、言葉のトーンを落

として私の顔を見ていた。その様子からターキッシュが望みではないのでは、と想像し彼に何故聞いたのかを尋ねようと思った。
「どうして、ターキッシュの事を？　彼が奴らを狩る悪魔だから？」
「違うよ。笛吹だからだよ」
「……助けてくれるかもしれないって事？」
私は尋ねた。確かに連中が悪尼と呼んでいたターキッシュなら、連中を一人残らず掃除して彼らを助けてくれそうである。少なくとも彼には私と違って殺し自体には迷いはなく、誰かを救おうとする気持ちは本物だと思う。彼が期待するのも無理はないだろう。
「違うんだ。　僕が逃がせた弟の事を聞きたいんだ」
弟を逃がしたと彼はそう言った。ここに連れてこられるまでの間に外でどんな暴虐が行われていようとしたのかを見た。そして、この地の果てで何が行われているのかも。
少年は勇敢にも自らを省みず弟を逃がしたと言うのだ。だが、それゆえに捕えられた、と言ったところだろう。それでも、弟の身を案じる彼は大したものだ。牢屋で一人無力感に打ちひしがれた私と比べて彼は何倍も大きい男だ。
だが、私は彼のたった一つの望みにすら答えることが出来ない。ターキッシュともっと話していればわかったかもしれないが、私は反抗心と青臭い考えから彼とそう言ったことを話すことなく終わったしまった。
彼が今生きていようと死んでいようと、この場に居ない者に確かめる術などあるわけがなく、私は少年の問いに力なく首を横に振った。
「……分からない、分からないわ……ごめん」
またしても目からあふれる涙を拭いて、私は泣いて謝った。だが、少年は私を罵倒したり、落胆の闇に堕ちるわけでもなく私に一言言った。
「いいよ。泣かないで、死んでいる、と聞かされるよりずっといいよ。それなら、まだ希望は持てる。ターキッシュだって、きっと生きてるよ」
励ましの言葉だった。少年は無能な私をなじりもせずに、励まして

くれたのだ。それは何よりも信じがたいことに思えた。この地の獄よりも劣る場所で過ごしてきたはずの子供がどうして、そんな強くいられるのか。私には不思議に思えた。

　此処よりはマシな私の育った場所ですら、弱肉強食とヒエラルキーに基づく理不尽が横行していた。環境に適応するように、汚い場所では皆一様に汚くなるのが常だ。此処に住む民兵たちが本能に従って略奪と暴力に身を染め、囚われた者達は彼らに蝕まれて日々を認識しない人形のようになって生きるしかないのを見れば明らかだった。

「……強いのね。私はもう嫌になってきているのに」

「僕もだよ。色々と生きるために頑張って来たけど、最近疲れてきちゃった」

　少年は淡々と語りだした。

「捕まった後、僕はアイツらにこき使われた。ニンゲンの言葉が使えるから色々と便利だとか言っていた。でも、弟は喋れなくて……牢屋に入れられるところを僕が必死で止めて来た」

　ニンゲンの言葉、やはりここの連中は人間とつるんでいるらしい。何のためかは私の足りない頭では少し理解が及ばないが、人間によって此処に地獄が形成されているという事は確かで、私は拳を握って強く固めた。

「商売に使われたの？」

　私が少年は頷き、答えた。

「それもあった。後は此処のヒト達にニンゲンの言葉を教えるんだ。そして、適当な村でニンゲンの声を上げて近づくんだ。貧しい農村なんかだと、ニンゲンはお金をくれる神様だから、隠れないで皆で歓迎しようと集まってくるんだ、そこを……」

　少年はそこで言葉を切った。腕が震えていて罪悪感からか頭を抱えて息を荒げだした。発作のように見えた。

　油断したところを一網打尽。街に行けば私達のような笛吹や人間達がいる、そこで聞いた言葉を訊けば誰もが人間が来たと勘違いするだろう。声や言葉で相手を誘き出す方法はいくらでもある。過去の人間の戦争でもこの手の単純かつ効率的な方法はしばしば取られた

と聞いたことがあった。
　まして、彼らが人間と組んでいるのは疑いようのない事実。服装や身に着けるものもそれらしく偽装することはそう難しくない。
　人間の言葉で釣り上げて、そこを根こそぎ奪い取る。卑怯で許しがたい行為だ。しかも少年が逆らえないのを良いことに、罪の一端を背負わせるなど、まさしく悪魔の所業だ。
　いや、だからこそなのだろう。将軍は地獄を作ることが一番の儲け方だと言った。モラルのない行為を行う方がよほど暴利をむさぼれるという事だ。永遠に自分が強者で相手が弱者なら、それこそ安定した儲け場だ。その為に子供を使うことは正しいことで、むしろ自分たちが弱者に施しをやっているつもりですらいるのだろう。

「弟を守るためにやって来たんだ。弟はまだ六歳で父さんも母さんも……だから少ないお金を盗んで弟に持たせて逃がした」
「だから、あなたは此処にいるって訳ね」
「うん。でもおかげで僕の戦争が終わったんだ」
　少年は小さく微笑んだ。自虐の意味も含まれた子供の物ではない顔だ。甘いキャンデイの代わりに殺しの罪を大人から受け取った子供のなれの果てだった。
　彼の戦争は弟を守るための物だった。大の為に小を犠牲に、とはよく言われた言葉だが彼は弟一人を守るために大勢を地獄へ送る手伝いをしてきたのだ。そんな物に堪え切れるものなど大人だって少ないだろう。
　良心という物を持っていれば、の話だが。
「もう僕は誰かを犠牲にしなくていいんだ。後は死ぬのを待つだけ。天国に行ったら多くのヒトに謝らないといけないけど……此処よりはずっといいだろうから」
　彼は幼心に刻み込まれた罪に疲れているのだ。そして、死ぬことによる解放を願っている。私はそんな彼に怒りも覚えたが、何も言えなかった。なぜなら、さっきまで同じことを考えていた私にその資格はないし、悟りきった少年に感情論で励ましたところで無駄だと分かっ

てしまったからだ。
死ぬな、と言うのは簡単だ。言葉だけなら直接面と向かう必要だってないのだ。電話越しに言うことだってできる。だが、今の彼にソレを言うのは難しい。救いも希望もない、自ら選択する自由すらない彼に生きていればいいことがあるや、弟さんはきっとあなたを待っているなんて言ってどうすると言う訳だ。
彼に必要なのは現実的な希望だ。弟が確実に生きている証拠、自分がここから解放されると信じられる救い主の登場がソレだ。だが、私はそのどちらも為す事ができない。格好だけは笛吹でも、ただの女の私に彼が希望を抱くことはあり得ない。悲しくも事実であるそれを受け止めて私は黙ろうとした。
「お前の理想は間違ってない。今は泣いて悩め、笛吹にその可愛らしさは似合わない」
そこで一つの言葉が再生された。居るはずのない人間の声が確かに私の頭の中で録音テープのように再び流れ出したのだ。
理想、とはなんだ。彼の言っていた言葉から記憶を巡らせて、自分の放った言葉と自分のしてきた行動を思い出していく。無茶な村民救出、デカい口、先輩への反抗、それらは一体なぜ行われたのか、私は自分の意志を思い出していき、そして目を見開かせた。
このまま黙って良いものなのか、と私の中で一つの意志が働きかけた。燻っていた炎がもう一度輝きを取り戻すか、はたまた確固たる意志と言う名の〔弾丸〕が再び私に装填された、そんな情景を私は覚えた。
「そうだ」
確かに現実は変わらない。私はでくの坊だ。彼を物理的に救うことは出来ない。だけど、せめて心を支えるべきではないか。そうだ、私は笛吹。此処で黙っては心すら失う。彼は汚れていると言えなくもないが、それは私も同じことだ。でも、私があの時の殺しを受け止められるようになったのは、誰の言葉のおかげだろうか。
ターキッシュの言葉を思い出し、私はその言葉を彼に当てはめていく。彼に必要なのは非現実的な救いの話ではなく、彼自身の肯定と現

実への抗いだ
「それでも……」
　私は自分を思いだし、彼に言葉を送ると決めた。受け止めてはいけない。現実をそのまま受け入れてはならない。そこに抗って得られる物もある。このまま罪悪感を抱えたまま死ぬのは悪党どもに負けたまま死ぬという事だ。
　そうだ、私も泣いている場合ではない。このまま泣いて死ねば、それで終わりだ。馬鹿な小娘と言われて骸を晒すだけだ。それが私の死にざまなのか？何の抵抗も見せずに死ぬのが望みで合っていいのか。いい訳はない。
　私は悪党を殺し、誰かを救う笛吹だったはずだ。それを今の今まで忘れていた。そして今心だけでも救えるかもしれないことに気付いた
「アンタは悪くないよ」
「……変なこと言うんだね」
　私は涙を拭きとって、彼に話しかけた。
「アンタは弟を救うために手を汚した。そんなアンタを悪だなんて言わない、アンタは一人の立派な兄貴よ」
「……いっぱい死んだかもしれないのに？」
「それは事実かもしれない。だけど、私はそんな人を知っているの」
　あの日、自分は太陽にはなれないと言った男がいた。その男は誰よりも殺し、誰よりも冷酷に冷静に動ける男だったけど、誰かを助けようとする姿に偽りはなかった。自分が汚れていると知っているから彼は太陽のように誰かを照らせないと言った。
「その人は皮肉屋で、ムカつく奴で外道のように見えた。でも、それは違った」
　でもそんなことは無い。彼は大勢を照らしてきた。自分の手を血で染めても、大勢の他人を泥沼から掬い上げて来た。強がってはいたが、彼も少年と同じだった。彼も誰かの為に血で汚れ、それに悩み、それでも戦い続けていたに違いないのだ。
「彼も……ターキッシュもね、誰かを殺すことに悩んだけど、誰かを助

けるために汚れを一杯背負っただけよ。アンタは罪のないヒトを巻き込んだと負うかもしれないけど、それでもアンタは自分で出来ることをやって来た。だから……」

私はここに来てようやく分かった気がした。彼のしていた事は少年と同じだ。少年から彼を思い出したのも、そのせいだ。彼は大勢を殺した殺し屋、だけど彼はこんな少年、少女たちを助けるために外道に身をやつしてきたのだ。

それを悪と言えるだろうか。殺しは悪だが、甘い正義にどれ程の正しさがあるのだろうか。やるしかない状況でやって、誰かを救う彼と少年に正義はないなんて言えないのだ。

「アンタはそんな思いつめないで。もし、仮にもっと長生きできるのなら、もっと泥を被って、今度は大勢を助ければいい。ターキッシュならきっとそう言うわ」

英雄の名を借りるのは情けなくも思うが、この場は私だけでは説得力に欠けるだろう。だから、借りさせてもらった。せめて、この少年だけでも救いがあってほしいと言うささやかな願い、下らなくても私にできる笛吹の理想だ。

少年はしばらく私を見ていた。その顔は呆気にとられているようだった。誰からも言われたく事のない言葉を聞いて放心しているのだろうか。

冷たい洞窟、牢獄のなかで少年と私の間に沈黙が流れた。風の音すら聞こえない、本当の静寂。精神か、もしくは神の気紛れ的な気候の変化かはわからないが、私達は互いに見合っていた。

だが、その沈黙は破られた。重い鉄の扉が開かれる音が沈黙をかき消し、私達を再び救いのない現実へと引き戻した。民兵の集団がやって来て私の前に止まった。

「来い」

檻から解放され、私は後頭部にオンボロの自動小銃を突きつけられ、前に歩くように後頭部を小突かれた。どうやら、時間のようだ。

私は横目で少年を見つめながら、ショーとしての死刑台へと歩いて行った。これからの事を思うと怖くてたまらず、手と唇が震えて止ま

らない。いっそ叫んで暴れだしてみたかった。
ロシアンルーレットで確立に震えて泣いて喚いて死ぬより今ここで撃たれた方が楽な気さえした。でも、それはダメだ。少年に、彼らにそんな姿は見せられない。笛吹として最後くらいは格好をつけなくてはならない。
少年はずっと私を見ていた。その瞳に流れた涙は歳相応に思えた。

第9話

歓声と罵倒、相反する二つの叫び声が扉の向うから聞こえる。これから行われる処刑には金とスリルがかかっているからだ。ロシアンルーレットによる運だけに頼られる純粋な影事、ヒトが死ぬ様を見物し、尚且つ金も手に入ると言う特殊なギャンブルとやらに私は参加させられるのだ。

「死ぬ前の最後の自由だ、精々味わいな」

将軍の下種な言い回しの後に手かせを外されて、痛む手首をさすりつつ、私は思った。これから死にに行くのだ、と。ロシアンルーレットは確かに生きる確率がある。装填数にもよるが、六発なら六分の五の確率が永遠に続けば、とりあえず私が生きることは出来るだろう。

だが、そんなものはまやかしだ。六回やって一回は当たるのだと言われて、どれくらいの期間を長生きできるか、と考えればそう長くはない事くらい中学生でもわかるという物だ、

加えて自分の不幸具合を見れば、今日はツイてるなど妄言にも等しい。神にも見捨てられたマーマルの女の子に同情してほしいくらいだ。もしくは私一人救えない神の無能さを呪ってもらえれば、とも思う。

だが、そんな恨み言ばかり内心で呟いている内に、自分が今どうなるかを今一度認識してしまい私は急激に背筋が凍り付かせた。

「私……終わっちゃうんだ……」

一人そう呟いて自らの境遇を私は呪った。皮肉な感想しか浮かばない中、自分の生涯がたった15かそこいらで終わってしまう事を思い出して私は震えた。最後の最後であの少年に対して格好をつけても結局怖いのは消えてくれない。

ヒトである以上感情から逃れることは出来ない。逃れようのない死から恐怖を感じないのは不可能と言っていい。歯がカチカチと音を出し、自慢の八重歯が歯茎を傷つけて口の端から血が流れた。

その私をみて連中は愉悦に顔を歪ませて嫌な笑みを見せる。女の子、それも敵視している種族の怯え顔を見れば優越感に浸ることが出

来るからだろう。舌を這わせてみる彼らに慈悲など存在しない。
クソ、クソ！
内心、悪態を吐いて彼らを睨む。涙を飲みこんでの顔だったためか余計に連中を喜ばせるだけで私はますます怒りに震えた。こいつらに好きなようにされて、出来たことが少年の心の重荷を少し軽くさせただけ。こいつらの喉元に噛みつけたらどれ程気持ちの良いことか
「ホラ、時間だぜ。さっさと撃たれて来い。その方が楽でいいぜ」
「テメぇ！」
大爆笑が湧き起こり、後頭部に水道管にも似た短機関銃を添えられて私はステージの真ん中へと歩かされた。恐怖と怒りが心を支配してどうしようもない黒一色に私は染まっていくのを感じた。
悪党、腐れ外道、鬼畜生共はまさか自分が私に殺されるなんて露ほど思っていない。今まで狩って来た無力で哀れな村民たちと一緒で家畜同然の存在に何を恐れる必要があると言うのか。自分たちは集団で手元には銃があり、相手はメスガキ一匹、楽勝だ、と。私に対する視線は正にそのようなものだった。
だからこそ、余計に殺意を募らせた。だが、殺されるのは私の方なのだ。
扉が開かれて球場のような広々とした場へと来た。降り注ぐ太陽の光が目をくらませて、次に悪趣味な悪党どものお客様が歓迎した。手に賭けた事を証明する券を握りしめて、声を張り上げて片方は勝つことを期待し、もう片方は死ぬことを願って罵倒する。
中央に置かれたテーブルにはべっとりと血の付着していた跡が黒々と残っており、今まで何人死んで来たかを物語っていた。
まさにそれは地獄だ。将軍の言った通り地獄こそ最高の儲け場だった、それを改めて実感しつつ私は中央の死刑台に座らせれた。よく目を凝らせば観客だけではなく、私を笛吹として一応警戒しているのかテーブルを中心にして十メートルほどの距離に四人の兵隊が監視している。
手には古びたアサルトライフルが握られており、セレクターはフルオートにされている。この距離なら確実に殺せるように配置、準備し

ているのだ。抵抗することすら許さない現実に私は目をつむって頭を抱えた。

最後まで、何もできないのか。そう思いテーブルの先を見た。しかし、そこには誰もおらず不思議なことに相手がまだ到着していなかった。民兵たちも疑問に思ったのか、互いに顔を見合って戸惑っているようだ。賭けの対象であるもう一人が未だ来ないのだ。

観客たちも妙な雰囲気を察したのか、ざわめきだした。何故今すぐ始まるはずのギャンブルが始まらないのか、と疑問は波及し一人が罵倒であろう怒鳴り声を上げるとそれがあちこちに飛び火してブーイングの嵐が起こりだした。

暴動にも近い罵声の大合唱に民兵たちは困惑し、通信機を取り出して状況の確認を取ろうとしている。一体何が起こっているのか私にはさっぱりわからなかった。何らかのトラブルが起こっていること以外は何も。

だが、そこへ拡声器による音声が入りだした。大きく全体に聞こえるように調整されたスピーカーから現地の言葉で何かを知らせている。その声は年季が入っており穏やかな口調であり、観衆たちは大勢がソレを黙って聞きはじめた。

民兵もそれを注意深く聞き取っていた。何を言っているのか分からない言葉の羅列に私は一人混乱し、状況が呑み込めないでいた。一体何を言っているのか。ナノマシンさえ壊れてなければ理解できたろうが、今は不可能だという事に苛立ちを覚えた。

しかし、長いお知らせの最後に馴染のある単語が付いて私は驚きを覚えた。その話の最後に出てきたのだ。

『……ターキッシュ！』

その単語に反応したのは私だけではなかった。アリーナ全体が揺れるように驚きの声を上げてアリーナの中央に視線を注目させた。そして私が出て来た場所とは反対の所から男が一人やって来た。

「どうして……？」

疑問を呟き、私は見た。その顔、姿かたちは紛れもなく彼、ターキッシュその人だった。両手を頭の上に載せて、スーツの上に迷彩を着て

頭の上にブーニーハットをのせてやってきたのだ。民兵は全員が銃を彼に向けた。何故、彼が此処にいるのか分からず、ぞろぞろと彼の元へと向かい追い返そうとした。

しかし、そこへまたしても観客たちからの大ブーイングが始まった。何故観客たちがブーイングをしたかと思うと、アリーナの一頭高いスコア表のようなものがあり、そこにオッズが記されていた。

倍率はどちらに賭けても５０倍。賭け事としては常識を完全に無視したものだった。ありえない倍率に民兵たちはますます困惑していた。本来なら中止されるべきなのだろうがお客様の熱がソレを許さなかいからだろう。

観客たちは声を合わせてコールした。賭けを続行するように声を上げているのはすぐにわかった。自分の持っている金券が更に化ける可能性に加えて、見世物の対象がターキッシュだからだ。

ターキッシュは此処に来るまで悪魔と呼ばれていた。織の中に閉じ込められた子供ですら知っている名前、この世界の悪党たちにとっては殺したい男筆頭なのは明らかだ。モーテルを探して部隊を町に送り込むほどの執着を見せているのだ。子供からは英雄視され、敵からは悪魔と言われる。それほどターキッシュはこの世界では有名だという事だ。

そんな男が間抜けにも非武装でノコノコやって来てロシアンルーレットをしようと言うのだ。そんな男の死にざまを見て、尚且つ大金を手に入れると言うのは最大の見世物だ。

ターキッシュが民兵と話して、次に彼らは通信機を手に指示をこう。長い長い審議、観客たちはヒートアップし私はターキッシュだけを見た。彼を見て思ったのは安心だった。彼が来てくれた、生きていた、そのことが脳髄を駆け巡って私は一瞬、小さな希望すら見出したほどだった。

彼がすぐ近くに来てくれた。感謝の念に堪えず、私は人知れず目から涙を流して微かに喜んだ。

だが、幸せの時間もすぐに終わった。審議の結果賭けは行われることとなり、ターキッシュは厳しいボディチェックの後に向かいの席に

座った。彼の顔はいか程も笑っておらず額に汗をにじませていた。更に周りに民兵が五人追加されて、警戒が強まったことを確認し私も喜んでいる場合ではないことに気付いた。
テーブルの横で審判らしき人物がリボルバーを片手に近づいてくるのを見て私は緊張感を走らせた。生唾を飲み込んで噴き出す汗の不快感すら忘れて私は審判を目で追っていた。
「ベッキー」
そこへターキッシュの声がして私は何かと思い、振り向いた。彼は私の目を見て言った。
「待たせて悪かったな。お前には辛い思いをさせたろう」
ソレは陳謝の言葉だった。この皮肉じみて素直ではない大人が私に放った言葉は意外にも謝罪の言葉だった。
「……来るのが遅いですよ」
私は本心から言った。彼は来るべきではなかった。もうショーは始まってしまった以上、今彼がここに来て私と一緒にこんな賭けをすることに意味はない。いっそ、私の事を見捨てて子供を救う方が合理的という物だ。
何故、彼がここに来たのか。私は疑問に想い、嬉しくもあって、嬉しくない彼の行動にそう言うほかなかった。
「いや、まだだ……まだ遅くない。お前はまだ生きている。俺のすぐ前にいるんだ、ベッキー。いいか？　自分を信じろ、お前は今日死なない」
「そんな事……！」
「出来る」
ターキッシュは短く答えて、言葉を続けた。
「耳を澄ませろ。何でもいいから思い出せ。動いたら迷わず、行動するんだ」
「……どうして、此処に来たの？」
審判がテーブルの横に付き、リボルバーのシリンダーに一発弾を込めて回転させた。運命の時間が近づくのを肌で感じ取り、瞳が揺れだした。しかし、目の前の彼は違う。確信を

持った目のまま私に言った
「まだ救われてない奴がいるからだ」
「ハナスナ！」
片言の言葉で言われ、テーブルの真ん中に古いリボルバーが置かれた。観客は先ほどまでの喧騒を沈め、誰もが私達に集中しだした。その異様な沈黙は確立六分の一のデスゲームが開始されたことを意味し、私はターキッシュの言葉の意味を考える暇すら与えられず、目の前のゲームに参加することとなった。
最初にリボルバーを持ち上げたのはターキッシュだった。鉄に塗られたガンオイルが不気味に光り何人ものヒトを葬って来た処刑道具であることをおどろおどろしく主張していた。
「耳をすませよ」
小声で言って、ターキッシュが親指をハンマーにかけて起こした。カチリと小さく音がおきた。後は引き金を絞ればいつでも発射できるようになり、彼はゆっくりとそれをこめかみへと持っていく。
彼の息遣いが聞こえ、私の緊張も高まっていく。頭によぎるのは引き金を引いた後の彼の姿だ。
無事に生きている姿ともう一つ、銃弾が飛び出して彼の頭蓋を貫通すると言う嫌な想像だ。そして、その想像で銃を握っているのは彼ではなく私でもあった。どちらかが死ぬ、そのことが頭に離れず、私はターキッシュから視線を外すことが出来ない。
その私の見守る中、彼は引き金にかける人差し指に力を込めた。そしてハンマーが銃弾の雷管に衝撃を送る撃針を叩いた。その瞬間私は短く声を上げて目をつむり、肩をビクリと振るわせた。
銃声が鳴ると思ったが何もならず、リボルバーの銃口から火が噴くこともターキッシュの頭を吹き飛ばすことも無かった。ターキッシュは一発目をクリアしたのだ。彼は深く息を吐き出してリボルバーをテーブルに無造作に置いた。
観客たちが声尾を上げてある者は喜び、ある者は失望の顔を見せた。歓声と罵声の二重奏、お互い相手の死を望んでの感情ゆえに見事に調和していた。

「オマエダ!」
審判が怒鳴り声を上げてリボルバーを渡してきた。ターキッシュが無事だった言う安堵から一転して私の番が来た。ロシアンルーレットだから当然私もあれを手に持って頭にまで持っていかなくてはならない。
汗ばむ手を動かすが鉛でも括り付けられたかのように重く、手が思うように動かない。リボルバーのグリップを握り、持とう舌が汗で滑りテーブルから床へと落としてしまう。審判が舌打ちをして、拾い上げた時腰にホルスターに仕舞われた自動拳銃が見え、私は一瞬ソレを奪い取ろうと思ったが、テーブルがガタリと音を立てたので手を引っ込めた。
ふと視線を移すとターキッシュが私の目を見て小さく首を横に振った。奪うな、妙なマネは止せ、そう目が語っていた。私は彼の無言のサインを受け止めて審判から大人しくリボルバーを受け取った。
ハンマー、撃鉄を起こしてシリンダーが回りだす。カチリと音がして発射準備が完了したリボルバーを頭にピタリとくっつけて、思う。今の私は付いているのか、否かと神に訊いても何も起こらないと知っておきながら、頼るべきものは何なのか、と。
『耳を澄ませ』『思い出せ』『動いたら迷わず、行動するんだ』
ターキッシュの言葉が脳裏で再生されても未だ私は答えを見つけられない。一体アレが何を意味しているのか、そんな言葉にすら縋り付きたい自分が酷く情けない気もしないでもないが、怖いのは事実だ。
人差指を引き金にかけて、私は涙を流した。撃ちたくない、死にたくないと心の叫びを抑えられなくなり、発狂寸前だ。この指先一つの動きで私の命が消えて、無に還ると思うと何もできなくなる。
「嫌だ……嫌だよ」
このまま投げ出したくなった。だけど、それを許さない周りの大人たちは引き金を中々ひかない私に怒声を容赦なく浴びせかけてくる。審判も憮然とした顔で見つめ出し、民兵の一人がライフルを持ったまま近づき、後頭部にライフルを突きつけてくる。

そんな四面楚歌、絶望ばかりがあふれる中、目の前の男が私に一言言った。
「大丈夫だ」
ターキッシュの声が耳に届き、私は彼を見た。彼は審判からの注意も無視して私に言った。
「ベッキー、お前は弱い女じゃないはずだ。信じろ、お前は死なない……ガッツを見せろ」
死なない、私は死なない。その言葉は何故か信じることが出来た。まだ出会って数日程度の男の言葉を私は不思議と飲み込んでいた。言われるがまま、リボルバーを持つ手に力を込めだした。
「そうだ」
呼吸が浅く早くなって、鼓動が早くなっていく。ストレスと緊張から脳から神経作用のある物質でも分泌されているのか、激しい運動もしていないのに体が酸素を求めて止まらない。
「行け！」
そして私はあらぬ限り叫んだ。腹の底から全力で大声を上げて、恐怖などの雑念を封じ込め、引き金に渾身の力を込めて引いた。その僅か一秒にも満たない時間に脳内では様々な光景が映し出されていった。十五年生きて来た私の記憶が一気に流れだし、早送りされたビデオのようにあっという間に過ぎていき、私は人生の終わりを体感した気がした。
だが、人生は終わらなかった。耳に届いたのは小さな金属音だけだった。ハンマーが撃針を叩くだけで終わり、私は死ななかった。強烈なマズルフラッシュも、デカい轟音も響かせることなく終わり、私は生き延びた。
「……やった」
生きた……生き残った！　死への恐怖を無事一跨ぎした気になり、私は大きく安堵の息を掃き出しリボルバーをテーブルに乱暴に投げつけた。その後に再び会場が感情の波に飲まれて大きく揺れた。
これで互いに一回目をクリアしたことになり、お互い顔を見合ってとりあえずの無事を祝うかのようにほほ笑み合った。だが、ターキッ

シュの後ろに民兵がやって来て彼が私に話しかけた事を理由にライフルの銃床で頬を殴りつけた。
ターキッシュは椅子から転げ落ちたが、すぐに立ち上がり民兵を人にらみして椅子に座りなおした。すると、民兵が審判と話し出し、その結果彼のすぐ後ろにライフルを構えて立つことになったらしく、ターキッシュの後ろに民兵が立った。
ターキッシュは血の混じった唾を掃き出し再び私に顔を向けた。その時、口元をわずかに歪ませたのに私は気づいた。
彼の企みが何なのか、疑問に思っていると審判がリボルバーから一旦弾を取り出し適当な場所に居れてシリンダーを戻しカチン、と音を立てた。そして先ほどのようにリボルバーのシリンダーを勢いよく回転させて、ターキッシュの目の前に置いた。
「……？」
小さな疑問が生まれた中、ターキッシュはやはり同じような手順で銃を操作しこめかみに持っていた。シリンダーが回転し再び音がする。ターキッシュの表情は相変わらず。真剣なままで引き金を引き、二度目の幸運が訪れた。
今度は会場から先ほどのような声は上がったが、いささか小さかった。観客の多くはこの勝負を真摯に見守ることを選択したらしい。そのおかげで私はより耳を澄ませることが出来た。
そして、一つの確証のいかない推論が自分の中でできていた。正答かどうかは自分で判断するしかない。もし、それが正しければ彼の言っていた三つの言葉が完ぺきに繋がるのだ。だが、それは当てはめただけに過ぎない。言ってみればパズルのピース、間違って嵌めていることだってあり得る。
私は二回目のルーレットを行うべく、彼からリボルバーを受け取りハンマーを起こした。より正確に、自分の五感を信じて研ぎ澄まし、鋭くされた聴覚を頼りにあらゆる音を聞いた。
そして、その時ある場面を唐突に思い出し彼の言っていることを段々と不透明なまま理解した気がした。もしかしたら、助かる可能性があるかもしれない。私は死なないかもしれない、か細い希望の光が

見えた気がして私はある程度は気を静めることが出来た気がした。
だが、恐怖は依然として残っている。一度目よりかはマシで、ターキッシュが私を見ている中、どうにか平静をギリギリの所で持ちこたえさせているだけで、怖いと思うのは変わらない。
死のゲームはやはり恐ろしい。こうして脳天まで銃を持っていくことすら、ありとあらゆる勇気を必要とするのだから。私は耳を凝らし、その瞬間を待った。そして、二度目の引き金を引くときが訪れ、目をつむって震える人差し指で引き金を絞った。
人差指を動かした後、私は目を開き自分が天国にいないことを認識した。目の前には審判とターキッシュが居て、全身に血が通っているのを感じ取った。心臓の音が激しくなっているのも聞いて自分が生きていることに安堵し、銃をテーブルの上に置いた。
鼓動だけではない、髪の毛が汗で濡れて、毛先から水滴が滴る。それすらも生きている喜びに感じられた。
悪趣味な観客たちがどよめき、どちらも意外としぶといと思ったのか、この結末がどう転ぶのか楽しみで仕方ないらしい。民兵達はこぞって不満な顔を見せて、早い所私達のうちどちらかが血だまりの中に伏せるのを待っている。
三度目のリロードが行われる中、私はターキッシュをもう一度見た。私に向ける視線は何かを見定めようとしているようで、瞳の奥の奥まで覗き込もうとしている。
私はその彼を見て、推論の末に必要な言葉を小さくつぶやいた。
「晩御飯に一人、二人遅れて一時間後に来るらしいですよ」
そう言うと彼は表情筋を一つも動かさずに目を左に動かした後私に向かって言った。
「もてなしておくから安心しろ」
「ハナスナ!」
片言で言われてターキッシュの後頭部を民兵が殴りつけた。そしてターキッシュにセットし終わったリボルバーを放り投げてターキッシュはそれを拾い上げて、ハンマーを起こした。
その一連の動作を見て、聞いて私は先ほどとは別の緊張感も感じつ

つ、その動向をじっくりと見た。ターキッシュはゆっくりと引き金を引いて、生き延びた。
またしても、ハズレ。観客たちは流石に騒がなくなっており、静観に徹していた。熱も少しは冷めたという事だろうか。
無言のまま、私の目の前にリボルバーが置かれた。黒光りする旧式のソレが言葉を放つことは決してない。だが、私はこの無機物が確かに殺意を明確にする瞬間があると知ることが出来た。
きっと普通の戦場では知ることは無いだろう小さな声を私は確かに聞いた。そして、その声が聞こえた時、三つめの言葉の時だという事だ。
そして、その時は来た。リボルバーを手に握りしめ、撃鉄を起こす時、その声が確かに聞こえた。聞いてしまった以上、私の行動は一つだけだ。
そうして、やって来た時に立ち、私はターキッシュに感謝をしていた。耳を澄まし、思いだし、後は最後の言葉に従うだけとなった。
ここに来て感じたのは恐怖ではなかった。確かな〔生きる〕と言う感覚、そして笛吹としてもう一度立ち上がれる機会に対する喜びだった。
「ありがとう……先輩」
私はリボルバーを頭に持っていく。引き金に指をかけて、視線をターキッシュからズラした。今度は目をつぶらず、そして鼻を利かせて後ろに意識を回して気配を感じ取る。思い出すのはターキッシュが私に初めて殺しを見せた夜の事。
あの日、彼は気配を感じ取って小口径のリボルバーで敵を仕留めた。銃声と叫び声、そしてもう一つシリンダーの回る音。それらが私の中で蘇り、この生死を駆けたギャンブルの中で諦めないように言ってくれた彼に感謝の言葉を述べた。
そして、私の視線の先にいるターキッシュの後ろの民兵に目をやり、私は大声で叫んだ
「今！」
その瞬間私達二人とも弾かれたかのように動き出した。こめかみ

に当てていた銃口を民兵に向けて引き金を引くと、銃弾が銃口から飛び出し、銃口から火を吹いた。
弾丸は寸分違わず、民兵の額を撃ち抜き絶命させた。シリンダーに入った銃弾が発射位置に来た時、僅かに金属音が違うことに気付き、それが狙いだと言う私の推論は正しかった。
スローモーションカメラのように周りが緩慢に動く中、私はリボルバーを捨て、審判のホルスターから拳銃を引き抜きしスライドを歯で引いて初弾を装填。ターキッシュは倒れる民兵からサルトライフルを奪い取り、審判をまず射殺した。
お互いに射線の邪魔にならないように体を捻り、互いの後ろの敵を奪い取った得物で射撃した。僅か三秒フラット、極限状態で示し合った信頼をもとに私達は完ぺきなコンビネーションを成功させた。
晩御飯、六時の時刻を指す言葉から彼は正確に私の意志を汲み、体を射線から退かせた彼のおかげだった。
互いの後ろで見張っていた連中が倒れるのを確認し、私達は賭けに勝った。運で勝ち取ったものではない、最期まで諦めずにいられた私達二人の想いが届いたのだ。運命を勝ち取ったのだ。
一瞬の殺戮劇の後、会場は大混乱に陥った。起こらないはずの事が起こってしまい、観客は騒然、民兵たちも泡を食ったかのように飛び出てきている。
「……よくやった」
ターキッシュの短い褒め言葉の後、私は彼に問うた。
「でも、これからどうするんです?!」
「周りは敵だらけ、お互い残弾が少ない……どうしたい?」
質問に質問を返され面食らうも私は答えた。
「助けたい人と、殺したい奴がいる」
「奇遇だな。俺も同じだ。だがその前に一つ言う」
「何です?」
ターキッシュは、周りに集まって来た民兵達を人にらみして言った。経験者のみが語れる重い一言だった。
「染まりきるな。自分が笛吹だって事、大事なことだ。忘れるなよ」

その言葉の後、民兵達が銃を構えて発砲しようとした。万事休す、これにて人生終了という、その時、救いの手が差し伸べられた。榴弾が飛来して彼らの一団を吹き飛ばした。赤い爆炎が幾重にも重なり、破片と爆圧で、大勢の悪党を細切れに変えていく。

血のスコールが降り出し、ついでにレアの焼き加減の反生肉の紫外が落ちる次の瞬間には猛烈な制圧射撃による弾丸が雨あられと悪党どもの頭上に降り注ぎ、退路が開いた。

援軍だ。なんとも素晴らしい言葉の響きに酔いしれたい気分になったが、すぐに顔を引き締めて走り出すターキッシュの後に続く。

「俺と来い！　ベッキー！」

その叫びに呼応し私は大声で返した。

「ハイ！」

ライフルを握りしめて走り出す。その時の私には今までなかった物が揃っていた。銃に力、機会に先輩。全てが揃った時私は目をぎらつかせた。

この時をどれ程待ったことか。

ペイバックタイムだ。

第10話

南

アリーナの一番高い場所、櫓のような場所で私は引き金を絞る。傍らに置かれた分隊支援火器という種別の機関銃を持ち上げてバイポッドを展開し、断続的にアリーナに群がる民兵、観客構わずに4・85mm弾の雨を浴びせ続ける。銃の左側面から飛び出る空薬きょうは勢いよく宙を舞い、毎分950発の連射速度によってコンクリートむき出しの床を埋め尽くし、金色の煌びやかな物へと変化させる。

まるで黄金の川だと思った。排莢口から飛び出る薬莢が既に転がっている空薬きょうを押しのけて流れていくのだ。

横目で綺麗だな、と思いながらもメインである目の前の光景と音に私は心を躍らせる。訳も分からずに死んでいく民兵、我先に逃げようとして転び、後から来た者に踏みつぶされ、頭上から降り注ぐ弾丸を体に受けてビクリ、と震わせて死んでいく観客たち。

先ほどまでの歓声も罵倒も最早なく、自分たちが安全な場所で死に行くものを見て楽しんでいたのが、一転して泣いて喚いて足を動かしている。歓声と罵倒、悪意の二重奏は今や、負の感情のオーケストラへと変わったのだ。

「歌って！　踊れ！　人生はリズムよく！」

そして心地の良い悲鳴を銃声と爆音がドラムやパーカッションのように彩るのだ。機関銃を一旦置いて、ポンプアクション式のグレネードランチャーへと持ち替え、群衆へと撃ちこみ、榴弾がダース単位の悪党たちを吹き飛ばした。強烈な爆音とともに破片と肉片が飛び散り、赤いサイケデリックなアートが形成されたのに体を震わせ、頬を赤くする。

人生とはリズムだと思う。生きているだけの人生はあまりにもったいない。どうせなら地肉躍る冒険や暴力、過激な恋と彩を持たないと、何のための一生か分からなくなる。誕生日にホルスターに突っ込んでいるマグナムオートをもらった日から私の人生は踊るようだ。

必要なのはリズム、単調な生き方は要らない。奪い奪っての非日常

の中で踊り狂ってこそ、笛吹だと私は思う。空薬きょうの見せる姿こそリズムだ。内部の火薬を燃焼させ、爆発のエネルギーを弾丸に伝え、空になった薬きょうが飛び出て、最期に甲高い音を鳴らして転がる。

一瞬、一瞬に命を燃やして最後は呆気なく存在意義を無くす。そんな生き方を求めて入ったのが私だ。私の笛吹きだ。

『取り過ぎはよくないな。ミナミ』

ナノマシンを介しての通信が起きて、その後に銃声が響いた。すると私の後ろで誰かが倒れた音がした。振り向くと頭蓋骨の半分を吹き飛ばされた民兵だった。

『後ろは任せなさい。君は前の得物を狩ればいい』

『ありがとう！　おじいちゃん！』

先台をスライドさせて空薬きょうを排出、ショットガンを大きくしたような外見のグレネードランチャーを再びアリーナの方へと向けると、民兵達の一団が反撃を開始しだした。アサルトライフル、軽機関銃、サブマシンガンとフルオートで制圧射撃を加えて来た。人数は七人程で私がいた櫓を穴だらけにし、木片が辺り一面に散らばる。

「ひゅう！」

櫓から飛び出して、ランチャーを抱えて走り出す。飛び出る半秒前にＲＰＧ、対戦車ロケットランチャーが放たれたらしく、元居た場所は成形炸薬弾によって破壊された。爆風が私を押し上げて、ジャンプした私の軽い体を押し上げた。

宙高く舞い上がり、クルリと回る私は安定しない空中でランチャーを再装填し、着地してから発射し、弾切れになったソレを捨てて、マグマムオートに持ち替える。

榴弾は大きく逸れて二人しか倒せなかったが、すぐにコルトお爺ちゃんの狙撃が行われて、ＲＰＧ持ちを仕留め、続く二射目で二人の民兵を同時に射殺した。胸と腹を撃ち抜かれた二人が血だまりの中に伏せ、倒れるのを見てゾクリと心が打ち震えた。

かつてなかった体験に私の頭は沸騰寸前になった。楽しさとアドレナリンの過剰分泌で脳が焼き切れるのではないか、とすら思う。こ

の楽しさこそが私の求めていたリズムだ。高鳴る心臓がビートを刻みだして自然と笑いがこみあげてくる。
『これが笛吹きなんだね！　狩って狩られて　走りまくって！　最高！』
『そうだ。これが仕事の楽しみ方だ。だが、仕事は楽しむ者ではないと考える者もいる』
『ベッキーちゃん達の事だね？』
　引き抜いたマグナムオートを四連射。派手なマズルフラッシュと金属音を含んだ銃声を響かせて、敵兵二人の胸をボディアーマーごと貫通し、天国への階段へとご招待する。硝煙の甘い香りが極上のスイーツにも思える香りが一層興奮を増幅させたが、どこにでも空気の読まない奴はいるもので、残った一人が恐慌状態へとなり、ライフルを捨て背を向けて逃げ出した。
　非常に興が冷める一瞬だったが、そこを面白くするのが私の相方の面目躍如と言ったところだろう。
　無様に走っていた彼であったが、死体に足を取られて転んだところをコルトお爺ちゃんのライフルが捉え、発砲。放たれた７．７ｍｍ×５６弾は寸分の狂いなく後頭部を貫いた。
　哀れな死にざまを晒して倒れる彼の姿はコメディだった。
『そうだ。ターキッシュもそうだが、二人は子の笛吹のお題目を本気で成し遂げる気でいる。誰もが皮肉そうに語る子供の救出を。そして、そのために自らを焼くことを辞さないし、そうあるべきだと考えている』
『それもリズムある人生だね』
『そうだとも』
　コルト爺ちゃんは愉快そうな声で肯定した。私達とベッキーちゃん達は目的が違うだけで、敵対するようなものは無い。むしろ、彼らの生き方もまたリズムある人生と言え、私にとってはそれも肯定されるべきだと思う。
　実際、見ていると本当に彼らはリズムある人生を生きていると思う。村人を助けたい一心で単身突っ込みに行くベッキーちゃんに、そ

の彼女に何かを見出して彼女と子供のどっちも救う事を諦めないがために、わざわざロシアンルーレットをしに行くターキッシュ先輩。
「何だ、ベッキーちゃんも凄いじゃん」
ひょっとしたら私達以上にリズムに富んでるかもしれない。彼らのすることだってスリルたっぷりだ。その上で目的が達成されたのなら、その達成感はきっと天を突き破るほどの勢いだろう。と言っても私がマネできるわけはない。私はコッチの方が性分に合っているからだ。
今こうして頭上に幾重もの弾幕が張らされているのを覆し、悪党たちが最期にどんな顔をするのか見るほうが私は好きだ。同じ組織に居るからと言って皆が皆同じ方向を向く必要なんてどこにもない。私達は楽しみ、彼らは戦う。
「だから、我々で。彼らは彼らで棲み分けされるべきなのだ。だから、私はターキッシュにこっち側だと想って欲しくはなかった」
コルトお爺ちゃんはダストコートをはためかせ、私が姿勢を低くしている観客席の間に降り立った。私の手を握ってダンスの如くクルリと回させると目の前に三人の民兵がいて彼の前には四人いた。
フェイス・トゥ・フェイス。直に顔を合わせて私とお爺ちゃんは得物であるマグナムを向けて速射した。４５４カスールと４４マグナムの銃声が重なり、リボルバーを持つ老兵とオートマチックの新米の二人で背中合わせになって撃った。聞こえた音の数は四つ。老兵の放つリボルバーの銃声は早すぎて二発で一つの銃声を放っていたことに私は口笛を吹いた。
西部劇の一幕のように、静粛が訪れ五人の敵兵が倒れた。
大穴を胸に開けた民兵の顔は信じられない、と言った顔でどこまでも間抜けなモノだった。背中を預けた老人はリボルバーを再装填し、六発の空薬きょうを床に落としながら語った。
「私達こそが悪党だ。ターキッシュにもベッキーにも今のままでいて欲しい、その方がより自分の性を認識できる。その方が良いと思わんかね？」
「悪い人だね、お爺ちゃん。だから助けるの？」

「それだけではないがね」
シリンダーを戻したお爺ちゃんは気配を察知して今までのような腰だめからの射撃ではなく、照準器を覗いて二発撃ち、ボックス席だったであろう席に身をひそめ飛来する高速弾を回避する。
私も姿勢を低くして遮蔽物の陰から適当にマグナム弾を乱射し、マガジンを交換する。マグキャッチボタンを押して、新しいマガジンを装填。何度となくやって来たアクションに狂いはない。
『いいかね？　ミナミ。笛吹に必要なのは二つ。救う者と殺す者だ。善人と悪党を同居させて初めてなるものだ。彼らはより善人であろうとする。なら、悪党な私達が何をすべきか』
念話で話しながらコルトお爺ちゃんは懐からスイッチの類を取り出して、不敵に笑った。私も彼が何をするつもりなのかを瞬時に理解し、二カッと笑った。
『好きなだけやって、彼らを援護することにある訳だ』
安全装置解除も含めて二回スイッチを押す。すると、アリーナ、いや民兵たちの拠点のあちこちから爆発が立て続けに起き、地面が大きく揺れた。あらゆる場所からプラスチック爆弾とガソリンによって作られた地獄の業火が噴出し、大勢が悲鳴を上げる。
ターキッシュのロシアンルーレットにはベッキーちゃんを救う以外にもう一つ目的があった。それは陽動。彼が注目を浴びている中、私達は本物のショーを提供すべく準備していた。
耳と心くすぐる心地の良い爆音。鼻に香る嫌なガソリン臭ですら上等な薬物の如きエクスタシーを運んでくれる。これが笛吹。私の職業だ。
「何はともあれ、人生どれだけ踊れるかが肝心なわけだ。私達も彼らもな」
お爺ちゃんはそう言って気持ちよさそうに大きく笑った。

犬

アリーナから抜け出し、私は駆ける。扉を蹴り破ってターキッシュ

が待ち伏せしていた民兵一人を殴り倒し、腰に差してあった銃剣を奪い取って喉元に突き立てる。
「ベッキー!」
悲鳴一言すらあげさせずに仕留め、ターキッシュは殺した男からアサルトライフルを剥ぎ取り、私に投げ渡す。受け取ったライフルは今まで見て来た中ではマシな外見で錆びや腐食などは見られなかった。
だが、意外な見た目に驚いている暇はない。目の前、僅かな距離に民兵たちが机やテーブルをごった返しにしてバリケードや遮蔽物を作り、そこからひたすら銃弾を浴びせかけてくるのだ。
ターキッシュと私はお互い、左右に分かれた。ターキッシュは単発で四回ほど撃ちこんだ後にコンクリートの出っ張りの陰に飛び込み、私はフルオートで連中の遮蔽物を集中的に射撃し、脚力をフルに活用しその上を飛び越えた。
打算もなにもない、ただ純粋な殺意に導かれた私は犬のように飛び跳ねた。空気中で火を吐くアサルトライフルの烈火の如き鉛の嵐をかき分けて行く。
死ね、死ね!と叫ぶ心に抗う必要などない。一片の理性を残して身を狂気に染め上げるのだ!
宙を飛び下を見れば、民兵たちが呆気にとられており何とも間抜けな顔を晒していた。でも容赦することはできない。着地と同時に二人を腰だめ射撃で薙ぎ払い。残る三人が一斉にこちらの方を見て立ち上がった。
男が口から罵声をだす前に銃声が二つ鳴った。立ち上がったのが運のツキだ。ターキッシュは粗悪なライフルを再装填し終わっており無防備な後頭部をさらけ出した二人が脳髄を撃ち抜かれて倒れる。
血と臓物の匂い、ついでに香るアンモニアの臭気が刺激し、相手には恐怖を私には笑みをもたらした。
残った一人は腰に吊り下げた拳銃を引き抜くことなく、極めて原始的な殴ると言う方法で私を攻撃する。ボディアーマーを着込んでおり非力な女なら殴り合いで勝てると思ったのだろう。
「嘗めてんじゃねぇ!」

私は振り上げられた拳を躱し、腕に噛みついた。歯に伝わる肉の感触と血の味が口いっぱいに広がり、骨まで達した。男が大絶叫する中、ライフルを短く持って憎き鬼畜外道の体に銃口を押し付ける。

引き金を引き、マガジン内に残った残弾を一気に吐き出した。フルオート射撃の、それも４．８５ｍｍより大口径のライフルの腕に伝わる激烈な反動は普通ならコントロールすら不可能だが、この距離なら別だ。超至近距離から放たれた弾丸の前に旧式のボディアーマーは耐えきれるわけもなくアラミド繊維を切り裂き、男に腹いっぱい鉛玉をご馳走した。

男は満腹になって満足してしまったのか、腹を抱えて倒れこんだ。私は口を開いて真っ赤な唾を掃き出し、ついでにその死体に向かって毒も吐いた。

「お返しだよ」

地獄で焼かれるなり煮られるなりされてしまえ。この世が続く限り、あの世で今まで他人に味わせて来た地獄の十倍をその身に受けるといい。それだけの事を貴様たちはしたのだ。

息を落ち着かせる前にターキッシュがやって来て、私の肩に手をやる。

「荒っぽいがよくやった！　だが、感慨にふけっている時間はない。子供たちは？」

「この先の通路を奥へ行けば、大勢いるはずです！」

「なら急ぐぞ！」

ターキッシュは民兵から布製の簡易なチェストリグを剥ぎ取り私に寄越した。中にはフル装填されたマガジンが四本詰まっている。

「俺の背中はお前に預ける。持っていけ」

それだけ言って走るように背を軽くたたいた。もう一つ渡してきたのは手榴弾と拳銃だった。ただそれだけのものだったが、嬉しかった。私に背中を預ける、と言う言葉は大きかった。

あのロシアンルーレットが私と彼を一気に近づけさせた。無論恋愛での話ではない、パートナーとしての話だ。そして、ここに来て同

じ目的のために私も彼も動いているという事実が強く認識でき、彼が私の理想とする笛吹であり私に信頼を寄せてくれたのだ。
今の私には銃も希望もあって、その上心強い先輩だっている。少し前とは違う状況に自然と頬が緩み、同時に身を引き締めた。この機会を逃してはならない、この男と共に、絶対に囚われの子供たちを救わなくては、と。
そのために、目の前に群がる悪党を倒し、薙ぎ払い、撃たなくてはならない。そうした思考のせいか、精神が研ぎ澄まされ、体を軽くなる。私の五感が鋭さをまし、無意識では感じ得ない匂いと音を聞き分けていく。
本来は意識的に利かせないと常人より優れている程度の感覚がリミッターを外され、今の私にはより多くの事がわかる。
鼻につんざく、火薬と血の汚い匂い。その場所すら今の私には手に取るようで、走った向う側の薄い木製の壁の裏に排除すべき存在を感じ取った私は足を止めて片膝をつき、若干地面を滑りながら、腰だめで銃の上部を押さえつけての連続射撃を浴びせかける。
１マガジン、およそ３０発の弾丸を撃ちだし、銃口が火を吐いて視界を激しく遮った。鋭敏化された聴覚に轟音が鳴り響く。だが、不思議と奴らの悲鳴が聞こえ、私はすぐに立ち上がって走る。
その横で走るターキッシュの顔は驚きに満ちていた。私の予想通り待ち伏せしていた二人の死体が目に入った。様を見ろ、と心の底から罵った。今日死ぬと思わなかった中で死んだ気分はどうだ、とも。
だが、ターキッシュの言った通り感慨にふける暇などない。足音、３人だと感じ取ったときにはターキッシュが動いていた。彼はライフルを単発で３度撃って廊下の曲がり角にいる３人が顔を出せないようにし、次の瞬間にはピンを抜いた手榴弾を投げていた。
２秒後に炸裂し、爆風で飛んで来た敵兵が目の前に転がったが、彼は顔すら合わせずに３発撃ちこんで止めを刺し、曲がり角に来たところで足を止めた
「ステイ！」
声が聞こえた後に、金属音が小さくその先から聞こえた。銃のコッ

キング音だ。私はすぐさま止まり、激烈な射撃の渦中に入らずに済んだ。
銃弾が跳ね、霧状になったコンクリート片が頭上から降ってくる。とめどない銃声とわずかに聞こえる男たちの怒号に罵倒。それを聞き分け、敵が私達の後ろから迫っているのを奇跡的に聞き取れた。
「後ろから来ます！　どうすれば?!」
「簡単な話だ！　ついて来い！」
ターキッシュは2個目の手榴弾を抜き、向う側に投げつけた。敵はまたしても簡易なバリケードを構築しており、放られた手榴弾はバリケードに阻まれ炸裂。派手な木片と煙が立ち上がり、敵が怯んだ。
「チャージ！」
突撃の号令と共に体を稲妻の如く走らせた。バリケードに向かって全力疾走しながらデタラメにライフルを乱射した。煤で汚れた空薬きょうを勢いよく排出する度に弾丸の罵が万物を食いちぎろうと銃口の先に襲い掛かっていく。まるで音速の、ヒトの目で刃見えない小さな肉食動物だ。それをアイツら一人残らず叩き込んでやった。叫ばない彼と反対に私は吼え、私と彼は二人で勢いを殺さぬまま、バリケードを蹴り破った。
手榴弾とライフル弾でもろくなったバリケードに私達を止めることなどできなかった。私は弾切れになったライフルをかなぐり捨てて、自動拳銃を引き抜き、民兵の側頭部に銃口を押し当てて一人を射殺し、仰向けに倒れていた二人目にも同じ目を味わせようと銃口を向け、引き金を引いた。だが、粗悪な整備のせいか弾詰まりを起こし発射できなかった
「何よ?!」
敵はチャンスとばかりに私に飛びかかって来た。壁に押し付けられ、拳銃を手から落としてしまう。男は私の細い首に掴みかかって絞めにかかって来た。呼吸が出来ずに苦悶の声を出し目を閉じかけたが、私の精神がソレを許さなかった。
「のしかかってんじゃねえ！　キモイんだよ！」
高ぶった心が働きかけ、目を開くと男のベルトに差された銃剣を奪

い取り、顎を突き上げた。返り血が飛び散り白目をむいた男が私の上に倒れて身動きが取れなくなった。しかも目に血が入り視界が封じられてしまい、その間隙が出来たことに慌てて私は血を拭き取り、視界をクリアにした。

３人目が目の前に見えてやられる！と直感を覚えたが、３人目はこちらに銃口を向ける前にターキッシュに頸動脈を切られ、喉笛から空気が漏れだして奇妙な笛音が鳴ったのを最後に絶命した。

「背中は預けるって言ったろう?!　立ちな　ベッキー！」

私の上の死体を蹴りあげ、踵で私がかなぐり捨てたライフルを目の前に差し出す。獲物を拾い上げている間にターキッシュは後背を衝こうとした敵兵の排除に移っており、ブーニーハットの下に見せる瞳はすでに敵兵を捉え、悪党狩りをしていた。

その猛禽類のような目に睨まれた連中はなす術もなく、私がターキッシュの援護ポジションにつくころには既に事を終えていた。

「目的地までは?」

ターキッシュの問いを聞き、私は廊下の様子、歩いてきた歩数などを思い出して、すぐ近くであることを理解し、人差指でその方向を示して答えた。

「もうすぐです！　後はｒｕｎ　ａｎｄ　ｒｕｎ　！」

「走って、走って、走り抜けってか!?　分かりやすくてイイな！」

しかし、此処まで来て弾薬はそこを尽きかけているのに気付いた。そして民兵どもの弾薬を漁ろうにも、明らかに規格が違うものばかりで舌打ちをした。しかも、それらを使おうにもほとんど在庫と言う在庫が無い状態だった。

「弾が……！」

「これを使え」

ターキッシュはそう言って、ナイフを手渡してきた。刃渡りのすらりと長い頑丈そうな一品だった。

「お前の言う通りなら、この廊下の先だ。だが、もっと大勢の敵がいるに違いねえ。そこで、だ。初心に戻ってもらうぜ」

「初心?」

「簡単だ。答えはお前の俺との嫌な思い出第一号、訓練だよ」
私は瞬時に想いだし、何をすべきかを理解した。なら、私はこれに徹するべきだと判断し、ターキッシュに自分のライフルを預けた。
「背中……任せてもいいんですよね？」
「生意気言うな新米。当たり前だろうが」
戦いの場で私達は微笑み合った。場違いな行為だったが、私達はお互いを信用するという意思表示を表情で示し合った。突撃すべき廊下の先、大きな金属製の扉があって、半開きになっている。
廊下の床には新品同様の弾薬が転がっており、大慌てで入り込んだのだ、とすぐにわかった。それにひときわ大きな足跡、プレジデントもいることは確実だろう。他に何人の敵がいる？　子供たちは？
そんな疑問をよそにターキッシュは一人死体から手榴弾を集めて、作業している。
彼の目には絶対の意志が宿っていた。最初合った時からは考えられない、その姿は私を勇気づけるには十分すぎた。
この人とならやれる。あの悪党どもに相応の報いを受けさせて、地獄から大勢を解放する、私の夢、願いが叶えられる。やはり、この人も笛吹なのだ。
「俺が前に出る。お前は飛んで跳ねて、斬りつけろ」
「了解！」
ターキッシュの後ろに付き、彼が駆けだすのを待つ。ほんの僅かな静かな時間、大きな背中を見つめて思うのは、彼と共有している一つの正義、笛吹としての正義だ。心身を一体化させて、その時を待ち、ナイフの柄を握りなおす事三回、彼は足に力を込め、駆けだした。
走って、走って、扉の向こう側から聞こえるモーター音に息遣いを耳にしても、脚を止めることはしない。相手が重機関銃を持っていれば、逃げるか？　いや、たとえ相手がミサイルだろうと不死の化け物だろうと最早私達を止めることなんて出来やしない。
此処まで来て引きさがるのは私としては、いや笛吹として最高にナンセンスだ。ようやく手に入れた反抗と救いの機会、掴んでこそ私は笛吹になれる。そう、目の前を走る男のような。

そして、彼は最後の扉をけ破った。視界に広がるは三十は数える民兵の集団と二機のプレジデント。丸みを帯びた機械人形が重機関銃をコチラに向け、引き金を絞ろうとした時、ターキッシュは何を思ったか、ブーニーハットをプレジデントの片方に投げつけた。

ブーニーハットは見事にプレジデントの蜘蛛を思わせるカメラアイを覆った。小賢しいと言わんばかりにハットをどけたプレジデントの足もとには、針金で纏められた手榴弾の束があった。

「ヒトを吹っ飛ばした礼だ。　とっておけ」

収束手榴弾の激烈な爆圧は隣り合っていた二機のプレジデントがモロに受ける羽目になった。檻が所せましと詰められた場所で密接状態であった1機は下半身を吹き飛ばされバランスを崩して重機関銃の引き金を引いたまま倒れてしまいもう一機に大口径弾を浴びせる結果となった。

限定空間内では大きすぎるボデイがあだとなり、本来なら躱せたかもしれない攻撃もかわせない。そこへターキッシュは広い場所ではないこの場で最大の効果を発揮する手りゅう弾を使ったという訳だ。

更にそこへ、建物全体が大きく揺れた。特大クラスの爆発が起こったらしく、頼りのパワードスーツも失って、挙句大規模な爆発の轟音が鳴り出したので、悪党たちは揃いもそって動揺し、視線を私達から離した。

「Ｇｏ！」

「ワウ！」

ターキッシュがフルオートで射撃し、数名をなぎ倒した時、合図がはなたれた。私は吠えて左翼の集団に飛びかかった。一人目の喉を切り裂き、逆手にひっくり返して、左足を軸にクルット回り、二人目の心臓に突き立てる。

すぐさま引き抜いて、三人目、四人目と懐に飛び込んでひたすら、切り裂き続ける。集団に入り込んだことで射線に味方が入り撃つことにためらっている悪党どもの喉や利き手を白刃で真っ赤に染めてやる。

悪党への憎悪と笛吹としての仕事を学んだ私に躊躇いはない。救

うにはこの地獄の悪鬼の死が必要だ。殺しは悪だけど、ならば目の前のこいつらのようにヒトの命を玩具にしたものに一体何のバツを加えてやろうと言うのか。

また、そんな彼らから子供を救うのにこれ以外の方法があるというのか。私には少なくともこれ以外はないと感じられた。だが、忘れてはいけない。私は笛吹、殺戮を楽しんではならない。コレは解放で、私は誰かの代わりに泥を被って、地獄を打ち払うのだ。

「お返し！」

鮮血を浴びても目を閉じない。鋭敏になった五感が伝える奴らの匂い、音を感じ取って、掴みかかる誰かを長い脚で蹴り飛ばし、もう一人のナイフを捌き、前のめりになったソイツの後ろ首に全体重をかけて白刃を押し込んだ。

「お返しだ！」

七人を切り殺したところでナイフが折れた。舌打ちしながら死体から自動拳銃を抜き放ち、左右両方の手に握ったそれらをマチェットを振りかざした八人目に全弾を撃ちこむ。

撃つたびにスライドが前後し、４５口径と刻印されたハンドガンの銃口から次々と銃弾が飛び出し、男の胴体をずたずたに引き裂いた。殺すと言う明確な意思を込めた弾丸の前にはどんなタフガイも無力だ。突き抜けた弾丸が彼の後ろのご同類にも命中し、死んだご同類が引き金を引いたまま死んだことで更に三人が血だまりの中に倒れる羽目になった。

「今まで味わせて来た地獄を見て、くたばれえ！」

響き渡る銃声に悲鳴、命乞いすら聞こえる中、私は最後まで引き金を引き続けた。容赦するな、という心の声に従って撃って、撃って撃ちまくった。

閃光と衝撃、血しぶきに悲鳴、彼らがこの世界に強いて来た全てをこの場で再現し、いや十倍に拡大して返して、ありとあらゆる破壊を私とターキッシュは全力で行った。

銃口から放つマズルファイアが発する光の前に、極悪非道を尽くした男はなす術もない。ちょうど吸血鬼が日光に照らされて灰になる

のと同じように。彼らに救いなど必要ない。弾さえ続けばこのまま撃ちつづけてやる。永遠とも思えたシューティング、スプラッターショーは唐突に終わりを告げた。不満を抱いても銃弾が出てこない。弾が切れたのだ。

ホールドオープンして陽炎吐き出す銃口の先に倒れる悪党どもを見る。これでも、私は慈悲深い方だ。撃たれて死ぬだけで済むのだ、ありがたいと思え。

銃をかなぐり捨てて、私は気づいた。目の前から悪党が消えた時、その場所に静けさが帰って来た。銃声、悲鳴どころか息遣い以外何も聞こえなかった。私はそこでハッとなって周りを見渡した。

見れば、私以外にターキッシュ以外立っている者はおらず、死体と血の海の中で私達だけが立っていた。

肩を激しく動かして呼吸し、私達は互いに見合った。

「……終わった？」

私が問うと彼は答えた。

「……多分な」

殆ど全身を赤く染めた私達は互いに見合った。酷い姿だった。匂いも今更になって気付いて、私は鼻を押さえつけた。そして、体が急に震え出してきたのを感じへたり込みそうになった。

「おっと」

その前にターキッシュが駆け寄って私の体を支えてくれた。

「大丈夫か？」

「……ええ、何とか」

緊張が解けたせいなのか、嘘のように体から力が抜けかけた。だが、ターキッシュ

のおかげでそうならず、どうにか落ち着きを取り戻すことが出来た。強い疲労感こそ残っているが立てるだけましだった。

「念には念を、だ。まだ気を抜くな」

「……ありがとう……ございます」

だが、私達が手を取り合っていた時だった。ターキッシュの背後から誰かが鈍く光るマチェットを振りかざして彼の不意を衝いて、振り

上げた。
「ターキッシュ！」
その男は将軍だった。山刀を両手に持ち、振り返ったターキッシュの脳天目がけて振り下ろしたのだ。ターキッシュが冷静にハンドガンを構えた中で私は反射的に彼ら二人の間に入った。
何故か、それは将軍と言う男に対しては彼ではなく私が自分の手でケリをつけたいと思ったからだ。
コイツは私の獲物だ、と動物じみた本能と今までの分の復讐が私を突き動かし、私はターキッシュに仕留めさせることを拒んだのだ。
「馬鹿！」
ターキッシュが叫んだのも遅く私の顔にマチェットは振るわれた。将軍がニタリと笑った。仕留めた、と一人の笛吹をこの世から排除し、愉悦に笑っていた。
事実、私の足もとに数滴の血液もたれ、私が声をあげないのも手伝ってそう思っていたのだろう。
ターキッシュの声が聞こえ、彼が本気で私が死んだと思っていると分かった、それほどまでに彼は狼狽えていた。脳に痛みが伝わり、私は目線を上にあげた。口の端から滴る血にも構わず、私は叫んだ。
「いひゃいんだよ！」
拳を振り上げて、将軍を吹き飛ばす。もんどりをうって倒れる将軍を見て立ち上がり、加えていたマチェットを吐き出す。やかましい金属音を鳴らしたそれには見事な歯型が付いていた。
「喧嘩で歯はこう使うんだよ。今まで散々やってくれたよね、アンタ」
私は一歩ずつ彼に近づき威圧する。
「地獄を売り物にするって？　そりゃ結構だろうけど。地獄を売られて、今のアンタはどんな気分なわけ？」
「やめろ！」
手を前に出して将軍は威厳もない声を吐き出してきた。大悪党もこうなっては唯のヒトだ。
「俺の後ろに誰がいるかぐらいわかんだろ?!　俺を殺せば、お前らだって死ぬ！　ただ暴れるだけのお前ら何で鼻息一つで吹っ飛ぶん

だぞ！：
命乞いをして、どうにか助かろうとする、醜すぎて呆れてしまう。私はその姿を鼻で笑い、睨み続けた。私の態度を見て、命乞いも無駄だと感じたのか、将軍は背を向けて走り出した。早い話が逃げたのだ。
無様なその後ろ姿を見て、私はついに堪忍袋の緒が切れた。もう一つの笛吹の在り方を思いだし、近くに倒れていた死骸からライフルを奪い構えた。
あまりに無防備な、逃げるだけの男。だが、その男は地獄を作って、生血を啜っていた。あまつさえ私の血すら吸おうとした悪党だ。そう、相手は悪党なのだ。なれば、どうするか。
良心に任せて彼が逃げおおせるのを見守るか？　悪党にも一片の慈悲を施せば、きっと彼は後に赦しの道を見つけて真人間になることを期待する、そんな選択肢だってあっただろう。
だが、そんな三流以下の安物映画のエンデイングなどクソくらえ、と声を大にして否定してやる。子供の頭に銃を突きつけ、あるいはとめどない獣欲のはけ口にしてきた獣畜生にかける慈悲など中指を立てて否定する。
彼に与えるべきは慈悲ではない、まして救いでもない。ただ一言のお似合いの言葉、報いをあてるべきだ。
そして、その答えはターキッシュの教えにある。
『悪党の背中を撃て』
一発。それだけで事足りた。銃弾が奴の頭を貫き二度と起き上がれない、ただの骸にしてやった。ゆっくりと流れる時間の中、私は確かに仕留めた。撃てなかった私はもうここにはいない。
一撃必殺。私は一人の笛吹として、奴の息の根を完全に封じ込め職務を果たした。

第11話

高級樫木をふんだんに使われたデスクに、高価なのだろうが、ちっとも価値が意味不明な壺や落書きじみた絵画、果ては化石もいい所のフリントロックピストルとサーベルが掛けられ、人間様の文化の豊かさとやらを主張しまくる部屋に俺とコルト爺さん、それに我らが直属の上司ボルドーが雁首そろえて、立っていた。

俺とコルト爺さんは戻ってきて早々呼び出され戦闘服のままで、ボルドーは粗暴な外見に似つかわしくない青いＹシャツのスーツ姿だ。デスクに座るフッカー・ベネリは俺達を一望して鼻を鳴らした。

「ああ、任務ご苦労。君たちの活躍で我々は２４５人の子供を受け入れることに成功した。最近の地底人にはない熱心さで私は感動を禁じ得ないよ。実によくやったと言うべきかな？」

「どうも」

粘着質な口調に俺はさして敬意も込めずに答えた。爺さんは小さく笑ったが、人間様には受けはよろしくなかったようで、一瞬憮然とした表情になった。

俺としては何故この不逞な神様に敬意やら尊敬やらを払わなくてはならないのか、と言うのが本心なので、媚びる気などさらさらない。尻で椅子を磨くだけの仕事をしているだけならまだしも、要らんことを考え着く馬鹿には特に念入りに軽蔑の視線を送る。

「だが、時には物事をゆっくりと考える必要がある。考えなしにがむしゃらに働くことは無い」

「さっきと言っていることが反対ですが？」

「私は優秀な君たちを思って言っているのだよ。職場と金を君たちに用意する私が言うのだ。素直に受け取っておきたまえ」

癪に障る言い方だった。要するに余計なマネはほどほどにしておけ、と言いたいのだろう。あの世界で見たパワードスーツ、プレジデントはこの男が流したと見て間違いない。金と職場を用意、なるほど意図的に地獄を作って、子供を採る畑にしたと言う訳だ。

笛吹はあくまで紛争地での子供の保護がお題目だ。彼らには不都

合な事だが子供という物は黙っていれば土から生えてくるようなものではない。さらに不幸な子供を厳選しなくてはならない、と来れば効率としては最悪の域だ。

現在のアンダーハイブの人口が7億になっても、いまだ労働力確保に明け暮れる彼らにとっては一人でも多くなくては困ると思い込む彼らは余程無茶をしててでも安定的な労働力の確保がしたいらしい。過去の種殺しがもたらした著しい生産力低下が余程トラウマになっていると見える。

地下で勝手に子作りをするアンダーハイブの住人達が大勢いたとしても彼らは未だこのシステムに固執しているのがその証拠だ。

だから、彼らは地獄を作り出して安定供給できるシステムを作ろうとしたのだろう。地獄という物は金儲けするには意外と便利な所だ。それもテクノロジーで圧倒し死の商人として第3の勢力で入り込めば、人的損害も最小限に抑えられる。

亜人の子供、ヒトの子という原石を拾っている間に原石ならざる現地人が何人死のうと、そんなものは帳簿にも書かれない些末事なのだ。朝飯の時に家族との話のタネになる程度の価値しかないだろう。

ソレをわざわざぶち壊しにした俺達は彼らからすれば、今すぐ縄で縛りつけて、10ダース以上の罵倒を浴びせながら火あぶり、水責め、焼き鏝と痛めつけて殺したくもなるという物だ。

確かな反旗を翻さない限りは何もしないが、釘は打つ。そんな打算が目に見えて俺は腹が煮えくり返る思いだったが、相手は給料くれる神様で人間様。表面上逆らわない方が賢いだろう。と言っても蔑んでも殴らないだけなのだが。

我らアンダーハイブのヒトは皆ブルーカラー労働者。ホワイトカラーには権力で勝つことができないのだから。

俺達三人は「以後気をつけ、心身ともに気を引き締めて、社会の安寧と安定に努めます」とお決まりの言葉を吐いて一斉に回れ右をした。爺さんは笑い、ボルドーは後頭部を掻いて、自動ドアから出ようとした時、フッカーは俺に言った。

「ターキッシュ君、特に君は私の言葉をよく理解することだ。いい加

減酷い匂いを発しながら帰ってくるのも疲れるだろう？」
　俺は鼻で笑って応えた。
「せっかくですが、一生懸命に仕事しますよ、これまで通りね」
　部屋から出て、エレベーターで地下１５０階まで下に降りている途中、大柄なノーズレス
　が一人ため息を吐きだして愚痴をこぼす。
「お前は相変わらずだな。あとで文句を言われるのは俺だと知っていてやっているのだとしたら唯じゃおかんぞ」
「そう言うなよ、ボルドー」
　おどけて言ってはみるものの、彼は一睨みして威嚇して来た。ボルドーの屈強な体躯に俺も武器なしで勝てるなど思ったことは無いので俺はすぐに先の言葉を撤回し、謝罪した。しかし実際、彼には一定の敬意は払っている。俺達のような前線組が安心して前に突っ走られるのは彼のような後方組のおかげであるからだ。
「人間様に対して怒りを抱くのは分かるが、連中が上司だってのを忘れるな。お前たちのようなベテランまでいなくなれば、お手上げなんだ」
「我々が成果を出している内は切られんよボルドー。奴らなりにも体面があるからな」
　それに対してコルト爺さんは楽観的な意見を述べた。伊達に爺さんになるまで笛吹をやって来ただけはあって、自信はたっぷりだ。仕事場で好き放題やる性質の悪い笛吹の一人が言う言葉にはなかなかの説得力があった。
「お前も私の頭痛の種だ。お前達が出勤する度に私は人間の嫌味と提出書類の経費に増えたドーナツにどれほどため息を漏らしていることか……」
　ボルドーはふてくされた顔をして俺達を交互に見る。過去、俺達が出撃する度に経費の桁が増えたことを彼は詰っている。おかげで彼は本来大好物であったドーナツが経費のゼロに見えて仕方なくなって以来食うたびにストレスを感じるようになったらしいので、そのことで俺達を恨んでいる。

しかし、そんな彼が俺達を切り捨てることは一度だってなかった。
「だが、今回は良くやった。あの世界最大の民兵組織が消えたと来れば、後は残党から子供たちを奪還するだけだ。これで少しは殉職率も減るだろう」
「保護した彼らは？」
「ナノマシンを埋めて言語関係の問題を解決し、心身ともにケアした後で移民学校に送られるだろう。植え付けられたトラウマや暴力の痕跡を消すには時間が必要だが……」
ボルドーは電子煙草を取り出して一旦、疑似的な煙草を楽しみ言葉を続けた。
「生きているんだ。彼らにも幸せになるチャンスは来る。それだけでも十分だろう」
エレベーターの扉が開き、俺とコルト爺さんは左へ、ボルドーは自分のオフィスがある右へと分かれる。
「とにかく今回は後輩も死なせず子供も救って、上々の結果だ。後は私に任せてくれればいいさ」
「ああ、信頼してる」
そう言って俺達は別れ、廊下を歩く。俺の向かう先は更衣室だ。返り血は拭き取って少しは落としたが、匂いがきつくて仕方がない。犬並の嗅覚が無くても酷いと分かるソレは通りすがる全ての同僚の顔をしかめさせた。
「ヒトが頑張ったのに、この仕打ちか。酷いよな、爺さん？」
「前々から思っていたが、年寄に面と向かって爺さんと言うのも中々酷いと思うがね」
「そうか？」
俺が問うとコルト爺さんは頷いた。意外なことに、この老兵は自分が年寄扱いされるのに今更ながら抗議して来た。
「相棒のミナミはいいのか？」
「まだ十代だ。寛容にもなるさ。ところで」
そこでコルト爺さんは話を折り、話題を変えて来た。
「どうだった？　ベッキーと走って、自分はまだ悪党だと思うか？」

爺さんが発したのは、俺との悪党問答の続きだった。彼は笑みを浮かべて俺の様子をそれは楽しそうに見ている。きっと俺が答えを得たことを知っていて、尚且つ俺がどんな回答を手に入れたかを知ったうえで聞いているのだろう。

俺は老人の洞察力に勝てないことを悟り、肩をすくめて答えた。

「案外、そうでもない気がしたよ」

「そうだろ？」

爺さんはやはり、とも言って俺にアドバイスを与える。

「思いは行動に、顔に出るものだ。お前は自分が悪党になった気でいても、そうではないと気づく者がいてくれる。その点、今回はいい相方に恵まれたと思わんかね？」

「そうだな、アンタよりずっと真っ直ぐな奴だし」

俺は全てを見据えた気になっているコルト爺さんにささやかな反抗をする。こうもやられたばかりでは一言ぐらいは反撃したくなる。だが、爺さんはカラカラ笑う。

「その意気だ。皮肉屋でいてくれた方が私も安心する。だが、万一悪党になろうと思った時は私の元に来い。いつでも歓迎しよう」

「お断りだ」

爺さんのお誘いにはっきりと拒否する。爺さんは言ってみれば、趣味で仕事する男で、仕事の方は最低限だ。それを悪いとは言わないが、今の俺にソレをする気にはなれなかった。

「後輩に失望されたくないからな。俺は俺はで行くさ、そうやって俺達はコンビを解消したろ？」

微笑みながら理由を述べ、俺は爺さんと別れた。爺さんはコーヒーを飲みに、俺は着替えて支度をしに左右に分かれた。この後、待ち合わせの約束をしていたので、遅れないようにしなくてはならない。会うのはベッキーだが、その他にも大勢いる。彼らとの約束を反故にするようなマネはしたくない。

「そうだな。だから、二度と迷うなターキッシュ。お前はその道を貫け。それもリズム多き人生だ」

爺さんは昔、俺によく言っていたセリフを俺の背中に向けて放っ

た。俺は一人廊下を歩きつつ、一人リズムなんて求めていない、と小さくつぶやいた。

金のない学生と労働者、時間を惜しむリーマンたちの憩いの場、ハンバーガーショップ。アンダーハイブでは知らないヒトを探す方が難しいマッキンリーバーガー。アルファベットのMの形の看板が特徴的なバーガー店で俺は待つ。

トレイの上には質の悪い油の香りするソイミートバーガーと薄いコーヒーの入った紙コップ。その二つには妙な共通点があって、数世紀前に人間達の間で発がん性物質まみれだとして、不認可された遺伝子組み換え作物が使われているのだ。

こんなものばかりが横行している町だと言い聞かせて口にしたが、酸化した油の香りと安いケチャップ、黄色いだけのマスタードの酸味と辛みが絶妙なまでにマッチしたあんまりな、味の大雑把さに辟易し食いかけのソレとにらめっこし、匂いのきつさからお気に入りの皮のジャケットに匂いがつくのを心配しつつ、俺は足を組んでベッキーを待つ。

「なんで、こんな所で待ち合わせするんだか……」

あの仕事の事を思い出しながら俺は独り言をつぶやいた。彼女の活躍は表彰されてもいいほどだった。初戦でのあのセンスの良さ、戦うごとに学ぶ姿勢と笛吹としての姿勢、どれをとっても満足のいくものだ。

それに俺の心の迷いを彼女は晴らしてくれた。たとえ、それが独りよがりな思い込みだとしても、俺は彼女に感謝している。

俺は彼女の勇姿を思い出す。あれこそが俺の理想だったのかもしれない。

一発の銃声。監獄ともいえる息苦しい場所で響いた音は一人の少

女の叫びのようだった。悪党を背中から撃ち、鋭い眼光見せる彼女の顔には愉悦や相手を殺したことで得られる優越感に浸るような表情は浮かんでなかった。
するべきことをした、職務を全うした者の顔だった。コルトやミナミのような楽しみから殺す類ではなかった。それは間違いなく俺の言った笛吹としての顔だった。
将軍は背中を撃たれて、その場に倒れた。びくびくと痙攣し、必死に生きようと手足をバタつかせていたが、それも長くは続かなかった。
哀れにも、暴虐の限りを尽くしてきた彼は心臓が動きを止めるその瞬間まで、情けを受け取って介錯を受けることも許されなかったのだ。それでも、銃弾一発で済んだのだから、俺達も甘いものだと思うが。
「これで……ケリはつきましたよね？」
ベッキーが構えを解いて、俺に訊いた。確認のために訊いたのだろうと察した。俺は黒く焦げ付いたブーニーハットを拾い上げて答えた。
「ああ、終わった。お前が終わらせたんだ。だがな……」
俺は彼女に近づいて顎を持ち上げた。口の端からは血がにじんでおり、その原因となった行動を俺は咎めた。
「次からは馬鹿なマネは止せ。顔面をスライスされてからじゃ遅いんだ。ケリをつけたきゃそう言え。死なない程度にはお前の我がままに付き合ってやる」
「……すみません、でも……どうしても許せなくて」
素直に謝った彼女に俺はため息を吐いた。安堵からくるものだった。そして、親指で彼女の口端の血を拭き取ってやると痛みにベッキーは少し声を漏らした。
「だが、良い顔だ。お前ならなれるかもな。太陽に」
俺がほほ笑んでやると彼女は意外な表情を浮かべて俺を見た。自分の言ったセリフを返されただけで、そうも驚くものかと疑問を抱いたが俺はこの最悪な戦いを終えて、ようやく手に入れた平穏を崩した

くなかったため特に何も言わなかった。
いや、それだけじゃなかった。何より彼女を認めるべきだという思いが強かった。職務への忠実さを見せ、尚且つ最後まで諦めなかった彼女には称賛を与えるべきだと、そう思ったのだ。
だが、その時彼女への称賛の言葉は俺だけに終わらなかった。あちこちから、声がして牢獄全体がざわめきだした。俺は一瞬残った民兵化と思い、周囲を警戒したがその予測は外れた。耳に飛び込んできたのは怒号でも奇声でもない、子供たちの歓喜の声だった。
地獄からの解放、絶望の根源であった将軍の死が彼らに生気をもたらした。銃声が鳴り響いた後、嵐が過ぎ去った後の静粛は消え去り、彼らの幼い歓喜の渦が巻き起こったのだ。
純粋に誰かの死を喜ぶ子供という物はＴＶの画面で見ていれば、憤慨したかもしれないし、または悲しく思うものかもしれない。だが、俺達にはそんな感情は生まれてこない。
なぜなら、俺達は解放者と言う当事者だからだ。俺とベッキーは此処まで戦って来た。榴弾に吹き飛ばされ、自分の頭に銃を押し付け、ありとあらゆる障害を排除して、泥と血にまみれて、ここまでやってきたのだ。
救いたいと思った願いが叶い、ようやく俺達は報われた。返り血を浴びすぎて、血みどろになった俺達でさえ、彼らは歓迎してくれたのだ、
あれこそが歓喜の一瞬。俺達にとっても喜ばずにはいられなかったのだ。ベッキーは笛吹としての理想をとりあえず実現し、俺は救いを得た。
今まで殺しに酔っている節があったのでは、と疑問に思ってきた。悪党を殺す事ばかりに目がいき、いつの間にか自分が悪党になったのでは、とすら思った。
だが、それは違うと感じれた。あのロシアンルーレットの時、俺は確かに楽しまず、ただ純粋に相方の生を願った。そして、それが彼女に伝わりベッキーと子供を救うと言う何とも欲張りな望みが叶うと言う奇跡が起こったのだ。

その奇跡で皆が救われた。これ以上望みえない最良の結果をもたらした彼女の勇気と健気さには頭が下がるばかりだった。
「ターキッシュ！　ありがとう！」
そんな感謝な言葉を聞いて俺はブーニーハットを目深く被ったものだ。あの時の表情は他人に見せるには恥ずかしく思えたからだ。

再び、現実に時計の針を戻し、俺はカウンター席から窓の方を見た。バイオエタノール車が行きかう都会の喧騒を何気なく見ていると、お目当ての人物が目に入った。
パーカーにホットパンツと実に年相応の格好をしていた。長く伸びた脚は実に健康的で顔もこうしてみると中々だが、額に巻かれた包帯が痛々しく、いささか外見にマイナス的効果を与えていた。
ベッキーは店内に入り、店員にいくらか注文し他後、歩いてきた。
「すみません、遅れて」
「気にするな、ケガは？」
俺が尋ねて、彼女は向かいの席に座りつつ答えた。
「ええ、大分。大した怪我ではなかったみたいで」
「そうか……ならいいんだが」
初仕事を終えたベッキーは初めて見た時と比べ雰囲気が変わっていた。少し大人びたような気がする。あの一週間にも満たない経験で、成長したと言ったところか。
それもそうだ、と俺は思う。酷い話だが、ヒトという物は逆境を超えるのが成長の一番の近道で、そして大勢がそこで堕ちてしまうものだ。現に、あの地獄を乗りこえれば、何かしら人生の哲学やら教訓を得られるだろう。ベッキーは生き残り、それを得た。
悪い意味で変化する場合もある。人生の意味をコンバットハイにスリルに見出して「戦場住まい」になることもあれば平和な日常を欺瞞と皮肉にしか感じなくなり現実をフワフワと風船のように漂う存在になることだってある。
だが、彼女の表情を見る限り、それはなさそうだと思える。あの子供たちの歓声が恐らくは彼女を狂気に走らせることを防いだ。俺の

ように長く戦っていると、俺に対する見方と言うのも様々で、今回は良い方向に終わった。
彼女がほんの少し幸運で、賢いが故に「めでたし、めでたし」で締めをくくれることが出来た。本当に運が良かった。
「でも、不思議な話ですけど……この怪我に関してはそんな悪い気はしない、と言うか……言いづらいですけど、名誉の負傷みたいな」
「仕事に満足できたって訳か？」
「ええ……でも、一番は先輩に関して、ですかね」
「と言うと？」
ベッキーは俺の顔を見て話を続ける。照れ臭そうに視線をずらし髪の毛を人差指で弄る彼女の頬はほんの少し桃色だった。
「先輩が来てくれた時、最初は村で、次はあのロシアンルーレットの時ですけど、今思うと嬉しくて、それに……私の憧れそっくりだったんです」
「……俺が？」
尋ねると、彼女は「ええ」と短く答えた。俺は彼女に確かめるように理由を聞きだすと彼女は素直に答えてくれた。
「先輩はきっと良いヒトだと思います。合理主義ならあの村と私を見殺しにするか、仕事そのものを放棄すればいい。でも貴方はそうしなかった。一番難しい選択をして皆を助けようとした」
俺は黙って話を聞いていた。集中力を彼女に向けすぎていたため、ベッキーが注文した品を届けに来た店員にしばらく気が付かなかったほどに。
「貴方は無茶をするために強くなった……でも、そのせいで、色んなヒトに蔑まれたり、誤解されたりしたんだと思います。ちょうど、私がそう見ていたように」
俺は彼女の頭の回転の速さに驚いていた。自分が過去どう見ていたか、そして俺が一体どのような行動をしてきたか、それら全てを組み上げて答えを作り出していた。しかも、その答えは非情に的を得ている。
勘の良い少女だ。正直言って嫌いではない。

「だが、俺はお前の言う太陽、とやらじゃないぞ。俺は結局、殺しが一番得意なだけだ。お前らが俺を蔑んでも仕方ないさ」
俺は彼女の憧れを一部否定した。確かに俺は彼女の言う通りの部分が確かに存在する。だが、彼女の憧れは俺ではない。俺は全てを照らせる程綺麗ではないし、綺麗でいるもの不可能だと考えている。
「お前だってそうしたように、如何なる正義を持とうと殺しは殺し。悪党と同じ行為には違いない……だが、やるしかないんだ」
口を動かして話し合うより、銃口を向け合うしかない状況がほとんどだ。大勢を救うために少数の悪党を殺すとなれば、聞こえはいいが自分が悪党になっている可能性も少なからず含んでいる。
「救った者に怯えられる……コイツの破壊力は相当の物だ。俺は悪党が嫌いだ、と言ったことがあったな？　なら自分が悪党になったときどうすればいいってなるんだ」
俺は過去仕事をしてきたが、未だに慣れないことがある。子供たちが俺を悪党と同じように見る、あの怯えた目。それが俺の心に巣食う者の根源だ。あんな目を向けられる以上、俺は太陽にはなれない。
「ベッキー、俺はお前のおかげで自分が悪党ではない、と思えるようになった。お前が俺をそう言ってくれたおかげで俺は救われた気がした。だが、これだけは言っておく。俺は太陽じゃない。だがな」
俺は一拍置いて彼女に言った。
「俺を照らしたお前なら、なれるかもしれない」
十代の少女に俺は本気でそう思っていた。俺と言う男だけでなく、あの場にいた子供を救う発端を作ったのは紛れもなく彼女だ。このマーマル、半獣人の少女にはそれだけの力がある。
彼女の勘の良さと、最悪の場所から抜け出した強い心、そして彼女の過去がそうさせているのだ。現実だけを追って来た、追うしかできなかった俺には出来ない真似だ。
「いいえ」
だが、彼女はそれをあっさりと否定した。彼女の瞳には確かな思いを宿した強い光が込められていた。俺は一体彼女が何を思っているのか。一瞬わからなかった。だが、彼女の口からその答えは唐突に述

べられた。
「貴方と言うヒトが居てくれたからこそ、です。私は貴方に照らされたんです」
彼女は俺にそう言った。十五歳の少女の言葉には一切の迷い悪戯っ気も無かった。出会った当初から一回りどころか。二回り以上も大きくなっていた彼女の言葉に俺は胸に熱いものが込み上げてくるのを確かに感じた。
お世辞なしの肯定の言葉。それも俺が諦めていた事について触れた彼女の言葉は俺が長い間欲しかった一言に思えた。数発の銃弾を喰らうより大きな衝撃が体全身に走った。
恥ずかしい話だが、二十代のいい大人がこんな少女に心を突き動かされるとは思ってもみなかった。今だけなら目の前の彼女を女神さまと呼んでもいい気さえした。
俺は彼女に救われた。だが、彼女もまた俺に救われたと言う。仕事上のパートナーに過ぎなかったはずの俺達はいつの間にかお互いをそれ以上に見るようになっていたのだ。そして迷う俺と彼女は互いにお互いの足りない部分を補っていたと言うのだろうか。
俺は彼女に感謝の言葉を伝えるべきだと判断した。だが、悲しいことに普段皮肉屋を気取る俺にとって、感謝の言葉とは存外言いづらく簡単なひと言しか口に出せなかった。
「……ありがとう」
語彙力のない自分を恥じ、俺は彼女から視線をずらした。ベッキーはそんな俺を見て笑った。
「笑うんじゃねえ」
「すいません、でも変に素直じゃない所が可笑しくて」
そう笑う彼女だったが、ひとしきり笑って満足した彼女は席を立ちあがって、俺にも経つよう求めだした。
「じゃ、お互いの親交を深められた所で、一つ付き合って下さい」
「付き合うって何だよ？　どこへ行くって言うんだ？」
彼女は俺の問いに答えた。
「貴方に会わせたいヒトがいるんです」

たったそれだけ答えて、彼女は俺についてくるように言った。俺は素直に従ったが、ふと思う所あって笑った。

戦場とは真逆の立ち位置にいる自分を見て笑ったのだ。

第12話

犬

更衣室で着替え終わった私は下着姿のままロッカーの前で立ち尽くしていた。それなりに清掃されて綺麗なロッカールームで一人自分のロッカーの奥底に放り込まれている自分のパーカーとホットパンツ、いわゆる自分の私服という物を見て硬直していた。

私はそれらを手に取って、少し前の自分を感じた気がした。その服からは前までの自分の残り香が残っていて、僅かに自分の汗の匂いが鼻孔を刺激した。その気体成分が脳に達した時、私は不意にフラッシュバックを覚えた。

視界に映るソレはどうしようもなく無邪気に喜んでいて、もし本当の犬なら耳をさかんに動かし尻尾を振りまくっていたに違いないだろう数日前の私だ。スーツにジャケットを着ただけで夢が叶ってきた気でいた自分を私はため息とともにこき下ろした。

「呑気な奴だよね」

それが自虐だって事にはすぐに気が付いた。昔の自分ほど見たくない者はないと言うヒトを時たま見たことがあったが、今の私がまさにそれだ。だけど、乙女だからという訳ではないが複雑な思いに駆られて見ていて赤面すると同時にあの頃に戻りたい気もした。

未だ手に残るトリガーの感触、肉を切り裂いて骨まで断った白刃を振り回した記憶に鼻にこびり付いた鉄の香り。私にとって、昔の自分は果てしなく純粋無垢で汚れを知らない存在に思えてならない。

たしかに生まれはロクな場所ではなく、刃物を使った刀傷沙汰だって経験して来た。女だてらにマウントポジションを取って男相手に殴り合いをしてボコボコにしたことだってあった。だが、そんなものは生易しいものだったと気づかされた。

そんな痛みは笛吹として働いた時と比べれば羽毛のクッションで殴られた程度の物だ。向うでの体験はそれはもう衝撃的だった。地獄を作る者とそのおこぼれにすがる者、そしてその犠牲者たちの姿を見て、本物の殺し合いをして、自分は大きく変わった気がした。

今なら悪党と見ればためらいなく銃を向けて頭をぶち抜き、この世を少しだけマシにすることも容易く行えるかもしれない。だが、それを素直に成長と言っていいものかは疑問だ。

パーカーの袖に腕を通すと硝煙の甘い香りが一つもしないことに違和感を覚えた。これからデートだというのに香水を付け忘れた女の子になった気分だ。

ヒトを殺せるようになり、その環境に適応していく。それが成長と言えるのだろうか。悪党を殺すことに疑問は無くとも、自分が良いことをしていると言う完全な肯定はできそうになかった。

私はそんなモヤモヤと白黒はっきりしないことに頭を掻いてロッカーの扉を勢いよく締めた。

「なんで、悩むかなぁ……もう」

子供を助けた時には確かに高揚感を覚えた。あの時は自分は彼らを地獄から救い出したのだと実感してらのように無邪気に喜んだ。ハッキリ言ってしまえばヒーローだと思った。

だが、興奮の熱も冷めれば意外と虚しいものだ。自分のあの喜びを素直に受け入れられなくなると言うものだ。戦場から日常へ戻ると、そこには戦場での常識が非常識となるのは当たり前で悪党とは言え殺しを喜ぶと言うのは道徳に大いに反するのでは、と思い不安になる。

笛吹として子供を救ったと思う一方で日常に戻って、自分がしたことに対する違和感が拭えないのだ。これがギャップという物なのだろうか。

ため息を一つ付いて更衣室から出ると服の裾を誰かに掴まれたのを感じて私はそこで立ち止まった。

「……誰？」

「私だよ～」

聞き覚えのある声、振り返ると同僚のミナミがいた。いまだ特殊スーツにスカートの仕事の格好だった。流石にチェストリグやピストルベルトの類は外していたが、それでも私服と比べると幾分か思い装備をまだ身に着けているのには少々呆れを覚えた。

「まだ着替えてなかったの？」
「ベッキーちゃんを待ってたからね」
　ニコニコと屈託のない笑みを浮かべて彼女は言う。コレが私と同い年で私より銃器の扱いに精通していると言うのだから驚く。帰還途中で彼女のバックパックを見せてもらった時、中には巨大なショットガンのようなグレネードランチャーにＸＭ６３とかいうパーツを差し替えるだけで突撃銃から軽機関銃、果てはカービンにもなれると言う銃器のパーツを入れていた。本人曰く、本体は木端微塵になったらしい。
　私は目の前の女の子を見て、悩む自分もいれば、悩まない彼女もいることを実感して口をへの字に曲げた。
「……待ってくれたのは嬉しいけど、着替えなよ。重い装備じゃ疲れるでしょ？」
「別にいいよ？　ちょっとお話したいだけだから」
「そう？」
　一拍間を置いて私は何を話すつもりなのか訊いた。
「で、話って？　体のラインとか？」
「そっちはどうでもいいかな。話したいのはコレだよ」
　心なしか自分の体と私のを一瞬比較した気がしたが、ミナミは笑顔を崩すことなく、一枚の紙を手渡してきた。受け取って見ると、そこには住所と施設の名前「希望の家」なんて一瞬胡散臭く感じる名前が書かれていた。
「お爺ちゃんから言われたの。ベッキーちゃんたちは此処に言った方がいいって」
「私達？　ターキッシュもって事？」
「多分ね」
　私はその紙を細かに見たが、他に大した情報は乗っていないことを確認した。今まで見たことないほどの達筆さで書かれた住所と施設名以外何もなく、彼女の言うお爺ちゃんの意志を汲みとることが出来なかった。
　ただ、何となくイメージでしかないがあの老人が無駄な事をすると

は思えず、何か意味があるとは感じた。
「行けばいいって事？」
「うん、お爺ちゃんによるとベッキーちゃんの知り合いも此処に来てるって言うらしい」
　知り合いと聞いて私は誰の事か、と考えた。そして彼女たちのやろうとしていること、希望の家なんて名前から連想し、知り合いが一体誰なのかという事に気づいた。私はその紙をしばらく見つめた後、折りたたんでパーカーのポケットに仕舞おうとした。
　すると、ミナミが私の手を取って仕舞わせなかった。
「ベッキーちゃん。もしかして行かないつもりじゃないよね？」
　一瞬肩がビクついた。察しがいいことに私の考えていることをピタリと言い当てて来た。私は彼女と視線をまともに合わせないで、ごまかしを図った。
「……いや、ちゃんと行くよ。何を疑ってんのさ」
「行かなきゃダメだよ、ベッキーちゃん。ターキッシュ先輩と一緒に」
　ミナミは私と目を合わせてそう言った。自分より幾分か背の低い女の子にしては妙に迫力がある目に私は嘘を突き通せないと悟った。あの世界で見た男たちの濁った目とは違う澄んだ瞳ではあったが、それ故に瞳の奥の暗い光が私を射していた。
　私は観念してその訳を話した。
「……会いに生きにくいよ、ミナミ。こうして日常に戻ってくると自分が何なのか、って思ってさ。綺麗じゃない私が彼らと会っていいと思う？　私は……不安だよ」
　確かに私は彼らに一目会って、彼らの笑顔を見たいと思うし、その資格だってあるのかもしれない。悪党を倒し、子供を救った。言葉だけ聞けばおとぎ話の王子様と一緒だ。悪い魔女を倒してお姫様を助けてハッピーエバーアフター、めでたし、めでたしだ。だが、実際自分がソレをやってみると違うものだ。
　血にまみれた自分が会いに行くことは避けるべきではないのか。彼ら子供達はとりあえず地獄から脱出した。なら、その地獄で悪党と同じことをした自分たちが会うことで地獄をまた思い出させたら？

子供に恐怖の感情を抱かれたら？
結局はヒト殺しのダーティーウォーカーだ。もう彼らは地獄を忘れて平穏に生きることに集中させるべきで、私達のような笛吹が行っていいものなのか、私は不安に思う。
「会った方がいいよ」
ミナミはそう言って理由を述べた。
「自分を救ってくれたヒトだもの。どんなに汚れていてもヒーローだもの。こっちに来て不安に思う子だっているかもしれない。その子たちの背中を押してあげるのが笛吹じゃないかな？」
出会った時から不思議な子ではあったが、ミナミの語る口は熱を帯びているような気がした。彼女にも思う所があるらしい。その根本は知らないが彼女にとっても笛吹には思う所があるようだ。
「リズムある生き方を求める、それがミナミの望む道なのに。何でそんな事を？」
「私はね、ベッキーちゃん。この世界の生まれじゃないの」
ミナミは自分の出自を明かした。笛吹によって連れてこられた一人という事を彼女は述べ、目元の雫型の痣を指さして語った。
「この痣が証。気付いたら銃を握りしめてた生活をしていてね。その甲斐あってこっちでも習性がこびり付いて離れないの。別にそんな自分が嫌いって訳じゃないけど」
「だから、銃とか詳しかったのね」
「まあ、ね」
彼女は短いスカートの内側に隠れたホルスターをチラリと見せた。そこにあるマグナムオートをよく見るとグリップセイフテイーの塗装が剥がれており、樹脂製のグリップも細かな傷が多く存在した。
恐らく彼女は銃器から離れることが出来ない体質となってしまったのだろうか。いや、リズムある生活を、と言っていたことを思い出し銃器ではなく刺激や興奮と言った類のものだと判断した。
「こんな感じだから、私には無理っぽいから、ベッキーちゃんみたいになるのは。だから自分に合ったやり方をしようと思ってね」
私は彼女の境遇に同情しつつも、彼女がそんな自分の境遇を受け入

れ、スリルに忠実に生きるヒトだと知った。フリスビーを見たら走り出す犬みたいな生き方だ。一瞬一瞬の興奮に走り出す類のものだ。
「だから、好きに生きることが大切なの。だから、ベッキーちゃんにも自分のしたいことをちゃんとして欲しいの。私は笛吹として頑張っているベッキーちゃんでいて欲しいの」
その言葉に私は一人の男を思い出した。懸命に救おうと動き、現実に疲れた男の事を思い出した。私はそのヒトに今のミナミのように、こうであって欲しいと願った人物であった。
ターキッシュ。彼の態度を見るたびに思った。彼の過去から来る呪縛によって自分を悪党と見ている悲しいヒト。きっと誰よりも「笛吹」であろうとしているのに、そうなれないと思い込んで、斜に構えた態度で自分を偽る彼に対して私はミナミと同じ思いを抱いた。
私はそんな思いを胸に抱き、ある決心をした。そして私も同じことをすべきだと思い彼女に向き直った。
「身勝手な意見だね、私の悩みは？」
「会えば解決するかもよ？　それでダメなら次はしないことにすればいいし」
楽観的すぎる発想に私は少し肩の力が抜けた気がした。好き勝手な意見と言えばそうだが、一理ある。確かに飛び込みもしないで怖がっても何も分からない。例え傷心するような事態になったとしても、自分が笛吹をやめることは無い。
子供たちがどう過ごそうとしているのか見たい。自分が救った彼らがどう生きようとしているのか一目見ておきたい。少なくとも、次の仕事までに知っておきたいことだ。
「アンタの言う通りかもね……一回行ってみるのもいいかもね」
「でしょ？」
得意げな顔を見せて胸を張るミナミを見て私は苦笑し、額に軽くデコピンをした。「痛い」と小さく言ったミナミに私は少し咎めるような口調で言った。
「調子に乗らないの」
自分の額を抑えるミナミは不貞腐れた子供のような顔をして私を

見た。この子は本当に不思議だ。さっきまで大人みたいな事を言ってたくせに、次の瞬間には私以上に子供っぽい行動をとったりする。もっとも、向うからすれば私も相当変わっているのかもしれないが。
しかし、他人の心だの思惑だのを完全にしることは出来ない。私はエスパーでもなければ、お馬鹿なカップル相手に彼女らの将来をそれっぽく言い当てる小銭を稼ぐインチキな占い師でもない。ただの十五の女の子でしかない。
「お爺ちゃんの言う通り、素直じゃないな～。先輩とそっくりだよ」
「何か言った？」
「別に。あ、それと……」
失礼な口も聞こえたが、そこは追求せずに私はミナミの話の続きを聞いた。それはコルトのお爺ちゃんから聞いた話らしく、それを聞いた時私は心底震えた。そして、すぐにその情報を頭にインプットして駆け出した。
その事実はターキッシュに伝えなくてはならない。私はそう確信を得た。私などより遥かに長い時間を戦って傷ついてきたヒト、泥を被り続けて疲れ切った彼にこそ知ってほしいことだから。

モノレールに乗って十数分。駅の改札口から出て、常夜の街の中を歩いて行く。あの世界とは違ってヒトを温める太陽も冷たい雨水も降り注がない場所であることを再認識して自分がどんな場所で育ってきたかを改めて実感していた。
空は鉛色と言うより、鉛そのものと言っていい鉄板やらパイプやらで覆われていて閉鎖的な世界であることは否定できない。ちょっと前までは悪しざまに見ていた世界だったが、今は違うと思えていた。
たとえ、お天道様が空に居ても地上に地獄は訪れるのだと知った後では、この世界と言う物も悪くはないかもしれない。少なくとも死と隣り合わせではないのだから。
「で、どこに行こうとしているんだ？」

隣を歩くターキッシュは私にそう訊いてきた。私はミナミから受け取った紙きれをポケットから取り出して、それを彼に手渡した。ターキッシュは最初は何気なくその紙を眺めていたが、少しすると目を驚きに見開かせた。
「おい、コイツは……」
「コルトさんから、ついでにミナミから言われましてね」
ターキッシュは苦笑してその紙をポケットに仕舞いこんで足を止めた。私が彼が足を止めた理由を何となく察しつつ、彼に向かってわざとらしく小首を傾げた。行かないのか、と尋ねると彼は気まずそうに頭を掻いて、私から視線を逸らした。
「ベッキー、俺は……行かない方が正解じゃないか？」
「どうして、そんな事を？」
問い詰めると彼は少し言葉を詰まらせた。彼がその答えを言う前に私が代わりにその答えを、恐らくは彼の思考を言葉にした。
「大丈夫ですよ……怖いのは一緒ですから。でも、貴方に会わせたいヒトがいる。私だけじゃ、多分ダメだと思いますから」
「俺は」
ターキッシュは一瞬言葉を選ぶために口ごもり訊いてきた。
「お前とは違う。お前はこれからだが、俺はもう数多くの非道をしてしまっている。そんな俺が彼らと会っていいと思うか？　俺は……思わないね」
悪党を殺すことに疑問は持たないが、悪党とご同類の自分が子供と会うのには疑問を感じざるを得ない。私も少し前まで思ったことだ。しかも彼の場合は私とハ比べ物にならない程の修羅場を経験しているからこそ、その根は深いことだろう。
戦えば戦うほど彼らが眩しく自分がいかに堕ちて行くのを感じていく。そして戦うのをやめれば、それ以降誰かを救うことは出来なくなってしまう。より善きことをなすために誰よりも悪行に身を染めて行かなくてはならない、という矛盾。
笛吹として子供を救うことを願うたびに良心をすり減らしていく。彼はもう何度もソレを経験し心はきっと摩耗しきってしまっている。

だけど、彼にとっての私はまだそうではないと考えていることだろう。
　でも私は違うと考える。
「私は……思います。先輩はやっぱり会いに行くべきだと思います」
「……何故だ？」
「ミナミから聞きましたよ。前までは偶に顔を出していたって」
　ターキッシュは目を僅かに釣り上げた。別に教える気もなかったことを知られていたことに憤慨し、誰がその情報を流したのかを察した。
「爺め、余計な事を」
　此処にはいない自分の先達を罵倒した彼に私は一歩近づいて彼のすぐ目の前に立った。子供達、とりわけあるヒトに彼を合わせるたびに今私は持てる限りの言葉を用いて彼を説得しなくてはならない。私だけではだめだ、それでは意味がない。同じ笛吹、そしてより長く戦ってきた彼こそがそこに赴くことで意味があるのだ。
「私は昔名も知らない笛吹に支えられた。笛吹は誰かを照らせるって思えたから、私は笛吹になった」
「だが、俺は」
「言ったはずです、貴方は私を照らしたと」
　ターキッシュは何の銃器も持たずに、一人で子供と私を助けるために、ロシアンルーレットと言う名の処刑台に上った。深淵のような闇の中、彼の伸ばした手は確かに救いになった。その彼が自分はまだ子供達と面と向かうことが出来ないなんてことはあまりに寂しい話だ。
「貴方だって誰かを照らせるヒトです。ですから、此処に行ってソレを確かめてほしいんです」
　私はそんなターキッシュに彼が照らしたヒトに会わせたい。彼にもう一度かつて目指したであろう彼の「笛吹」を復活させたい。たとえ、それがすっかり短くなった蝋燭に火をともすような行為だとしても、彼の最後の心の壁を崩すきっかけとなって欲しいと願うのだ。
　ミナミに言われて気付いた
「無理なお願いかも知れませんけど、会ってほしいヒトがいるんです。

会えばきっと変わると思います、だから」
　ターキッシュはしばし考え込んだ。腕を組んで私を見る目は意外と優しいものだった。迷うのも当然だ。いかに今回の仕事が特異な例で笛吹としての自分を考え直すきっかけだったとしても、早々と決断を下すのは容易じゃない。
　子供達と接し何かを取り戻せるという淡い期待とトラウマが再びおこるのでは、と言う恐怖。その二つが螺旋のように絡み合って彼を迷わせる。私より大人の彼が悩む、それは一見すれば情けないように見えるかもしれないけど、実際は違う。
　大人だから悩むのだ。まだ十五の私とは違う。数々のヒトを救って来て、より多くの非道を見て来た大人だからこそ子供たちを、自分をより深く考えるのだ。
「お前は俺にわざわざトラウマと向き合え、そう言っているんだ。わかっているか？」
「分かってるつもりです」
　ターキッシュは私の顔をしばらく見つめた。何かを探っている、と私は感じた。しばらく、そうしていると思っていると彼は一度深呼吸をした。とても深く息を吸いこんで自分を落ち着かせようとしているのが目に見えて分かった。
「お前はサドかマゾか分からん奴だな。俺にトラウマと向き合えと言い、その口で自分も不安だって言う。せめてどっちかだったら、俺ももう少し簡単に答えを見つけられたろうに……」
　その口調は自嘲気味だった。せめてどちらか片方なら言い訳の一つでも作れた、と言っているようだった。そんな彼の身上をくみ取ろうと思っていると突然、ターキッシュは私の両腕を掴んで顔を近づけた。普段ならセクハラだのと口を尖らせたところだが、彼の表情を見ると私はそんな事できなくなっていた。
「俺はハッキリ言って行きたいと思わん。また、あの目……恐怖を宿した目で見られたりしないか、と思うからな……だが同時にだ。そうでないと信じる俺もいるんだ。わかるか？」
「ハイ」

ターキッシュは喉を鳴らして生唾を飲み込んだ。喉が渇いて仕方ない。不安からくる行為だった。
「だが、お前が俺にその可能性があると言うなら、俺はそれに賭けてみてもいいと思うんだ。だから」
「来てくれますか？」
私は確認を取るように訊いた。すると彼はいがらっぽい声で「ああ」とどうにか答えてくれた。その時私はその場で飛び上りたくなった。ターキッシュがＹＥＳと答えてくれたのだ。
彼の言うトラウマを私も味わう羽目になることは怖く思う。また、彼にもう一度ソレを体験させることは身勝手で申し訳ないと思う。子供たちにとって今の自分が怖いと思われるのは不安だ。それを既に知っているターキッシュなら尚更のことだろう。
でも、それらを含めて受け止めなくてはならないのだろう。汚れを被っても為さなくてはならないのが私達だ。その汚れ故に蔑まれても、拒絶されても笛吹としての勤めは果たさないといけないのだ。あの世界での出来事だけでも私はそう確信できた。偽善だから救わない、感謝されないから救わないなど言えるわけがない。
目の前に蹂躙されつくされた女児を見ても、偽善だから救わないとほざく者がいたとしたら、その彼ないし彼女は偽善ではないにしても悪であることは確実で、私達はそんな事をしてはいけないのだ。
そして、だからこそ私達は会う必要がある。自身が子供達からどう見られているのかを知り、その上で彼らの現在を知って彼らがこの世界でどう生きていこうとしているのかを見る必要がある。
彼らの未来を見守り、その上で自分たちの立ち振る舞いと言う物を知ることだ。怖くても、子供たちに会い、笛吹としての自分が何をなしたのかを見る。
その上でターキッシュに希望を、と願う。逆の結果となる可能性もあるが、私の足りない頭で思いつく方法はこれしかない。
私達は重い足取りで目的地まで再び歩き出した。時間的距離にして五分ほどの距離のはずだが、妙に遠く思える。この大きな箱庭のような世界で、まるで千里の旅路にでも出かけたかのように

希望の家、安直なネーミングセンスによって名づけられた施設の前に来て私達の前に立ちはだかったのはアンダーハイブでは珍しい鋼鉄の門付きの清潔感溢れる白い巨大な囲いだった。
囲いの向うには巨大な館のような物が聳え立っており、周りを明るくするためのライトをこれでもか、と言うほど照らし施設だけでなく、その周辺も明るく照らしている。
普通、この地下世界ではマンションやアパートと言った集合住宅が一般的で、少ない土地に何人もの亜人を押し込むのが習わしだ。私が通った学校でさえ階層構造の建物で、階ごとに教室や体育館が詰められていたほどだ。
だから、こういった建物は珍しいのだ。そんな奇妙な建物の前に立ち、これから子供たちに思うと喉がカラカラに乾き、暑くもないのに汗がにじみ出てきた。しかし、こんなご立派な建物の前でいつまでも右往左往してても埒が明かないと判断したのか、ターキッシュが私の代わりにインターホンを押した。
「誘ったお前が俺より怯えんな、馬鹿」
「すいません、でも先輩も指が震えてましたよ」
「当然だ」
ターキッシュは吐き捨てるように言った。
「撃ち合いなんぞより、よっぽど怖いからな」
偉大なる先達は引きつった笑身を浮かべていた。彼が言うのだから、きっとそうに違いない。実際私もこれからどうなるか全くわからない。わかっているのは彼に会わせるべきヒトがいて、彼と合わせる、それだけだ。
インターホンの向う側から声がして、何しに来た、お前は誰だ？など数々の質問に答えていき、最後に笛吹の証明書をターキッシュが見せると、分厚い門のロックが解除された。
重苦しい音を引きずって門が開かれると、そこには大きな庭が広

がっていた。いや、公園と言うべきだろうか。砂場や滑り台、ジャングルジム等の遊具が置かれていて、そこで子供たちがはしゃぎまわっていた。
鼻にはバターの焼けるいい匂いが微かにして、それがパンを焼くものの匂いだと気づくのにそう長い時間はかからなかった。
多くはないが植物も植えられていて、グリーンの環境を作られていることにも感心していると、子供たちが自分たちに好奇の目で見ているのに気付いた。皆一様にここにはいない年長のヒトに疑問符を浮かべているようだった。
隣のターキッシュは多少顔を青くしているように見え、辛そうにも見えた。私はそんな彼の隣について「一緒ですから」と小さくつぶやいた。すると、彼は作り笑いをして「ああ」と短く答えた。
そんな私達の元に施設の物が現れ、用件を詳しく訊いてきた。デニムのパンツにTシャツの上に薄いピンクのエプロンを羽織った年配の女性に目当てのヒトがいるかどうかを聞こうとした時だった。
唐突に私の耳に「お姉さん!」という幼さこもった声が届いた。
私は聞き覚えのあるその声に反応して、振り返るとそこにあの少年がいた。私はこの時神様とかいう存在を一瞬信じた。目当てのヒトが向うからやって来たのだから。
「会いに来てくれたんだ、お姉さん」
「うん、アナタに会いたかったし、会わせたいヒトが居てね」
少年は察しがいいらしく、すぐに私の隣のターキッシュの方を見た。少年は自分より年のいった男に向かって頭を一度下げて挨拶をした。
「こんにちは」
「ああ、こりゃどうも」
「ターキッシュ……さん、だよね?」
少年が訊くとターキッシュはぎこちなく「ああ」と答えた。彼は不安そうな顔をしていた。これから何を言われるか、それが彼にとって恐ろしく映っているのが目に見えて分かった。またしても、拒絶されるのではないか、という恐怖心と彼は戦いつつ目の前の少年と普通に

話そうと懸命になっている。
私はそんな彼に手助けはしなかった。と言うよりできなかった。自分が一体何かしたところで彼自身の問題を解決するのは彼と少年だけで、私はただ心の内で祈るだけだ。
少年はターキッシュをしばし見つめていた。牢獄に居た時とは違う輝きをどうにか取り戻した目が彼を捉えていた。
「思ったより怖い顔をしてるんだね」
「……そうか？」
ターキッシュの顔が一瞬落胆に染まったと思った矢先、少年は言葉を続けた。
「でも、お姉さんと一緒で優しい目なんだね」
ターキッシュはその言葉を聞いてほんの僅かだが、体を震わせた。よく注視していなければ分からない程小さく体を揺らしたのだ。そんな少年を見ていると彼はいきなり現地の言葉を使って何かを呼んだ。
するともう一人、少年によく似たヒトが私達の前に現れた。その子の正体はすぐにわかった。彼の弟に間違いなかった。
「弟を……助けてくれてありがとう。笛吹のお兄さん」
少年は幼い弟と一緒に頭を下げて礼を言った。その時、時間が止まったようにターキッシュは動かなかった。少年たちの方を見て、彼は拳と唇の端をキュッと締め、何かに堪えているようだった。
彼はしばらくして膝を曲げて目線の高さを少年たちに合わせた。時折、目元をこすりつつ彼は少年たちに訊いた。
「……ここでの生活はどうだ？」
「お日様が無くて慣れないけど、頑張ってるよ。今算数を習ってるんだ」
「算数か……難しいか？」
「うん、掛け算がね」
ターキッシュと少年は一見すると他愛のない会話を始めた。施設での生活についてターキッシュが訊き、少年が答える、という単純なものだ。でも、子供からの恐怖に怯えていた大人と地獄から日常へ戻

ることが出来た少年の会話は内容など関係なしに二人にとって深い意味を持っているに疑いはない事は確かだ。
二人にとって戻らないと思っていた物が戻って来た、それだけで彼らは十分に報われた、と言えた。
「算数教えてくれないかな、ターキッシュさん」
そんな中で少年がターキッシュにお願いをした。おずおずと頼み込んだ少年にターキッシュは反応が遅れた。少年がもう一度聞き返して、ようやく反応して答えた。
「ああ」
「本当に？」
「ああ、何でも教えるさ」
今の彼は微笑んでいた。戦いの場で見せるような笑顔ではない、大人の本心からの笑みだった。彼は今ようやく報われた。いや、正確に言うと彼がその機会を恐怖心から自分で逃していただけで、本当はいつでも得られた機会だったはずだ。でも、それが今までできなかった。
それが叶った今、彼はいつものニヒルな笑みを止めて、本当の笑みを浮かべることが出来たのだ。私がそんな彼らを見守っていると、少年は私の方にも振り返った。
「お姉さんも」
少年は私にもそんなお願いをしてくれた。私は思っても見なかった事で多少は面食らったが、すぐに了承した。どうやら、私も肯定されたようだった。少年とその弟は私たち二人から算数を教えてもらえると喜び、私達より先に教室があると思われる方に駆けて行った。
その後ろ姿は本当に子供そのものだった。
「でも私、教えたことないんだよなぁ」
私はそんな二人の背中を見ながら、そう呟いた時、ターキッシュは鼻を一度すすって私に言った。
「教えるのは簡単だよベッキー。大分昔だが、トラウマがつくまでは教えていたこともあった」
「だから、お勉強は大事だって言ってたんですね」

「ああ、現地で教えることもあったからな……」
言われてみれば、彼と共に少年の世界に行ったとき、彼は世界を学べと言って簡単に歴史や風土について述べていた。彼は本当に笛吹として、世界中を走り続けていたのだと改めて認識した。
「じゃあ、教えてくれますか？　ターキッシュ先生」
軽い冗談で聞くと彼は二カリと笑って応えた。
「ああ、勿論だとも……相棒」
彼にそう言われて私は笑った。相棒、犬なんて呼ばれることがある私のようなヒトにはピッタリかもしれない。私はターキッシュに自分を生き残らせてくれたこと、笛吹としての姿を見せてくれたことを順に思い出し、その背中に小さく言葉を放った。気恥ずかしさから、彼に聞こえない程の声で私は言った。
「……ありがとう」
この決して綺麗ではない世界で気高くあろうとする先達に、生き方を見せてくれる先生に一言、礼を告げた。